初冬の山

津村信夫

鎌倉文庫版

在りし日の著者

初冬の山

序にかへて（小説の作法）

室生犀星

津村君の小説はいづれも小ぢんまりとした、氣の利いた幾つかの情景からなり立つてゐて、その構圖のあひだに小説をかがる用意が見えてゐる。そんなかがり方を何時の間にか呑み込んでゐたので、津村君の小説をよむたびに心丈夫さを私はおぼえてゐた。この幾つかの情景を組み立ててゆく作法は、小説の初歩であり奥義でもあり祕密でもあるのだ、そして小説の存在するかぎりそれのえらび方によつて、小説の榮えも利きめも冴え方もある。これはそとから指導されても天分がきれぎれに冴えて出ない作家にあつては、何にもならない只のならび方になつてしまふ。構圖が心理的にはたらかねばならないときには一層深いきれぎれな才能がいるのだ、何時の間にか津村君はそのさぐり方に頭を置いてゐたので、私は津村君の小説をよむたびに頭のよいことを津村君のためによろこんでゐた。大抵の小説は一度見せてくれたが、私は大抵その作品をこれくらゐならいいだらうといふふうに批評をした。それほど無理に捏げてはならない優しいきやしやな骨格があり、それはそのままにして置かなければ旨くそだたないために、私はべつの私の小説作法のほかの見方でそれをよしとしてゐた。どの作品も大して失敗して

ゐない所以は小ぢんまりとした旨さがあつたからである。この旨さは育ちの良さであり人がらの品格から出てゐるものであつて、ただちに誰にも匂うてゐる品格ではない、津村君の育ちのよさが行文にしみて出てゐるといふことは、匂ひのある作家かどうかといふ區別にまで津村君の位置をたかめてくれるものである。いはゆる小説のよごれを見せず、秋の野のやうに澄んでゐるのも、津村君のはなやかさうに見える性質の一部分が、小説といふ廣い世界に一つの花園をひらいて見せてゐるからだ。

小説の原稿を携へて僕をたづねて來る津村君は、陽氣で何時も愉しさうであつた。原稿は少時は見せずにゐて僕から原稿を持つて來たね、見せたまへといふまで座の傍に置いてゐた。二つに折らずに大切にボールの鞄のやうな包に入れ、原稿紙は大判のものであつた。津村君の死はいとしい、小説もいとしいがそれよりもなほると信じてゐた死はいとしいかぎりである。私の疎開先である輕井澤ではよく泊つたし、泊ればはなやかに話がはずんだ、そんな人を此處でいろいろ考へることは津村君の小説にある信濃といふ國を、夜をこめて感じるやうなものである。どれも見覺えのある景色が書かれてゐる物語は、やはり少しか仕事をしない人の數少なさが目に立つ、少しか仕事をしない人の叮嚀さと、よそから見たいとしさとは津村君をおもふと溢れるやうである。

初冬の山（序詩）

淸らなる山のをとめの
巫女舞の
ひとときすぎて
手にもてる笹の葉ふれば
その面（おもて）
紅白散りぬ
十あまり三つと云ひしか
笛の音に笙の音冴えぬ

若くして
われもゆきたり
信濃なる山のみ社（やしろ）
その山の笹わけ入れば
おぼつかな
午後の日は翳りて
ときじくも
空にひびけり
雪よばふ雷（いかづち）の聲

坊の娘

一

秋山に來て見ると、もう三度ばかり雪が降つたあとで、山の林はすつかり素枯れてゐた。もつとも、麓の方や、寶光社邊でも、紅葉はいく分殘つてゐて、お宮の石段の前で、まるで、扇をさつと開いたやうな、見事な一枝を見かけたが……

私は紅葉の美しさを認めぬのではない、然し世の觀光者流に、秋山にそれのみを求めようとは思はない。寧ろ、黄ろく素枯れた林の風情が、どうかすると一層好ましい。

私は戸隱登山バスの中から、こんな風景を見かけた——

それは黄ばんだ林の中であつた。午後の日が靜かに、奥深く射しこんでゐた。林の中には流れがあつた。三人ばかりの學校歸りの少女が、みんな同じやうな美しい色の三尺帶をして、その上から例の山袴を穿いてゐたが、その流れの傍にしやがんで、水を兩手ですくつては飮んでゐた。なんの音も聞えない、私は顔見知りの戸隱少女はゐないかと、窓から身を乘り出したが、それは無駄であつた。然し、何か美しいものを見たと云ふ感慨は、しばらく消えなかつた。

中社の假宮が建つて、もう數日はたつてゐた。燒跡には、黑痕鮮やかに「昭和十七年四月二十五日午前近火御炎上」と誌るされた木の札が見かけられた。

朝と晩には必らず鳴らすお宮の太鼓も二三日前からきこえるやうになつたが、雨の日や曇つた夕方は、太鼓の音も冴えないと見え、坊の部屋まで響いてこなかつた。

夜の十時頃、爐端にゐて、どうかすると鷄鳴をきいた。

「どうして、あそこの鷄は今時分に鳴くのでせうね」

坊のお內儀さんは、よくそんな事を云つた。

鷄はこの夏頃から、傳說の「かまど池」のある古い屋敷で飼はれてゐると云ふことだつた。

「それでは、淸子さんの仕事が又一つふえましたね」

私がさう云ふと、お內儀さんは「どうして、一つふえたどころか、淸ちやんのお仕事は全く大變ですよ」と、いつもながらの、山の人らしい深い思ひやりを示して、溜息をつくのであつた。

二

淸子も戶隱中社に昔から殘る、二十數軒の坊のうちの、とりわけ古い家の娘であつた。

淸子の父は、丁度淸子が十五歲の年に亡くなつた。男の兄弟はなく、姉が二人ゐたが、相ついで嫁ぎ、山をくだつて行つた。あとに殘つたのは、年老いて病身な母と、二人の妹達であ

つた。

深い山の中で、神に仕へ、家の傳統を守つてゆくには、淸子の家にも、後嗣となる人が必要であつた、男の兒がないとすれば、他處から養子を迎へなければならない。然し、この山の坊の家々に適當な人が見當らない場合、養子を、他國から迎へると云ふことは、永い因襲の作用してゐる屋敷にとつて、これは容易な事ではなかつた。この信濃の山深く、風霜を厭はず、養子にくると云ふだけでも、條件は惡かつた。その上、農家の人でも、敎員でも、どんな職業の人でも差支へないと云ふならまだしも、坊の主人は、神職と云ふ一つの業に限られてゐた。

當然、婿を迎へて後をとるべき、上の姉達は、そんな煩はしさから脫け出るやうに、ひとり去り、二人去りして、この古い山の屋敷をあとにし、町の方へすゝんで嫁いで行つた。

「あゝ、どうしたらよからず、これでは、家の跡が絕えるといふもんだ。淸子や、お前だけは、いつまでも母さんの傍にゐてくれや」

年老いた母が、心細さうに、さう云つて溜息をつく頃には、もう淸子も娘の盛りにちかづいてゐた。

色の白い、目もとの凉しさうな、それに體もどちらかと云へば大柄な方で、家數も少ない戶隱の中では、一寸人の目につき易い少女であつた。

姉達だつて勝手に山を下りて行つたのだから、それにまだ妹も二人あることだし、何も淸子にだけ重荷を押しつけるには當

らない、いい嫁入口があれば、身輕にゆけばよいのにと、そんな事を云つてすゝめる山の人もあつた。然し、そんな場合に、清子はよく快活な笑ひにまぎらして、別にそれを否定もしなければ、肯定もしなかつた。

「どんなものでせう、私なんか、ほんとに山の娘だから……」

實際、清子は山の娘と呼ぶのに、相應しいものもあつた。さう云はれてみると、この娘だけは、戸隱において置きたい、そんな氣持をも人々に抱かせた。

春から夏にかけて、時候のいゝ間は、坊に來て泊る客も多かつた。講中の、二十人三十人と云ふ參拜も絶え間なくつづいた。老いた母が中風の氣味で、臥床してしまふと、あとは、幼い妹達の先にたつて、そんな泊り客の一切の世話から、お宮の方の仕事まで、清子が主となつてやらなければならなかつた。

「秋はほんとによう御座いますわね、都會のお客さん達がお歸りになつてしまふと、一寸氣の拔けたやうになりますが、また、本當に自分の體になつたやうで、きのこ採りや、山遊びが出來て……」

清子はよくそんな事を云つた。

然し、山家の秋は秋でまたそれ相應いそがしかつた。それにしても、山の秋の美しさは――、誰だつて、この季節の中に立つてみると、この世のものではない、別な一つの美しい時を感じ

るに違ひない。
その美しい時は、又同時に極めて短かつた。戸隱村營牧場で、一夏の間、放ち飼ひにされてゐた牛や馬は、丁度歐洲のアルプス地方の風俗のやうに、九月の聲をきくと、さつさと麓の方へ降りてゆく。もう間もなく、栗の實が屋根をうち、破れた障子紙が、心細いやうな音をたて始める。さうして、戸隱は、もう全く秋風の中にある。

「清子や、俺の奥歯のところを見てくれや、骨がさゝつたやうで、痛くてしやうがない」

夜長になると、手の不自由な母親は、床の中から清子を呼び、なんとはなしに、傍にひきつけて置きたいのである。それに母親の病氣はもう久しい、どうかすると、氣持がじり〳〵して來て、清子をこまらせるやうな事もある。

夏の間は、清子のゐる屋敷のどの部屋にも客があつて、燈が赤々と點つてゐる、それが秋風と共に、一つびとつ消されてゆき、建物全體が一つの大きな影になると、もう燈の明るいのは、爐のほとりだけになる。戸隱の爐は至つて大きい、その中でも清子の家のは格別だ。そんなところにも、清子の死んだ父の、華美な性格があらはれてゐた。

清子は一日の仕事を終へ、母や妹達が寢てしまつたあと、よく爐端に一人でぽつねんと坐つてゐた。

宵のうち、熾んに燃えてゐた爐の火も、漸く消えかゝつてゐる。

そんな時、清子はひよいと、死んだ父のことを思ひ出した。山を下りて行つた器量よしの姉達のことも考へた。そして、家に男の兄弟がない事を殘念に思つた。

「ほんとに、兄さんでもゐてくれたら……」

それは清子の切實な願ひでもあり、又一つの憧憬（あこがれ）でもあつた。

清子は口癖のやうに「私はいそがしいので何も考へる暇がない」と云つた。山の老人（としより）達はそれを聞いて「いそがしいのが一番結構、若いときに苦勞をしときや……」と慰めてくれたが、年頃の若い娘の中には、「清子さんは何が樂しみだらず、氣なしでゐれば、若い時もどん／＼すぎてしまふに」と笑ふものもあつた。平常は何氣なく聞き流してゐた、それらの人の言葉の意味を、靜かに思ひ浮べてみるのも、秋の夜の爐端であつた。

美しい戸隱全山の紅葉が素枯れ始めると、もう十一月の聲をきゝ、雪が降る。それだから、秋と一口に云つても、ほんとに時候のいゝのは、精々十月の半ばまでである。

「今朝（けさ）はいらく感じやす、奥山にはもう雪がきやしたで」と炭燒の親爺が告げてくるのは、まだ麓の方では、紅葉が錦を一杯に織りなしてゐる頃だ。朝外出（とで）に、もうアルプスの山々が眞白に見えるやうになると、數日たつてから、坊の庭にゐて、清子は、どこか遠い山脈のあたりで、まるで鈍い風音のやうなもの

の起きるのをきいた。
「やれ寒いと思つてゐたら、清子、雪おろしぢやないかや」
母親は部屋に入つてくる清子を見て、さう云つて呟くと、夜具を深く引つかぶつた。
雪おろしと謂ふのは、雪の來る前に、高原や山脈地方で聽く雷のことである。
かと思ふと、又二三日は、まるで秋の日が山地に還つて來たかと思はれる位、美しい、いい日和が續く。然し、これらの美しい日和も、清子や山の人々にとつては、決して樂しい時ばかりではない。
奥の萱場を刈らねばならない。木片集め、落葉ひろひ、薪木背負ひと、冬の仕度に全くいそがしい。それに、乏しい土地を耕やした山の畑では、大根掘りが始まる。
大根掘りのすんだ、茫々とした畑を眺めてゐると、山の人々は、まるで氣が抜けたやうになる。さうして、そんな夕方、飯綱山や、西岳、表山の姿が、最後の光りをあびて、くつきりと、洵に鮮やかに、人の目に映つてくる。
子供達は落葉ひろひにゆく、重い薪木を搬ぶのには、お内儀さん達に、男達も加はる、全く冬の仕度には、坊の人々も農家と一般である。さうして、男手のない清子の家では、そんな山仕事にも、この娘が中心とならなければならなかつた。
「清ちやん、お前んところぢや、いつやるだね」
「明日あたり、やらずと思つて」

さうして、よく晴れた山道に、もうその翌日は、ボロを纏つた薪木背負ひの清子の姿が見受けられた。

清子は色の白い娘だと云つた。そんな色白なこの娘が、何の粧ひもしない勞働着の時はどうかすると、反つて一番美しく見えるときでもあつた。つまり、女の若さだけが、はつきりと、その面持や姿に現はれてゐたから――

清子は大抵の人とは親しくなれた。娘らしい要愼はあつても、生來の素直さが、きつとさうさせたのだらう。清子が一人、加はると、山仕事も不思議に捗つた。遠い山路も、いつのまにか來てしまつた。

越水の原は、廣々とした、山でももつとも美しい眺めの一つであつた。ここに來ると、戸隱高原と謂ふ意味もはつきり納得させられる。秋もおそい頃になると、遠くの、素枯れた落葉松の林も、その奧の方まで透いて見える。紅葉の時節もいゝが、冬のちかい、空の少し曇つたやうな日に、この原の中の一本道をあるくと、神樣の鎭ります山は、ものの音とてない。

途の途中には、古い道しるべが立つてゐて、中院と奧の院の在り所を教しへてゐる。さうして、そんな石の面には、女人結界と云ふやうな文字も見られる。昔は、戸隱參拜の女の人は、その處までしか來られなかつたものだと云ふ。

清子も道すがら、その「女人結界」に目が觸れるたびに、昔の女の境涯と云ふやうなものを、何とはなしに思ひ起した。

「どうだや、清ちやん、道も半分(なから)來たやうだ、此處らで一服と

しようか」
連れの人が聲をかけると、「あゝ、もう一つきりだから」と清子はさう云つて、肩の荷をおろさうともしなかつた。
清子は、越水の一本道を、ゆつくり歩きながら、どうかすると、唄を歌つたりした。
「清ちやんの父さんもいゝ聲だつたが、お前樣は又格別だ」
男の連れがさう云つて褒めると、清子は一寸顏を赤らめて、
「あれ、へうきんな」と打ち消した。
「清ちやんは働き者だ。屋敷の女主人公も同然だ。あの子なんざあ、父さんさへ生きてゐなされば、どうして、お孃樣で通せるものに」
村人がそんな蔭口をきいて、清子の後姿を見送るのも、そんな山仕事の時であつた。

清子も小さい頃、十四五歳の少女時代にはよくお宮の巫女舞に出た。
戸隱の御神樂は、今では人の多く知るところである。
古風な、平安朝式の舞事であつて、降神行事、水繼行事、御禊行事、御返幣の舞、三劍行事、巫舞、隨神舞、岩戸開、直會舞、の九つを數へるほかに、なほ、吉備樂倭舞等があつた。この舞事は、同じく戸隱山中の、天細女命を祭る日の御子神社の神官栗田氏の幕下の某の古い巫女の家に、昔から傳へられてゐ

た。さうして、これに奉仕するのは、坊の神職達と、娘達に限られてゐた。

御神樂獻奏のある日、淸子に白粉頰紅と、化粧をほどこしてくれるのは、母親か上の姉達であつた。淸らかな白衣に、緋の袴を穿いて家を出てゆくときは、淸子も心中得意になれた。

岩戸開の舞はなんと云つても、戸隱神樂の中心であつた。天細女命のお面を被るのは男の人であつたが、その柔和で豐頰なお面を一度被つてみたい、淸子はそんな事も考へた。魁偉な手力雄命の出現は、まるで疾風のやうであつた。そのお面は夜半に思ひ出すと、一寸こはかつた。それを母親に告げると、「お前は何をお云ひだね、あの神樣がこの山にお住居なさるのだよ」とたしなめられた。

母親の言葉をきくと、淸子は、子供心に、幻に、神樣の御姿をよく思ひ描いた。さうして、そんな時、さや〳〵と木の葉を吹く風音と、木の枝の間からも透いて見える、十月の山の空は、何か別のもの、たいへん美しいこの世ならぬもののやうに思はれてならなかつた。

神樣と謂へば、戸隱奧社には、今一つ別の神樣が祭られてゐた。それは九頭龍樣であつた。父が機嫌のいゝとき、その神樣のお話もしてくれた。九頭龍樣は、さきにこの山にお住居であつた。所謂先住神である。さうして手力雄命が、伊那をへて遙遙筑前からおこしになつたとき、山麓の沼中に立つて、命をお迎へしたのが、この九頭龍樣であつた。九頭龍樣のお社は、奧

社の側にあり、その社背はすぐ山に續いて、深い洞窟に通じてゐた。その洞窟が、九頭龍權現が今なほおはす神域であつた。父の若い時のことである、お宮番にあたつた人は、毎朝供飯として、たきたてのお米を九頭龍樣にさし上げた。すると夕方になつて、神樣が召し上つたと見えて、お米は一粒も殘さず空になつてゐた……

淸子は小さい時から、そんな話をきかされてゐたので、今でも奥社道で、大きな蛇を見かけると、「あゝ、九頭龍樣のお使ひだ」さう思つて、そつと傍をよけて通つたりした。

春の戶隱の大火は、早朝の出來事で、中社のお宮と、舊別當職である宮司の屋敷を一瞬の間に炎上させてしまつた。

それは丁度、普通であれば、山で七年祭の行はれる春であつた。七年祭は、長野善光寺の七年目ごとにある御開帳と、時を同じくしてゐた。然し、戰時下のことであり、今年はそれもなかつた。

然し、七年祭はなくとも、戶隱の春は、年老いたものにも、若い人々にも、ほんとに待遠しいものであつた。

或る日、長野の方から、久し振りに登つて來た、鳥飼ひの老人が「今日は、上野までかと思つてゐたら、バスが寶光社まで來やした」と話してくれると、冬の間、交通も杜絕え勝ちで暮してきた山の者には、まるで生き返るやうな喜びがあつた。さ

うして、乗合自動車が寶光社まで通ふやうになつたと云ふ事は、平野の春がもう山の入口まで來てゐるのだ——そんな風に思はれるのであつた。

「どうだや、清ちやん、善光寺様の櫻は、へえ盛りをすぎたが、この二十日からは、町にサーカスが來てゐる。俺はこの年になつてもまだサーカスせえものは見た事がねい。こんどこそは見落さぬやうにせずと思つてゐる。お前様も、冬の間は大御苦勞だつた、一晩泊りで、町にゆきなさらんか」

老人がさう云つて、すゝめてくれると、清子は思はず微笑んだ。さうして、その老人その人が、平野の方から來た、春の御使ひででもあるかのやうに、山の人々は珍らしさうによつて來た。

又こんな春さきの、うららかに晴れた日に、久方振りに山の見晴しに立てば、遠くや近くの林の色が、枯木のまゝではあるが、どこやら、やはらかな、明るい色をしてゐる。人間の身內に流れる、活々とした血潮のやうなものが、こんな木々にも通ひ初めたやうに思はれる。遠い山々も、もうどうかすると霞んで見える。

清子は、讀書のとりわけ好きな娘と云ふではない。それでも、山の永い、退屈な、冬の間には、古い雜誌の類でも、隅々まで目をとほした。雜誌以外と云へば、夏の泊り客の學生が殘していつた書物なども、その中に數へられた。

「まるで、貴女達の生活が、そのまゝ書いてあるやうだ」

學生が淸子にさう云つたのは、日本のものではなく、遠いノールウェイの物語であつた。淸子は、飯山の女學校で、地理で習つたノールウェイは朧ろに記憶してゐた。然し、この物語のノールウェイはまた格別の感銘があつた。物語の中には、係戀（あこがれ）と云ふ文字が使用されてゐた。さうして、その係戀と謂ふものは、冬の永い、北ヨーロッパの山嶽地方の若い者の胸に宿るのだ、そんな風に誌るされてあつた。淸子は風俗や習慣は全く別であつても、その國の人々にも、やはり神樣があつて、神樣をめぐつて、樂しい生活がある、さう云ふことも學んだ。又、山の見晴しに立つて、春を待ちこがれる氣持を、この人々の間にも見出して、面白いと思つた。

淸子は久方振りで、足袋を脫いでみた。さうして、緣端ちかく出て見ても、もうあまり寒さを感じなかつた。

淸子には仕事がたくさん待つてゐた。一冬の間使はなかつた蒲團も干さねばならない。それに、春の仕度と謂へば、まづ第一番に、これも冬の間は閉めたまゝになつてゐた、客座敷の戶もあけねばならなかつた。

淸子はその朝も、早くから起きて、古風な渡り廊下をつたつて、客間の方へ行つて見た。冬の寒い晩には、よく霜割れの音がした、そんな事を思つて、太い柱を撫でてみた。暗い座敷の疊の上には、まだ一面に、節分の時の豆が撒かれたまゝになつ

てゐた。豆が足に觸れた時、清子は思はず微笑んだ。男手のない清子の家では、豆撒きも自身がしたのであつた。

丁度、清子が座敷の雨戶を明け終つたときであつた。庭の方で、驚くやうな、甲高い聲がした。

「早く、姉さんに云はなくては」

その聲は震へてゐた。さうして、駈けてきた妹の一人は、思ひがけない事を清子に告げた。火が出たと云ふ、宮司の屋敷から火が出たのだと――

清子は、吾を忘れて、そのまゝ、緣端から庭さきに走り出た。

お宮の杉の木の蔭になつて、屋敷の方はよく見えなかつた。只、まつ黑な、不氣味な烟が、丁度その方向の空に、もうもうと立ち登つてゐた。清子は、妹の手を千切れる位しつかり握つたまゝ、もう一度確かに烟を見極めようと、空を仰いだ、すると、もう人の騷ぐ聲が起きてゐた、そして、その事實を無慘にも證據立てるかのやうに、もう幾年もきいた事のない、山の半鐘が、氣ぜはしく鳴り出した。

清子の頭に、第一に浮かんだのは、母の顏であつた。今では中風氣味で、足腰の不自由な母は、この舊別當屋敷の娘として生れた人であつたから。

「母さんには云つたかえ」

清子は心の中で、一刻も早くそれを母に告げてやりたいと思つた。又もし出來ることならば、母の耳にはなるべく入れたくない、そんな風にも考へた。二つの全く矛盾した想ひが頭の中

を駈けずり廻つた。
清子が手早く、手拭で髪の毛を包んでゐると、思ひがけなく、母の姿が目の前に立つてゐた。いつのまにか山裝束をして、その手も足もぶるぶる震へてゐた。清子の目には一瞬涙がこみ上げてきた。
「母さん、そんな姿をして」
「あゝ俺は何もかも聞いた。うつちやつては置けない。今から行つてくるだから、お前も一緒に來ておくれ」
「それでも、そんな體で、どうして母さん……」
春山の時ならぬ鐘の音は、愈ゝ激しく鳴り出した。その鐘の音の合間々々に、人の騷ぐ聲も段々高くなつて行つた、さうして、少し離れた處にゐても、乾ききつた春の大空に、何かきびしい物音がきかれた。
母親は神社の前の廣場までくると、よろよろしながら、群れてゐる人中を搔き分けるやうにして火事場の方へ歩いて行つた。人々も母親の顏を見ると、「あゝ、おつかちやん、切なからず」と云ひながら、驚いた表情をして道を明けた。清子は追ひすがるやうにして、母に隨つた。何か言葉をかけようとしたが、忽ち自身も夢中になつてしまつた。
火焰はもう全く古い屋敷を包んでゐた。幾つかある棟の、どの一つにも、もう意地惡く火の手があがつてゐた。
「あゝ、本殿の屋敷が燒けてゐる、侍長屋にも火がまはつた！」
母親の聲はもうまるで譫言に近かつた。どさりと大きな音を

たてて、一つの棟が落ちるたびに、目をふさいで、手を合せると、をがむやうな姿勢をした。
「清子、ようく見て置けや、あゝこれが見収めだ、ようく見て置けや」
母親はさう云つて、空虚(うつろ)な眸で清子の方を見返つた。火のあふりはもう随分身近く感ぜられた。清子は、そんな激しい火焔の中に、別當屋敷の美しい姉妹娘のゐることをも思はずにはゐられなかつた。
だが、火の勢ひはそれだけではすまなかつた。大きな屋敷を一舐めにすると、今度は、杉の高い梢を乗り越えて、道を一つへだてたお宮の屋根の上にも、ぱら〳〵と火の子が舞ひ始めた。
「あゝもうお屋敷の方はこれまでだ。お宮を燃やしてはなんねえぞ」
「さうとも、そんな事があつては申譯がない」
まさかと思つたお宮までが危いと知ると、群れてゐた人々の騒ぎは一層大きくなつた。然し、なんと云つても戸隠は深い山の中である。水の不自由なことが致命であつた。
「あゝなんと云ふこんだ」
「悪火だ」
誰かがそんな叫び聲を上げたときには、もう中社の屋根も燃えてゐた。
宮司の古い屋敷を焼き、お宮に移つた火の勢ひは、風の吹き

具合では、何處まで延びてゆくかわからない。中社部落の他の家々も氣づかはれる、中でも、清子の家とお宮とは目と鼻の間にあつた。飛火でもすれば、草を葺いた坊の屋根は、この乾ききつた春のお天氣では一たまりもない。

「かまど池の屋敷が危いぞ」と云ふ聲をきくと、清子も思はず吾に還つた。あたふたと家に駈けかへると、もうその家の屋根にも消防夫が登り、旗をたてゝ見張りをしてゐた。

清子は妹達を勵まして、手あたり次第、道具類を庭先に搬んだ。さうして、庭に出るたびに、背のびをするやうにして、お宮の方を窺つたが、杉の樹間に、焔の赤い舌が、ゆらゆらと搖れてゐた。

もう一度春山に鐘の音が鳴り渡つたのは、山のお晝にちかい頃であつた。

清子は庭さきに持ち出した家財道具のまん中に、茫然としてつつ立つてゐた。御神體は無事であつたと云ひ、鎭火を人が告げてくれたのは、それからほどなくであつた。

「あゝ、それでもよかつた〳〵。清ちやんの家は燒けなんで」

人がさう云つて、肩をたゝいて語つてくれる言葉を、清子はまだ夢の中できく思ひがした。

やつと氣をとり直した清子の口から洩れた最切のものは、「あんまりだ」と云ふ言葉に過ぎなかつた。たとへ自分の家は燒け

なくとも、この山の中の神社部落で、お宮が炎上してしまつたのでは、どうして生きた心地があらうか。

目に沁みるやうな、うららかな春の空を仰いでは、清子も一瞬に味つた一つのきびしい現實に、思はず大きな溜息をつかずにはゐられなかつた。

戸隱の人々の待ち望んだ春は、然しながらあまりにも寂しい春であつた――

燒跡の灰かたづけは中々手間どつた。それをすませて、清子が家に戻つてきたのは、生暖かい少し春めいた夕方だつた。

清子の家には、一日中幾人となく見舞客があつた。戸隱村の知り人は勿論、遠く栅村や芋井の方から農良着のまゝで駈けつけた人もあつた。「戸隱樣が火事だときいて、俺ァ魂消えやした」と云ひながら、爐端に坐るやうな人々だつた。

夜は夜で、又部落の親しい人がやつてきた。春と云つても、更けると冷えてくる。爐の火をぢつと眺めてゐると、客も家の者も思はず溜息が出た。安堵したとは云つても、お宮が無くなつた最初の夜は、まるで大切な奥齒が拔け落ちたやうな寂しさがあつた。

「まるで炎と云ふものは生き物のやうだ」

一人の者の云つた言葉が清子の耳に殘つた。あの獸の赤い舌のやうな火が、あの時自分の家の屋根に襲ひかゝつてゐたら、

今頃は一體どうなつてゐたらう。體の不自由な母と幼い妹達を抱へて、自分はどうしてゐたらう。そこまで考へると、清子は思はず身震ひした。

戸隱の大火と謂へば、川中島の合戰の時、山は殆ど全滅し、人々は鬼無里から遠く越後の方に遁れ、多くの寶物も空しくなつたと昔がたりに聞いてゐる。然し、物心ついてから清子はこんな大火を見たのは初めてであつた。いつまでも平和で、いつまでも靜かなのが故里だと、そんな風に考へてゐたのに……

火のほとりにゐると、淸子にも晝間の疲れが出てきた。何かそのまゝがくりとなりさうな氣持がした。

「あゝ皆さんに、お茶もくまないで」

ふと氣をとり直すと、又そんな事を云つた。

女と謂ふものは、爐端を守るものだ。火の番をするものだ。それが女の務めだと、死んだ父はよく幼い清子達に云つてきかせた。太い柱のところに、父がいつも頭をもたせかけてゐた跡が今でも殘つてゐるやうに、清子の心にも、父の言葉は殘つてゐた。

客が歸つてしまつても、清子はまだしばらく爐の傍を去らなかつた。

「これ清子や、お前、氣なしでゐると、風邪を引くぞい」

隣の間に、宵早くから臥つてゐた母親は娘のことを氣遣つて、聲をかけた。その母親の髮の毛も、僅か一日のことで、急に白さを增したやうだ。戸隱神領千石と云つた昔から、山の殿樣で

通つた舊別當職の家柄である、その名家で人と成つたこの老婆には、生涯の思出の半分は、あの古い美しい館の中に眠つてゐた。

「俺は年をして、とんだ憂目を見たものだ」

戸隱のお宮には講中と謂ふものがあつた。全國に散布してゐて、それが所謂「戸隱講」をかたちづくつてゐた。

御祭神は手力雄命、天思兼命、天表春命であるが、これらの神様は勇武なお方であるが、それと同時に、農の神様でもあつた。神札の種類に、五穀豐熟御祈禱神札、養蠶御守、耕作御守があるのでも分るやうに、水神又は農作の保護神であつた。

そんな次第で、昔から戸隱講はお百姓の講中が一番多く數を占めてゐた。

新しいお米や作物は、これらの百姓達の手で神樣に獻じられ、一年の豐作を祈る講中は、もう五月の聲をきくと、續々とお山に登つてくるのであつた。さうして、平野ではもう初夏と云ふ頃、戸隱の五月六月は、美しい春のさ中で、又中々賑はふ時であつた。

その年も山の櫻は又美しく咲き誇つた。然し、かんじんのお宮はまだ燒失したまゝになつてゐた。

お宮の磴の下には、鳥居だけが寂しげに殘つてゐた。その前に來て、參拜してゆく人々を見かけるのは、久しく中社に住ん

だものにとつては、耐へ難い氣持であつた。
遠い國から出向いてくる者の中には、まだ春の椿事を知らないやうな者もあつた。一度など、淸子も、百姓風の老爺から、不審さうに訊ねられた事があつた。そのお老爺さんは赤いマントを着た孫をつれて、丁度石段を下りてくるところであつたが、如何にもきよとんとした顏付をしてゐた。淸子が仔細を話してやると、
「むむ、むむ、さうで御座んしたかい、いや勿體ないこんだ。俺ももうこの年だ。孫を連れて、今一度戸隱樣に詣らずと思つて、出て來やしたが、むむ、むむ、さうで御座んしたかい」
さう云つて答へると、如何にも氣を落した風で、立ち去つて行つた。ゆら〳〵と搖れてゐる淡い陽炎の中に、老人と孫の後姿を見送つてゐると、淸子も思はず淚ぐんだ。淸子の心にあるものも、やはりこの百姓の老爺と變りない、素朴な人間の信仰心であつたから――。さうして、火事の現場を二つの目で見てゐながら、どうにもならなかつた自分の非力が、今さらのやうに恨めしかつた。
早く假宮を建てなくてはいけない。そんな聲はもう早くから中社の人々の間に起つてゐた。その頃になると、よく社中の人人の寄合もあつた。淸子は時として、そんな男だけの寄合にも出むかねばならなかつた。
假宮は秋の中頃までに出來上るとして、一方では、本建築の相談もあつた。さうして本建築ともなれば、これはどうしても、

信者の人々、講中の盡力に待たねばならず、そのためには、社中の人々が、各〻その持ち場の地方に出かけてゆく必要も生じてきた。

「清子さん、お前んとこは女だけだで、たいへんだらずが、何も神社の爲だ。まあ秋になつて、涼しくでもなつたら、出かけて貰はねば」

或る晩、寄合のあとで、社中の親切な人が一寸氣の毒さうに、さう云つて清子にも話しかけた。

そんな時でも、「どんなものでせう、女の私にでも出來ます事ならば」と清子は卽座に快く答へるのであつた。

戸隱の櫻も散り初めると、早かつた。

そんな晩春の一日、清子は神道を歩いてゐた。

戸隱で神道と謂ふのは、中社と寶光社のお宮の間を結ぶ、一つの靜かな間道であつた。さうして、この間道は、近年ラヂオの放送を通じて有名になつた、あの小鳥の巢のある深い森の下を縫つてゐた。

折々ふくみ聲のほととぎすが鳴いた。清子も亦時に足をとどめた。

寶光社の社中の、清子とは幼い頃からの友である某の娘が、こんど安曇の方に嫁いでゆく話がまとまつた。極く內輪のよろこびを云ふ集ひがあつて、清子もその家に招かれての歸りであ

つた。流石に、清子もその日は薄く化粧を施してゐた。
「清子さんもお近いうちでせうよ」とその家の母に云はれたときは、清子もへんに胸にこたへた。
安曇と云へば、清子の家の講中の多い地方である。「秋になつたら、私もあちらに參りますわ、でも喜美子さんと違つて、私のはお嫁入りぢやないの」と、清子が持前の氣性から、冗談まじりに云ふと、母や娘も、急に眞顏になつた。
本建築の淨財の割當は、その受け持つてゐる講中の數によつてきめられてゐた。數の多いものは、それだけ多くの金額を受け持たされた。さうして、舊家である清子の家は、父親は亡くとも、昔からの講中は決して少なくはなかつた。その全額は、ひよいと頭に思ひ浮べて見ても、清子にとつては、たいへんなものだつた。
近年の物資の不足で、夏の泊り客の多い時などは、食物の調度で、清子も隨分苦心をした。然し、こんどのお務めには、そんな經驗も何の足しにもならない。まるで雲を握むやうな氣持がした。
歸り路の清子の頭には、やはりその事があつた。
神道も、深い森を拔け出ると、美しい見晴しに出た。戸隱の峯々が、あの一寸魁異な形ではあるが、清子の目には親しげに映つて來た。
森の中を歩いてゐた間、すつてゐた青嗅い匂ひを、清子は大きな吐息と一緒に吐き出したやうな氣持がした。

晩春――淸子には、そんな季節の事が身近く感ぜられた。「喜美子さんもお決りなすつた」淸子の頭にある、もう一つの女らしい想ひは、それであつた。

平常はすつかり忘れてゐたものが、ある場合は强ひてうち消してゐた一つの感傷のやうなものが、急に頭をもたげて來たのであつた。

淸子は、まるで無意識の人間のやうに、神道の途中から脇の方にそれて、一つの方向にむかつて步き始めた。それは、この山の上に一個處にかたまつて存してゐる、戶隱の寂しい墓地であつた。

墓地は寂しいが、不思議に明るかつた。幾つかの社中の人々の墓、さうして苔蒸してゐるものの中には、遙かな祖先の墓石もあつた。淸子は十五歲の時に別れた、あの一寸いかめしい父の名前も、墓石の表に讀みとる事が出來た。

春のお彼岸に、二人の妹を連れてお詣りしたばかりであつたが、今來て見ると、久しく會はなかつた人の顏のやうな氣持がした。

喬木が二三本立つてゐて、淸子の頭の上で絕えずかさ〳〵と葉のすれる音がしてゐた。眠つてゐる人をゆすぶるやうに、靜かな、和やかな風が吹いてゐた。

淸子は、父の墓の前に、しやがんで、お辭儀をすると、今日ばかりはいつものやうにすぐ立ち上る氣がしなかつた。何か、そのまゝ崩折れてしまひたい、そんな果敢ない思ひであつた。

麓の村々に厤の葉の繁る戸隱の夏は、山では一番いゝ季節であつた。

稀には、白地の絣でも着てみたいやうな事もあるが、それも日盛りのほんのいつ時だけで、そんな時でも、一寸木蔭に身をよせると忽ち冷やりとする。實際、戸隱の人々は、「暑い」と云ふ言葉を知らないもののやうに、絕えて使はない。

「ほんとに、暖かになりましたわ」

淸子がさう云ふと、坊に一夏來てゐる都會の學生達はよく笑つた。

「なんだい、いくら涼しいつたつて、夏のさ中に、暖かいはへんだ」

そして、學生達は各〻自分の部屋に籠つて勉强をしてゐるか、さもないときは、氣輕に白い運動帽を冠つて、散步に出かけて行つた。

「淸子さん、今晚も亦蕎麥を賴むぜ」

出がけに、そんな事を云ひ殘してゆくと、淸子は忙しいのも忘れて、微笑みながら、うなづいた。

學生だけではない。時には、淸子と同じやうな年頃の娘達の客もあつた。そんな若い女の中には、爐端にきて、平氣で太いストッキングの足を投げ出したり、若い男の學生をつかまへて、大膽に話しかけるやうなのもあつた。

冬のスキーの話が出て、清子も何氣なく、前に一度越水の原で、夜中のスキーをやつた話をすると、
「まあ、素敵、どなたと」
「清子さんて、この方、中々ロマンチストね」
などと、若い女達は大仰な云ひ方をして、清子をすつかり面くらはせたりした。
「清子さんは幸福よ、きつと私達なんかより」
「私もさう思ふ、こんな靜かな處で生活するだけでも」
清子には一々意外な言葉であつた。
「さうお思ひになりますか、でも、私など、これでとても忙しいのですよ、まるで月日が飛ぶやうで……」
清子が辛うじてそんな返事をすると、
「まあ！　貴女方でも、本當にそんななの」と女達は急に興ざめたやうな聲で云つた。

九月に入つて、戸隱の山の上は、幾年振りかで賑つた。
久しく絶えてゐた、戸隱の踊りが復活して、夏の終りの美しい幾日かと、それに續く夜々は、若い人々の血を湧かせた。さうして、そんな踊りの輪の中には、舊別當職家の美しい末娘の姿も見られたし、勿論、清子も踊子の一人であつた。
「どうして、今の娘は手振りもうまい」
「手振りと云へば、それで俺も思ひ出したが……」

見物の老人達の中にも、にぎやかな笑ひと昔話の花が咲いた。

清子はすこし上氣したやうな顔をして、夢中で踊つてゐた。

「あれ、姉さん、手拭が落ちさうだ」

背後から、妹に聲をかけられても、「さうかつちや」と云つたまゝ、また踊りを續けてゐた。

春の慘事は早く忘れてしまはう、もう假宮も建つことだし、やがては、新しいお宮も出來るのだ。何事も新規だ、人の心も新しくならなくては――、そんな思ひは、踊る人にも、見る人の心にも、一樣にあつたのだ。

日増しに涼しくなつてゆくと、何處の坊でも、そろ〳〵主人連が山を降りてゆき始めた。近い所で長野縣下、新潟方面、遠くは、東京から名古屋の方まで出かけてゆくのであつた。

坊の人々には、旅慣れた者もかなり多いが、中には滅多に山から出ないやうな老人もあつて、

「行つたついでだ。どれ俺も久方振りで、江戸を見てこようか」

そんな事を云ひ殘す人もあつた。

清子も、秋の聲をきくと、庭に出て、つぶらな眸で栗の木の梢などを眺めてゐたが、もう心の中はたいへん氣ぜはしかつた。

蟲の音が急に繁くなつたやうな晩、清子はお湯から上ると、簞笥の底から着物を出してきて、襟をかけたりした。そんな旅仕度を始めてゐる傍へ、末の妹がやつてきて「姉さんは遠くへゆけていゝ、私も連れて行つて欲しいなあ」などと云ふと、いつになく、むづかしい顔をして叱つた。

母親は母親で、「清子や、お前には中々の大役だ、俺も丈夫なら助けるのだが」と云ひながら、詳しく旅の道順をきゝ、娘の一人旅だと云ふので、お守袋まで用意した。

「旅には、なるべく身輕な形がいい」と注意してくれる人はあつても、若い女には、若い女の考へがあつた。それに父はなくとも、清子の家は舊家である。その家の娘として恥しくないだけの用意も必要だつた。出來ることならば、何もかも新しい物を身につけてゆきたい、清子はそんな事を、とつおいつ考へて、思はず夜更しをしてしまつた。

あくる朝もいつもより早く起きた。自分の留守中のことを考へて、鷄小屋や兎の小舍を見て廻り、妹達に餌の注意まで、細細と云ひ置いた。露に濡れた庭草を踏んでくると、何がなし、身も心もひきしまるやうな氣持がした。

「清子や、大苦勞だが、それぢや賴んだぞや氣を付けて行つておいで」

古い長屋門のところまで、不自由な足をひきずつて、妹達と見送つてくれる、母親の顔を見ると、

「母さん、案ずるよりはなんとやら謂ひますもの、私も山の中

にばかりゐては、世間がわからない。診らしい處も、少しは見てきませう」

さう云つて答へる、いつもの明るい、旅姿の清子であつた。

三

或る日、私は、越水の原から戸隱村營牧場の方に出て見ようと思つて、主人に借りた太い櫻の洋杖を突いて、中社の坂道をゆつくり登つて行つた。

假普請が出來て、ちかいうちには引越しをすると云ふ別當職の屋敷の方からは、木を削る音がさかんに聞えてきた。さうして、一人の若い畫描きが、屋敷の前に三脚を置いて、アルプスあたりの寫生を始めてゐた。

坂の途中で、私は二人の女を見かけた。一人の方は先に立つて薪木を背負つて歩き出したが、今ひとりは、私の姿を遠くから見かけると、一寸ためらつて、立ちどまつてしまつた。それは清子であつた。

ちかづくと、又自然な態度になつて、いつものやうに氣輕に挨拶したが、

「お目にかゝるときは、いつもこんな恰好で」

と少し恥ぢらつた。

清子は今日は木片を搬んでゐるのであつた。姉さん冠りをして、例の山裝束をしてゐた。

こんどは隨分遠方へ出かけたのですつてねと、こちらから話しかけると、「あら、もう御存じでしたの」と云つてから、「珍らしい處を見てきました」と語つた。そんな話し振りには、旅の間の苦勞に就ては少しも觸れぬ風であつた。まるで年齒のゆかない少女が、修學旅行からでも戻つて來たときのやうな、あどけなさがあつた。

「もう一度出かけなくてはなりませぬ、こんどは安曇の方で御座いますの」

信州の冬はもう間ぢかだ。安曇の旅では雪に逢ひませうと、清子はそんな事も云つた。

「御免下さいませ」と挨拶して、木片（こつぱ）の束を肩に荷なふと、清子は靜かに坂道を下つて行つた。先の女は、途中で立ちどまり、清子の方を見送つてゐた。

戸隱の自然は實に美しい。私は以前には、ともすると、この土地の美しさを、或る異常なものとして、眺めてきた。そこに住んでゐる人間を――實際この山間では、往々、思ひがけないやうな美しい人をみかけたが――ある異樣な美しさと云ふ風に考へがちであつた。

この山に足を踏み入れることによつて、人は時の移り變りと謂ふものを忘れてしまふ、この世ならぬ一つの季節と一つの年代に引き戻される。そんな風にも考へた。戸隱道から、あの屛

屆のやうな、切り立つた峯々が白晝の空間に聳えてゐるのを眺めると、私は屢〻自分で自分の目を疑つた。

然し、木片を荷なつて、山を下りてゆく清子の姿は、確かに、一つの「現實」に違ひなかつた。

越水の原にくると、雲の流れが早く、空模様は少し怪しかつた。遠くには、もうすつかり黃に素枯れた林が見渡された。原を渡つてくる風は、まるで沼の上でも吹いてくるかのやうに、濕氣を帶び、おどおどしてゐた。

原のところどころには、もう裸になつた樹々もあつた。私はあをむいて、帽子の廂越しに、美しい冬木立を眺めてゐた。一つの枝も一つの身振りのやうに、まるで一人の人間のやうに、親しみやすかつた。そして、さう云へば、今しがた見て來た清子と云ふ少女も亦この山の自然に生きてゐる、たいへん素直な一つの魂にほかならなかつた。

最終の人々

一

「お屋敷の最後を見とどけなさるとは、ほんに、貴方も戸隱とは因縁が深い」

私を見送つて、寶光社の部落まで隨いて來てくれた坊のお内儀さんと巫女の一人は、かはるがはる私にさう云つた。

山には名殘り惜しかつた。だが、大火の直後の坊の半日は流石に、なんとはなしに落ち着けなかつた。人々の顏には、異樣な昂奮のあとが殘つてゐた。私にしても、目の前に眺めた、燒け落ちてゆくあの美しい舊別當屋敷の面影と、今會つてきたばかりの、蒼白な面持をした屋敷の人々の事が、容易に頭から消え去りさうには思はれなかつた。

「またすこし落ち着いた頃にやつてきませう」

私がさう云ふと、

「どんなものでせう、もうこれで當分は戸隱には來なさらないでせうね」とお内儀は、ひとりぎめのやうに答へた。

別れを告げると、お内儀さんは巫女の手を引くやうにして、今下りてきたばかりの坂道を、又ゆつくりと登り始めた。足どりがへんに寂しく思はれて、二人の女（ひと）に見送られる方の私が、かへつて二人の後姿を見送るやうな形になつた。

山鳩がボウボウと現に鳴いてゐた。坂一つへだてゝも、もうこのあたりでは、中社と較べると、はるかに春の氣配が深かつた。

お内儀さんと、その娘の小さな巫女の姿はしばらく木立の間に隱見してゐたが、少し登りつめたところで、ふいと立ちどまると、巫女はこちらを向いて手を振つた。お内儀さんは何か云つてゐるやうであつた。その人の性質をよく知つてゐる私は、あたかも、それが、「さあ、早く山を下りていらつしやい」さう云つてゐるやうに思はれてならなかつた。

春の空山には、そよとも風がなかつた。私の立ち去つてゆくその後で、この物語りめいた山の生活が、靜かに、ぎーいと音をたてて、その大扉をとざしたやうな、そんな不思議な寂しさが、つと私の胸に湧いてきた。

善光寺の町に着いたのは、その日の昏れ方で、うすほこりの舞ふ、町角の電柱には、まだ戸隱大火の號外が貼られたまゝに殘つてゐた。

「ほんにえらい譯のもんさな、あれだけのりつぱな御館が、僅かの間に烟になつてしまふなんて」

そんな町の人の立話を、私は其處でもきく事が出來た。

二

私の戸隱ゆきは、その春の時から、丁度二ケ月、間を置いた。

戸隱道は麻の葉がしげり、夏が久し振りに戻つて來たやうな、かなり强い日射しであつた。然し、さう云ふ暑氣も束の間で、飯綱原をすぎ、寶光社までくると、又段々と薄らいで行つた。

流れに米粒を浮かせて、皿小鉢を洗つてゐた何處かの坊の女は、足音に、敏感な目つきで私の方を振り向いた、まるで人の氣配にさへ驚ろかされるやうな表情をして。七月の初の戸隱は、實際その位までしーんとしてゐた。さうして、私が三ケ月の間心に持ち越してきたあの春山の悲劇の印象は、すくなくとも表面では、山の何處にも見受けられなかつた。

「やあ、來なすつたかね」

爐端の暗がりから、さう云つて聲をかけて迎へてくれた坊の主人は、いつものやうに靜かな笑顏を湛へてゐた。

「いつぞやは御不禮を申しました」

戸隱の午前の日の光りは、實に靜かで美しかつた。爐端に坐り、主人のすゝめる、澁い茶を喫しながら、暗い土間越しに庭さきの陽を眺めてゐると、山に來たと云ふ感興が、幽かに、私の心の中で動いた。

「ところで、あれはやつぱり當りましたぜ、ほんのひと月ばかり前に、又農家が一軒燒けましてね、その時は夜分であり、どうして凄い眺めでしたよ」

主人は早速、そんな話を私の前に持ち出した。

それも火事の後のことであつた。山の老人やお內儀さんの間に、大きな火事のあつた後で、三日間の中に雨が降らないと、又きまつて災難が起ると云ふ事が、さかんに話されてゐたのである。

迷信にきまつてゐるとは思つても、そんな話を、戸隱の古い屋根の下できかされると、又、別樣な感慨があつた。

春の時は、戸隱には大きな御婚禮があつた話の種に、私もこんな深い山の中にともる嫁入の提灯を見てゆかうと樂しみにしてゐて、偶然あんな大火に遭つたのであつた。爐の傍に來て、それを云つて笑ふお內儀さんの態度も、もうすつかり落ち着いてゐた。然し、あの椿事の後、幾人かの病人も出たときけば、火事の波紋は、まだ山の上に殘つてゐるやうにも思はれた。

火元であつた舊別當職家の人々の事も、私のきゝたい事の一つであつた。

「お氣の毒に」さう云つて話すのをきけば、館の人々は今では、親類にあたる、かまど池のある屋敷に身をよせてゐると云ふ事であつた。

以前は、高い黑塀をめぐらした、廣い屋敷の中に住んでゐて、その生活が外からはまるでうかがひ知れなかつた程の人々が、

今では離の外から、ゆきずりの者にも、その朝炊ぎ夕炊ぎの姿が見受けられると云ふのである。

髮の毛に火がついて、逃場がなくなり、高い所から飛び下りたと云ふのは、館の美しい長女の女(ひと)であつた。私は日頃物靜かなその人の、少し取り亂した、血の氣をうせた顏も見た。

舊別當職家に幾代も傳はつた色々の寶もその大方は空しくなつた。火事場に駈けつけた村の人々は、さかんに燃えてゐる玄關先でさへ、土足のまゝ入ることを尻ごみしたと云ふ、そんな話をきけば「殿樣」で通つた屋敷の家柄が、今さらに思はれた。

坊の座敷に落ちつくと、又いつものやうに睡氣を催ほした。實際、戶隱は妙な處で、すこしでもぢつと坐つてゐると、きまつて不思議な睡氣に襲はれる。それは實に氣持のいゝ、ほのぼのとしたものである。云つて見れば、陽射しのやうなものである。朝の日ざし、眞晝の庭に、木々の深い蔭をこさへる日ざし、さうして、夕べの最後の光り。そんな日射しが、丁度人の身にひた〳〵と沁み入るやうな、不思議に快い睡氣が催ほしてくるのである。

私は立つて行つて障子をとざした。勿論暑くはない。毛布を一枚かけて橫になつた。その眠りの途中で、娘の富貴ちやんがお晝の御飯を云ひにきた。

三

私が舊觀修院別當職の館跡を見に行つたのは、丁度その日の夕刻であつた。

すぐ近所に一軒だけ在る、土產物を賣る店はまだ開いてゐて、地方の女學生らしいのがその前に二三人立つてゐた。私の顏を見ると店番の老婆は早速「お店はあいてゐても、お前樣、賣る品物がさつぱりなくてね」と云つた。

女學生達はさかんに繪葉書や案內記をあさつて見てゐたが、そんな中に、戶隱高山植物の繪葉書があるのを、私は偶然發見した。

「お婆さん、僕は、これを一組もらはう」と云ふと、老婆は、「あゝこれかね、これなりや、昔のもので、紙は上等だ」と答へながら、わざわざ、中から一枚々々とり出して、私に見せてくれた。

考へてみると、私はこの老婆とは馴染みが深い。さう云へば、この繪葉書とも因緣がある。

私が戶隱に來て、初めて別當職の屋敷の客となつたのは、秋のことであつた。晝飯をとつた歸り途で、この老婆の店に立ちよつたのであつた。

谿は一杯に紅葉でうづまつてゐる頃で、靜かな日和であつた。老婆は私の帽子や髮の形を見て、「畫家」さんと呼んだ。

私が別當職の屋敷から出てきたと知ると、「お館では、お孃樣が御接待に出なすつたかね」と訊いた。私はお孃樣と云はれて、咄嗟に、晝の客膳を搬んでくれた若い婦人のことに思ひあたつた。

私はりんだうの繪葉書を膝の上に置いて眺めながら「あゝ、その女なら」と云ひかけると、老婆は意味深い笑ひを洩して、引きとり顏に、「さやうそのお姫樣のことさね、吃驚しなすつたらう、美しい方で」とさも得意氣に云ひ足した。

林泉の美をつくした古い屋敷の庭を前にして、私が憩うてゐると、衣ずれの音が背後に起きた、ふりむくと、思ひがけなく、そこに立つてゐたのが、老婆の所謂お姫樣であつた。

物腰の靜かな、屋敷の古い紋章の中から拔け出てきたやうな、さうして、その動作の一つびとつが、何か屋敷の由緒を語つてゐるやうな……私の束の間の印象はざつとそんなものであつた。

老婆はなほ二言三言云ひ續けてから、「お若いときは、それこそ戸隱の花だなんぞと人が云つて」と最大級の讃辭を呈した。私が默つて繪葉書の一枚を手にしてゐると、一寸覗きこむやうな姿勢をして、「お前樣の眺めてゐなさる山の花よりも、はーるか美しくあつたわねい」と田舍びとらしい、機智めいた冗談を洩らした……

歳月は流れ去つた。さうして、私は今あの時と同じりんだうの寫眞を掌の上にのせてゐる。

然し、手觸りから推して、繪葉書の紙質がだいぶん落ちたやうに思はれた。

「これはお婆さん前のとは違ふぜ」

私がそんな事をにべもなく云ふと、

「ほんに、お前樣は、もう戸隱には久しいものねえ」

婆さんは一寸苦笑を洩しながら、他の客をはばかる風に、低い聲でそんな返詞をした。

歩き出すと、夕日があからさまに、眞正面から私の顏を照し出した。舊別當職家の門前には人影もなかつた。

勿論、門前とは云つても、かんじんの門はもう跡方もなく、塀構への一部が僅かに殘つてゐるだけであつた。それでも、その表門のあつた跡をすぎるときは、屋敷のあつた昔と同じやうに、一種躊躇する氣持が起きた。

塀構への内部(うちら)は、意外なくらゐ、綺麗に取りかたづけられてゐて、礎石が白く點々と殘つてゐるのみで、あの大建築を思ひ起す據り所とてはなかつた。

美しい京風の苔蒸した庭も、樹々の大方は傷み、以前の面影はまるでなかつた。强ひて私の注意をひいたものを云へば、片隅に何氣なく咲いてゐる、あやめの花位であつた。元來この戸隱の高地で見かける花は、數多い高山植物にかぎらず、紫陽花やあやめの類ひでも、皆一樣に極立つて美しい。何か深い味は

ひ、内に籠つたやうな色彩は、低地では一寸見られない。この塀構へだけを殘した、古い館跡の庭で、私が見つけたあやめの花にも、そんな異樣な美しさがあつた。
別當職の昔を偲ばせる、定紋入りの大きな幕を張りつめた、あの表玄關はこの邊であつたか、そんな事を思つて、大きな礎石の前に立ちどまつたりした。紋は私が最初に見たときから、何か源家に由かりのある風に思はれたのだ。
丁度、私が石疊を踏んで二三歩あるいた時であつた。まるで人氣がないと思つてゐた庭の内で、立ち上る者の氣配が感ぜられた。それは、位置で云へば、前庭の、萩の茂みのところであつた。さうして、その人影は一人の少年であつた。
「やあ、お姉樣かと思つた」
少年は振りかへりさま、咄嗟にそんな事を齒切のいゝ口調で云つた。私は一寸どぎまぎした。燒跡とは云へ、默つて這入つてきた私は、惡いやうな氣持もしたのだ。
「どうも失敬しました、ちよつと拜見しようと思つたもので」
然し、少年は意外にそんな事には無頓着な樣子で、私の顏をちらりと見ると、すぐ取り澄ました。如何にも鷹揚な、寧ろ貴族的とでも云つた方が適當だらうが、そんな態度で私に會釋した。
「今でも時々こちらに見えるのですか」
私は少年が屋敷の子供だと知ると、そんな風に話しかけてみた。

「はい、あそこに畑が殘つてゐます、それで母樣やお姉樣達が野菜をとりにくるのです」
少年は質問者の顏をまじ〳〵眺めながら、はつきりした口調で、さう云つて答へた。
成る程、屋敷の奧には、菜園が殘つてゐた。然し、少年の云ふやうな人影は見當らない、もろこしの葉が、夕風になびいてゐる、それが遠目にもよく見えるだけである。
「お母さんと云へば、あれからずつと御丈夫なの？」
少年は「あれから」と云ふ言葉をきくと、それが屋敷の人々には禁物でもあるかのやうに、心持眉をひそめた。
「いゝえ、ずつとやすんでゐました、叔父さんも病氣をしました、この頃やつと起きるやうになつたけど……」
そこまで答へると、少年は少しもぢ〳〵し始めた。陽燒けした首のあたりを撫ぜてゐたが、急に思ひ切つた風に、かう云つた。
「僕、向ふにゆきます、お姉樣が呼んでゐます」
さう云ふや否や、少年はもう後を見ずに、ばた〳〵と駈け出してゐた。菜園の方にゆくのかと思つてゐると、逆に、私が這入つて來た方へ、塀構への外に見えなくなつてしまつた。
「お姉樣が呼んでゐる」
私は少年の後姿を見送りながら、何氣なくその言葉を口ずさんで見たが、夏の夕方の庭には、依然として人影もなかつた。それらしい聲も、どこからも落ちてはこなかつた。

以前、と云つても、今からざつと一二年くらゐ前のことであるが――

私はよくこの古い館の客になつた。

奥まつた書院づくりの部屋は、朝日の射してくるのも遲く、夕日の翳るのがたいへん早かつた。ぢつと坐つてゐると、庭で、大鯉のはねる音だけがきこえる、氣持がなんとなく沈んでくる。そんな時には、よく立つて庭に出てみた。

庭は、一まはりすると、ほんとに晴々しかつた。それは全く豐かな夏のお蔭にちがひないが、山の上では、氣むづかしい空模樣はめつたになかつたから。

飛び石づたひに歩いてゆくと、苔むした閑雅な、つくられた庭は盡きてしまつて、それからさきは、まるで山の一つの風景をそつくりはめこんだやうな、全く手を入れてない場所になつてゐた。土はいくらか濕けつぽい、しかし、雜木の間から、窓がひらかれたやうに、靑空が覗きこんでくる。草むらに、白い野の花が咲いてゐる――

館では、飯をはこんできたり、夜具を敷いてくれる、小さな婢の顏の他に、めつたに人と顏を合はさない。もし、こちらがその氣になれば、きつと三日でも五日でも、言葉を交はさずにすまされたかも知れない。そんなためでもあつたのだらうか、庭をあるいてゐるときは、私はへんに何か話しかけたい欲望に

驅られてゐた。一つの花にも、あの窓のやうな樹間の青空にたいしても。

さうして、又實際、この夏の庭には、部屋の中とはあべこべに、言葉が一杯みちみちてゐた。それは、私のやうな凡庸なものの感覺でも、不思議に役立つくらゐであつた。そのかはり、又どうかすると、逆に、私の心の中を、何處かでぬすみぎきされてゐるやうな氣持も屢〻した。もつとも、それは一向に不愉快なものではなかつたが……

これは私の記憶である、しかし、どうかすると、人にとつて、記憶が現在になる事がある。

私はもう一度、あの少年の云つた言葉を思ひ出してみた。さうして耳を澄ましてみた。しかし、もう、古い館もなければ、庭もない、この廢墟の空氣の中では、言葉も死滅してゐた。さうして、私は何ものをも聽くことが出來なかつた。

私は、ひつそりと敷き殘された、何枚かの飛び石をふんで、また塀構への方に戻つて行つた。

豐かな、思はせ振りな夏の一日も、やつと暮れそめてゐた。あの東六軒町とよばれるあたり、山ぎはの幾つかの農家には、もう燈がともつてゐた。振りかへつて見ると、一寸魁異な戸隱の峰の一つびとつを、夕方の霧が濃く、深く、急ぎ足でたちこめて行つた。

四

戸隱には神道と云ふものがある。

それは戸隱の中社と寶光社のお宮との間を往反するために出來てゐる道で、鬱蒼とした森の下に隱れてゐるところもあつて、一般の人通りはない。私も久しく、そんな道のあることを知らなかつた。

或る日、坊の主人が御神樂の獻奏があるから、御覽になりませんかとすゝめてくれた。實を云へば、春の大火で、衣裳をすつかり灰にしてしまつたときいてからは、私はもう當分の間は御神樂も見られまいと、斷念してゐたのであつた。

「お神樂はどこでやるのです」

私は意外な面持をしてきゝ返すと、主人は一寸笑つた。

「御神樂と申しても、以前のやうなものを想像して頂いちや、こまりますよ」

主人はさう前置をして、午後から、寶光社であるお神樂の話をしてくれた。衣裳などもほんの間に合はせ、いづれ、中社の新しいお宮の建つ頃には、又昔のやうな美しい衣裳も揃ふでせうから、まあ、こんどは、話の種に見ておいて下さいと云ふ事であつた。

娘の喜美ちやんは山の巫女である、もう一足さきに出て行つた。主人は神職の人らしく、白地の着物に袴をつけて、麥藁帽

子を冠ると、日盛りの庭に立つて、私の支度をする間、待つてゐてくれた。
「どうして戸隱の夏の暑さも馬鹿にならない、今日は、近道をしてゆきませう」
主人は歩き出すと、さう云つた。そして、大門通りから、脇の細い道に入つて行つた。農家の庭の木蔭で、竹の籠を編んでゐる老人は、主人を見かけると、一寸會釋して、「お出かけかね」ときいた。「久し振りに、寶光社でお神樂があがるので」主人は、さう云つて答へてゐたが、全く春の悲劇以來のことであつたのだ。
氣持のいゝ平道に出ると、西岳や戸隱の峯々がよく見晴らされた。この道が戸隱の神道だと云ふ、私が初めてだと云ふと、主人は、さうでしたかねいと意外な顏をした。
神道とはいゝ名前だ。いづれ、幾代か前の古い戸隱びとが名づけたものだらうが、主人にきいても、二つのお宮をつなぐ道とだけしか話してくれなかつた。
抒情的な道、歩いてゐるうちに、私の心にも、なんとはなく、若々しい氣持が湧いてきた。
足音が私達の後で起きた。
「早かつたですねい」
ふりかへると、主人と同じ白無地の着物に袴の扮裝（いでたち）の若い男の二人連れであつた。
「追ひつかうと思つたら、歩いてゐるうちに、すつかり汗をか

いた」
さう云つて、麥藁帽子をぬいで、汗をふく一人の男の方を見ると、私には顔見知りの人であつた。
やはり、神職の家の青年で、私が知つたころには、まだどこかに少年の面影が殘つてゐるやうな年頃であつた。お父さんに當る人は戸隱の神職仲間では、大先輩と云つた格で、見るからに、一徹な、正直さうな老人だが、ただ不幸なことに、耳が不自由な人だ。あの春の騷ぎのときも、火事場で、身じろぎもしないで、炎の色を眺めてゐるこの老人を見かけたが、悲しみはこの人の面持の上に、とりわけ深く刻まれてゐるふうに思はれた。
「久しく會はないが、僕を覺えてゐますか」
竝んで歩き出すと、私の方から聲をかけた。
「ええ、存じとります、火事の時にもおゆきあひした」
「あゝ、さうでしたか」
私は、老人に氣がとられてゐて、この青年のことは忘れてゐたのだ。
「だが、あなたも、隨分變つた」
私がさう云ひかけると、青年は一寸羞しさうにした。
「そんな古いことは云ひつこなし、敬吾さんは、今では、もう御神樂にも出るし、何んだつて、父さんの代理がつとまるのだものねえ」
主人が、引きとり顔に、横合から、口を出すと、三人は聲を、

出して笑つた。

「さう云へば、敬吾君も、今年の秋あたりはお嫁さんを貰はにやなるまい」

今一人の少し年かさの男がさう云ふと、敬吾さんは、麥藁帽を右手にもつたまゝ、少しうつむきかげんになつた。

「お父さんは、どうしていらつしやる」

私がきくと、

「父さんは相變らずで、壯健で居りまする」

と答へたが、さう云ふ物の云ひ方にも、あの昔氣質（かたぎ）な、極めて鄭重な話し振りをする、老人の面影があつた。

「火事からこちら、お宮の太鼓が鳴らないので、朝の寢起きが寂しいなんて、父さんはよくそんな事を云ひやすよ」

敬吾さんは、主人の方に向つて、そんなことを呟いたが、こんどめは、誰も笑はうとはしなかつた。

道は、いつのまにか、深い森の中を辿つてゐた。

老鶯がなく、さうして又しばらくすると、どこかの繁みの奥で、郭公が鳴く。

「いつきても、森の中は賑やかですね」

主人はふとそんなことを呟いた。少し日に焼けた揃ひの麥藁帽を冠り直した。

寶光社のお宮の近くまでくると、道はもう全く日の光りを透さないやうな、鬱蒼と茂つた杉の老木の下にあつた。まるで、森そのものが、たいへんおごそかな一つの宮居のやうな感じだ

つた。
「やあ、もう來てゐるのか」
敬吾さんはさう云つて、指さしたが、杉の木の間から、巫女達の姿が見えてきた。
坊の喜美ちやんもゐた、その他にも二人ばかり、同じ位の年配の少女がゐた。巫女達は所在なく、口にハンケチをくはへたりして、私達のくるのを待つてゐるらしかつた。
巫女達の扮裝(いでたち)で、すぐその變化が目についたのは、袴であつた。以前のやうな、目のさめるやうに美しい緋の袴ではなくて、紫色であつた。
「紫色も夏らしくて、いいものですね」と私が云ふと、主人は、「さあ、どんなものですか」と答へて、「まあ、御神樂を見てからにして下さい、ほんとに、何もかも揃はなくて」と云つた。
近づくと、巫女達は、如何にもあどけない笑ひを洩して、云ひ合せたやうに、向ふをむき、三つの紫陽花(あぢさゐ)の花のやうに、私達をそびらにした。

五

戸隱の大きな爐端では、夏のさ中でも火が燃えてゐた。
爐端に來て坐る人と云へば、坊の神職仲間、お百姓、それに旅の藥賣り。
夏は山の一番せはしい時である、「かうしちやゐられない」な

ど云ひながらも、茶の好きな人々は、一時をその爐端ですごした。

山の世間は狹いやうでも、話にはことかゝさない。人々は何かと珍らしい話を持ちよつた。そんな罪のない、明るい茶話の折でも、私はどうかすると、人々の面持に、何かしら一つの寂しさを讀みとることがあつた。

寂しさと云へば――私は又よく、夕暮など、一人で山道を歩いた。昔から開けてゐた土地だけあつて、戸隱には、いくつか、氣持のいい小徑があつた。籬に沿つて歩いてゐるうちに、ひよいと、古い坊の厨口の前に出たりした。もう二十二三歳でもあらう、そんな若い女が、前掛の下に何か持つて、丁度そこへ入つてゆくのを見かけた。若い女は、色の鮮やかな三尺帶をしめてゐた。その子供つぽい身なりが、かへつて、不思議に寛やかな感じで、ひよいと何氣なく振りむいた顏の樣子が、まるで無表情であつた。白い一つのお面のやうに。夏の日はいつまでも明るかつた。

「あゝ、もし」

私が呼びとめられたのは、紅殼塗の大きな門の前であつた。――その日も、いつものやうな、夕方の散歩に出てゐたのであつた。

屋敷は京田といふ家で、長屋門は戸隱でも珍らしい位りつぱ

なものだ。

門べに立つて、私を呼びかけたのは、初老の人で、帶の間に手をはさんで、立つてゐた。それは、舊別當職家の弟さんに當る人であつた。

「珍らしい方をお見かけした」

初老の人は靜かにさう云つた。

實を云つて、私はこの京田の家に、あの春の大火以來、屋敷を失つた別當職家の人々が身をよせてゐることは、前からきいてゐた。それだけではない、私は一二度この屋敷の前を通りがかつて、訪ねてみようかと思つたこともあつた。しかし別の一つの感情がそれを抑制してゐた。別の感情とは——あの奧深い屋敷の中に住んでゐた一族を、その人々の不自由な朝夕の姿を見るに忍びないやうな氣持がしてゐたからだ。

弟さんと云ふ人は、むつつりした、日頃は大へん沈んで見える人柄だ。しかし、呼びとめた次の瞬間、この人の面には、思ひがけないやうな微笑が浮んでゐた。

「ほんとにお珍らしい」と弟さんはもう一度云つた。

「御覽のやうな侘び住居ですが、どうです、一寸お寄りになりませんか」

私が近づいて、御無沙汰を謝さうとすると、弟さんは、それを遮ぎつて、「さあ、どうぞ」と私を促した。

京田の屋敷は、隨分古いものである、主人が亡くなつて久しくたつので、庭も、家屋もどことなく、さびれてゐた。

弟さんは、私を庭の方からぢかに案内してくれたが、丁度、手桶をさげた婦人と、庭の中でゆきあつた。それは別當屋敷の姉娘にあたる人であつた。

その甲斐々々しい様子は、春の大火の直ぐあとで見かけたときの、全く血の氣のうせた顔色とは、別人のやうであつた。婦人は、目敏く私の方を見ると、「あの節はほんとに……」と、一寸口籠るやうに挨拶した。

緣さきから上ると、夕日が座敷の中まで明るく射しこんできた。苔むした庭には、小さな流れが引きこんである、その水音が一寸の休みもなく、靜かにきこえてゐた。

弟さんは「さあどうぞ、おあてなすつて」と蒲團をさし示した。

座敷の內は、これと云つて、裝飾もない。片隅に小さな文机がおいてあつて、その上には二帖ばかり半紙が重ねてある。

初老の弟さんは、いつもの癖で、坐つても二つの手を帶の間にはさんでゐる、肩は少しいかり肩である。さうして、さき程見かけた珍らしい微笑の色は、もうその顔から消えてゐた。

「御覽のとほり、手狹な二間きりで」

弟さんは、ぽつんとさう呟いた。

座敷の隣には、今一間あつた。夏のこととて、境の襖は開けたまゝになつてゐて、そこには、屋敷の老夫人が、うづくまるやうに坐つてゐた。老夫人は中氣を病み、立居が不自由だと云ふ、私を見かけると、次の間越しに輕く會釋した。

茶と菓子の器を搬んでくれたのは、姉娘の女であつた。その女は、次の間にさがると、老夫人と二言三こと言葉を交してから、明るい縁側の方を向いて、一寸手鏡に映して、髪かたちを直してゐた。

私達の話は自然火事のことに落ちていつた。

「不思議な火と申しますか、ほんとに恐ろしい火で御座いました」

弟さんは、私のとひに答へて、まるで心の奥にあるものを、強ひてほじくり出すやうにとぎれ〲に語り出した。

あの前の晩までは、杉木立の中に朧ろにひそまつて、美しい、古い館が現存してゐたのである。それが、あくる朝の瞬く間にすつかり灰になつてゐた。

その夜は、屋敷に、一人の女行者が宿つてゐた。女行者は、屋敷の病人に祈禱するために滞在してゐたのであつたが、枕についてから、なんとなく胸騒ぎがしてねむれなかつたと云ふ――

「非凡の方には豫感といふものがあるさうですが、私共には全くなかつた」

弟さんはさう云つて溜息をついた。

屋敷跡の話になつて、私がこの間、そこで屋敷の少年に會つたことを話すと、「あゝ、さうですか」と云つたが、又言葉をついで、次のやうなことを語つた……

「いやをかしな話ですが、今でも、私共や老人などは、かうやつて手狭なところで暮してゐて、何か不自由な品があると、ひ

よいと、昔の屋敷のことを思ひ出すのです。あそこの倉にゆけば、あれもあつた、これもあつたと、そんな事を思ふのです、すぐ立つて行つてとりにゆきたいやうな氣がします、目の前に倉の扉がひらかれてゐるやうな氣がします。ほんとにお恥しい話ですが、私共の心からは、中々あの屋敷は消え去りません、何もかもまだ殘つてゐるのです……」

山のすこし涼しすぎる夕風が、庭の方から吹きこんで來た。

ふと氣がつくと、私と弟さんとの話の間にいつの間にか、姉娘の女（ひと）も傍にきて、靜かに坐つてゐた。ほのかな化粧の匂ひが漂つて、手に團扇を持つてゐた。

「これなども、その一人です。私などはもう老人で、愚痴の出るのも格別不思議はありませんが、これなどは、まだ若いのに……やつぱりそんな氣持で居ります」

弟さんにさう云はれると、姉娘は一寸目を伏せた。戸隱の花といはれた女（ひと）である。しかし、今見ると、面には、やつれが充分うかがはれた。

初老の弟さんの、この姉娘の方を見かへる眸の中には、何かいぢらしいものを、はかないものを眺めるときの、云ふにいへない深い憐れみの情がこもつてゐた。

「幼いときから――、生れるからずつと暮した家で御座いますから……」

娘さんは、促されたやうに、さう云つたが、又、その重たい口ぶりで、こんなことも話した。

「何もかも、夢であつてくれたらよいと存じます。……私があんまり沈んで居りますと、よく弟達が、いつまでそんなことを考へてゐるのと、笑ひますが、私は、まるで、挿してゐたと思つた髪飾が、頭に手をあてがつて見たら無かつたときのやうな、そんな果敢ない氣持がいたします……」

娘さんは話の途中で、いくどか手の團扇をもちかへた。そして、そこまで云ふと、又きつと口を結んでしまつたが、その口の結び目から、もう一度、「夢であつてくれたら」と云ふ言葉が洩れてくるやうな氣持がした。

弟さんは大へん行儀のいい人である。少しも姿勢を崩さない、その怒つた肩は、何か重たいものを支へてゐるやうである。

「杉の木が、火をよんだのです」

弟さんは不意に、そんな事を呟いた。氣分がすぐれないらしく、顏色が惡かつた。

「をぢさまは、少しお疲れになりまして」と娘さんは顏色をうかがはつてから、こんどは私の方にむいて、「宅も、あれ以來、病人ばかりで」と云ひ譯をした。

庭をへだてて、隣家（となりや）の坊の草屋根には、まだ夕方の光りが遊んでゐたが、私達の部屋はもうほの暗くなつてゐた。娘さんは思ひだしたやうに、團扇の手を動かす……

現（うつつ）に、相對してゐる二人の男女、――初老の男子と、見るか

らにひ弱げな女(ひと)、私はこの二人のひとに、何か共通したものが感ぜられてならなかつた。それは一つの孤獨とも云へる。あるひは、今はもうなくなつた、あの古い館の――翳と云つてもよかつた。

「今は、山のなにもかもが、一等いゝ時でございます、皆様はそのいゝ時だけを御覽になつて、おかへりになる、でも、美しい時はほんたうに短うございますよ」

別當職家の庭には、萩の花がむれ咲いてゐた。大玄關の式臺に膝をついて、山を下つてゆかうとする私に、こんなことを云つたのは、この若い婦人であつた。數年むかしのことである。

「冬の間は、ほんとに、眠つて暮すやうなものです。ものの音とてしません、いや冬ばかりとは限りません、冬が深い眠りとすれば、夏はさめやすい淺い眠りです。と云ふのも、もう私共の歳になつて、こんな山の中で暮してゐますと、皆様のやうな樂しみと云ふものが、とんとないのです。さやう、酒ですか、酒は格別です。あれは洵に重寶とでも申しますか、私共のやうな者でも、ひとりぽつちで樂しめますからねえ」

こんな言葉も私はきいたことがある。それは赭顏のこの獨身(ひとりみ)の人の口から洩れたのであつた。あの古い館の大爐の傍で、もろこしを燒いてゐた一刻(ひととき)であつた。

座のみんなが急に默つてしまふと、私は以前きいたこの二つの言葉が何んとなく、思ひ出された。
「澄江さん」
隣室の老夫人の聲がした、そして、それにつづいて、咳く聲がした。私はそれを機會にこの家を辭さうと考へた。

私が縁端に出て、靴をはかうとしてゐると、いつぞやの少年が、遊びくたびれた樣子で庭の方から戻つてきた。
「お姉さま、越水の原まで行つてきた！」
少年の元氣さうな聲をきくと、姉娘も微笑んだ。
「越水はどうでした」
「キャンプの人が隨分きてゐる、今夜あたりは、キャンプ・ファイヤーがあるんだつて」
少年のうしろに廻つて、屋敷の三番目の娘さんも立つてゐた。姉さんに代つて、さつきから、夕炊ぎの仕度でもしてゐたらしい。白地のワンピースをきて、目のさめるやうに鮮やかな、朱のバンドをした姿は、たいへんきび〳〵した感じであつた。
弟さんは、私を送りかたがた、縁側のところに出てきたが、例のごとく、手を帶の間にはさんだまゝ、少年にむかつて、「お夕飯だ、もう少し早く歸つてこないと……」と云つた。その沈んだ口調には、別に叱るといふ程の語氣はなかつた。
私は靴の紐を結んでしまふと、少年や少女とも輕く會釋し

た。少年はこの間のことを思ひ出したのか、私の顔をまじ〳〵と眺めた。瞬間、私は何故か、短い夢から呼びさまされたやうな氣持がした。それは、目の前にすらりと立つてゐる、少年にも、少女にも、この若々しい人々の、活き活きした表情には、もう全く古いものの翳も、感傷もなかつた。現代が極めて活潑に息吹いてゐたからであつた。

六

その晩は、山の空に綺麗な三日月が出てゐた。

坊に立ち戻ると、主人たちは、爐端で待ちかねてゐたやうで、

「あまり遲いので、どうしなすつたかと思つてゐたところです」と云ひ、早速、晩の御飯をすゝめてくれた。

「夏の爐だなんて云ふと、人に笑はれさうだが、夜になると、どうして山は冷えますからねえ」

など云ひながら、主人は爐の自在鍵から鍋をおろし、酒の飲めない私にも、「まあ一杯位はいゝでせう」とすゝめてくれた。

戸隱は中々御馳走の豐富なところである。戸隱にもいくつか畑があるが、そこの野菜類は九月に入らないとたべられない。夏の間は麓から買はねばならない、夏は一番こまる時だとよく云はれるが、それでも、膳の上には地溜（ちこぼ）といふ戸隱特有のきのこもあれば、岩魚の大きいのも竝べられる。それに、こつてりした芋の甘煮もそへてある。爐端の食事では何をたべても、亦

格別の風味がある。
「京田さんでは、皆さんどうしてゐましたね」
主人はそんなことも訊いた。
障子紙が煤けて、黄ろくなつた小さな明りとりの窓がある。その窓から、私達のゐる爐のほとりを、戸隱の夜がひよいとのぞきこむ。
――杉の木が火を呼んだ。
私は何とはなしに、あの弟さんの云つたデモーニッシュな言葉を思ひ出した。主人にそれを云つてみると、主人も輕くうなづいて、「さやう、人がよくさう云ひますね、あの古い木は火を呼ぶのです」と答へた。惡寒のやうなものが、つと私の背筋の上を走つた。
酒はいくらすゝめられても、私は一向に駄目である。主人の方も、こんな寒い山に住む人としては、たくさん飲まない方である。
「どうも、張り合ひがないですねえ」
さう云つてお内儀さんが差し出す德久利の一本が、容易に空にならないのである。
「澄江さんは、私といくつも違はないが、ほんとに、ちつとも變らない」
これはお内儀さんの述懷である。
「いやあゝ云ふ婦人があるものですよ、何故か、私はあの女（ひと）を見ると、一ばん古い館のことを聯想する、生れるから死ぬまで、

あの女の心は、あの館の壁の中に住んでゐる……」

私はとりとめのないことを喋つた、主人夫婦は、唯默つてきいてゐた。

ちやうど、主人の坐つてゐる後の壁のところに何やら貼紙がしてある。讀んでみると、坊に宿る人々の心得のやうなものである。その中の一節に、太々神樂の獻奏されるとき、今迄は、神職の人がちやんと裝束して、お宮から講中のある坊まで迎へに出たものだが、それが今度から廢止になつた、そんなことが誌るされてあつた。

「戸隱も段々と變つてゆくやうですね」

杯を置いて、私がそんな事を云ふと、

「さうなんです、何もかも新規、今に私達の古い頭では、もう間に合はなくなりさうですよ」

お内儀さんは傍から、心細さうに答へる。

「いや、それでいゝものかも知れないて」

主人も少し酒が廻つて、陶然としてきたらしい。

山の七月は蚊がゐない。晝間はそのかはり道をあるいても、部屋にゐても、絶えず虻に惱まされる。しかし、夕方になると、ずつと樂になる。もう虻もゐなければ、蚊張を釣る心配もいらない。それに、涼しさを通り越して、どうかすると肌寒い。

私は酒の醉ひをさますつもりで、必要もないのに、團扇を手

にして、奥座敷の縁側に坐つてゐた。
——一ばん初めは一ノ宮、二にまた日光中禪寺、三に讚岐の金比羅さん、四にまた信濃の善光寺……
幼い手鞠歌の聲である。その唄聲は、夏の月夜のこととて、日がとつぷり暮れてからも、しばらく隣の坊の庭できこえてゐた。その夢のやうなゆるやかな韻律も今ではやんでしまひ、もう子供達の影も見當らない。
奥座敷の床の間には、刈萱とわれもかうの花がたいへん上手に活けてある。この座敷は、戸隠の坊の中でも一番風通しがいいとされてゐる。然し、風通しだけではない。見晴しも亦頗るすぐれてゐる。ぢつと坐つたまゝで、木立のところどころに、坊の草屋根が隱見してゐる、中社部落の風景の一半が、見渡される。
山の美しい、冴々とした三日月樣は、ちやうどあのお宮の森のあたりか、古い屋敷跡の中空へんにかゝつてゐる。さう云へば、夕方訪ねてきたばかりの京田の屋敷もよく見える。あの奇異な二階家の窓の一つには、灯の色もうかがはれる。
人がもし、今は空しくなつたあの別當屋敷の面影を、ちよつとでもいゝから偲ばうとなれば、京田の屋敷を見るのに越したことはない。規模は遙かに小さくとも、柱を蝕ばまれた長屋門、古めかしい見事な草屋根の姿、建築の樣式すべてに、何か似通ふものを宿してゐる、云つて見れば、あそこにも、そこはかとない前代が殘つてゐる。

私は縁側に端居して、しばらく動かなかつた。さうして、漸く醉ひがさめてゆくまゝに、いつとはなしに、戸隠の夜に、夜の靜謐(しじま)にぢつと耳をかしはじめた。

誰かが現(うつ)に語りつづけてゐる――

さき程から、一人の女が、靜かに、消え入るやうな低い聲で語りつづけてゐる。

額(ぬか)の白い女である。

風が吹く、灯火(ともしび)がゆれる。塗籠の戸がさつとひらく。女は膝まづいてゐる。

前庭はことのほか月明りが鮮やかだ。女は語り繼ぎながら、靜かに眉をあげた。さうして指さしてゐる。指さしてゐる、庭のとある方(かた)へを。そこには、秋萩の茂みの間に、一つの碑が立つてゐる。月明りに讀みとれる、石碑の面には、「守護不入の碑」と誌るされてゐる。

――碑(いしぶみ)に御座いますやうに、別當職の昔を申しますれば……

忍びやかな足音が起つた。それは、さうやつて坐つてゐる、私のすぐ目の下のあたりで。

坊の前庭は秋草がしげり、その下は、自然な崖になつてゐた、戸隠にはよくある、忘れられたやうな小徑が、そこにも通じて

ゐた。山の蟲聲がぱつたりやんだ。足音は、ひつそりと、秋草の小徑を通つてくるらしい。

私は半ばよびさまされた。然し、私の意識の半分はまだこの女の聲を、戸隱の語部（かたりべ）の聲をきいてゐた。足音は、まるで、その物語の中を通つてくるやうに思はれた。

「お月見はどうでした」

こんどの聲は、明らかに、私の背後できこえた。ふりかへつて見ると、そこには、背のずゐぶん高い坊の主人が、白地の絣をきて立つてゐた。

「どうら、ほゝう、此處からだと、もう三日月樣も、よく見えなくなつてしまひましたね、今夜のお月見もおしまひでせう」

主人はちよつと表の方を覗いて、そんなことを呟いてから、座蒲團を一枚とると、私の横にどつかと坐つた。消え入るやうな低い語部の聲は、もう全く絕えてゐた。

主人の顏は少し蒼ざめて見えた、酒の醉ひがすつかりさめたらしかつた。

「一寢入りしたやうな顏ですね」

私が云ふと、

「いや、これは恐縮、貴方のお相手で、すつかり過してしまつたので」

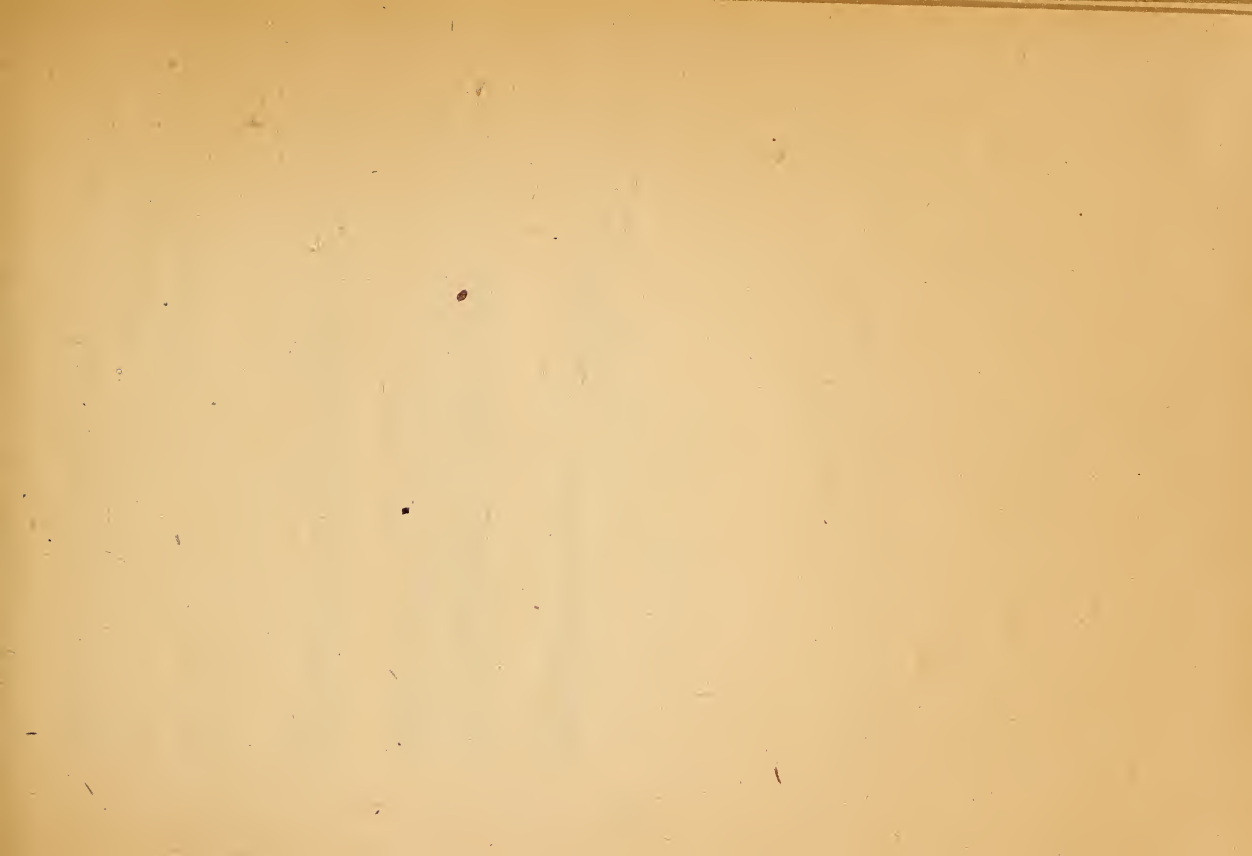
主人はつるりと顏をなぜてみせたが、またとつぜん、「貴方

は、いつお立ちだとおつしやいましたかね」ときいた。
もうそろ〳〵夏の登山季節である、坊がそんな人々で一杯になる前に、歸つてゆかうと、私は前もつて豫定してゐた。
「お月見も出來たし、明日あたりにしようかしら」
私がそんなことを呟くと、
「さう云へば、さつき、京田さんの屋敷から使ひがありましてね、お土産に何もさし上げるものがないから、せめて蕎麥落雁でも用意しておきたい、お立ちの日を知らせてくれとのことでした」
主人は私にさう云つた。
月影がうすれてゆくと、坊の前庭の、薄のそよぎも、なんとなく黑ずんで見え、物侘しい風情があつた。
中空には、遠くにちかくに、冴々とした山の星がぴか〳〵と光つてゐた。
樹間に見える坊の燈も、ふけるにつけて、そのうちのいくつかは消えてゐたが、京田の屋敷の燈は、まだ起きてゐる人があるらしく、明々とともされてゐた。
それにしても、さきほどから、現に、私に語りきかせてくれた女性は、あの戸隱の語部は、一體誰であつたらう――
それは、この寂しい、しかしながら何百年かの、歷史と傳統を殘した山の上に生を享けて、さうして、恐らくは、最も由緒のある古い館の、壁のうちで生ひ立つた一人の女性に違ひない。しかも、その女人は、自らの孤獨な生涯のある一日、春山

を一杯に覆つたはげしい火炎の下で、その懐しい古い館の屋根と、尊い神のみ社が、無慘にも燒け落ちてゆくのを、ぢつと眺めてゐなければならなかつた……

端居して、思はず時をすごしてゐる間に、私の膝頭はもう冷たくなつてゐた。

「ほいしまつた、大切なものをすつかり忘れてゐた。お月見の肴に、貴方に差し上げようと思つて、こんな物を用意してきたのに」

主人は人の好い笑ひを浹して、皿に盛つた見事な枝豆を私の前にとりだした。

戸隠拾遺

薪拾ひ

——松永立木に

山之内の僧庵で、私が戸隱からのたよりを讀んでゐると、側から家内が「立木さんからですか」と聲をかける。
「さうだよ、立木さんが少女と一緒に戸隱山にゐるさうだ」私は葉書から目をそらさずに返事する。すると家内は奇異な顔をして、「立木さんと少女がどうかしたのですか」と訊ねる。私にもわからない。「山の秋空はこの世ならぬ美しさださうな」私は文面をそのまゝ讀んで、ぽつんと言葉をきつてしまつた。

十一月の初旬、私は信州路の旅にゐて、急に戸隱が戀しくなつた。恰度善光寺から天然ガスの乘合（バス）が動き出したときゝ、草鞋がけで飯綱原をあるく最初の豫定を變更し、その乘合に便乘した。もつとも、バスはまだ試運轉の域を脱しない狀態で、芋井のさきの、峠の出つ鼻で動かなくなつてしまつた。私は車を降り、莨をすひながら、すこしおそい山の黃葉が谿を一杯に埋めてゐる景色を眺めてゐた。
「どう云ふもんでせうね、これで車は動きはねますかね」乘客の一人が心配さうに皆の顔を窺ふと、髭をはやした中年の男が、

引き取り顔に、「動くは動くでせうが、まーづ一日掛り、日暮につけばいいとするだ」と答へる。
まだ朝の十時すぎである。戸隠ゆきは一時間半と見積つて、お晝は向ふでしようと考へてゐた私は、これをきくと全く當惑した。だが乘客の中には不平を洩す者もない、急に笑ひ聲が起つた。中には、「お晝をこのあたりで開けばもつてこいだ」と云つて、腰を下す場所を探し始める人もある。
車は豫定より三時間おくれて、私達は寶光社の入口で降された。どこの坊でも客はないと見え、縁側にたくさん蒲團が干してある。
中社までの坂道を登つて、里坊の一軒にたどりついた時は、もう空腹で耐へられなかつた。
「あれ、こまつた、こまつた。こんな時に突然來なすつては、何のお構ひも出來やしない」
大根掘りから歸つてきたお内儀さんは、私の顔を見かけると、手を振つて、のつけからきめつけた。
爐端で私の食事がすむと、お内儀さんは姉さん冠りをして、又大根掘りに出かけてゆく。
ひとりぽつちとなつた私は、門べまで出て見た。巫女舞に出る娘の京ちやんが繩飛をして遊んでゐる。
「京ちやん、又寒くなるね」と聲をかけると、娘は一寸顔をしかめて見せた。
小さな流れをまたいで、畑地の方まで行つてみた。この山の

上の僅かな平地に出來てゐる畑では、どこでも大根掘りにいそがしい。
　見知り越しの顔もあつて、頭にしてゐた手拭をとり、辭儀をする人もあつた。「お日和は、一日がとてもいそがしくつて」そんな短い言葉をぽつんと呟く。
　麓の方から、二三人の連れの薪を背負つた女達がやつてきた。すれ違ふときに見ると、みんな若い娘である。幾分あらい縞の山袴を穿き、派手な色の羽織をきてゐる。又一人通る。そのあとからも續く。私は何か珍らしいものを見るやうな氣持がした。すると幾人目かの一人は私の傍までくると、急に立ちどまり、「お久しう存じます」と云つた、重たさうに身をかがめてゐる女の顔をさし覗くと、それは「かまど池」の少女であつた。
「薪拾ひですか」ときくと、「今日は女子青年の方で」と答へ、「勤勞奉仕でございますの」と云つた。
「あちらのお宅にお泊りですの、あそこは、小母さんが御馳走が上手だから」と例のはき〳〵した物云ひで云ひ、目禮してゆきすぎた。
　もう黃葉にはおそい。幾分蕭々とした風景ではあつたが、それだけに、かへつてこの山の上のひらけた畑地の上の夕空は、立木さんの言葉のやうに、この世ならぬ思ひをさせた。
　背の低い十七八の娘を最後に、もう薪拾ひの群も途絶えてしまつた。

夜の爐端で。
「どうれ、この大きなお姫様を燒いてさし上げようか」
主人は大小とりまぜて五六尾ある、岩魚の中から、一番美味さうなのを取り上げた。
立木さんの話が出ると、お内儀さんは「可愛いお嫁さんですよ」と云ふ、私がきゝ返すと、「おや、お知りでないのですか」と云ひ、立木さんが水兵服のお嫁さんを貰つた話をしてくれた。して見ると、立木さんの戸隱ゆきは新婚旅行であつたのか。「それで、少女の正體がわかりましたよ」と私が云ふと、主人とお内儀さんは腹を抱へて笑ひ出した。
私の立木さんの最初の印象は、大きな麥藁帽子を冠つた白面の少年である。次いでは、兄さんと弟さんを同時に喪つた年、その年の冬のさ中に、一人で戸隱に來た傷心の時の立木さんである。
水兵服のお嫁さんと旅に出た立木さんの姿はどうしても想像されなかつた。しかし、氣の合つた人達、若い活々とした青年と少女が結婚して、こんな人氣のないしーんとした山徑を歩いてゐる情景は、私にも容易に想像された。恐らく、戸隱の自然が私の想像力を助けてくれたのだらう。
だが少女の顏はわからない。晝間見た薪拾ひの娘の顏が浮んできた。それを借用して見たが、これは駄目であつた。
立木さん夫婦のお蔭で、私はその夜、いつになく熟睡した。

夜更けにふと目をさますと、だだつ廣い座敷のまん中に、消し忘れた電燈がしよんぼりともつてゐた。風も少し出てきたらしい。戸隱の寂寥が、またいつのまにか私の心を襲つてきた。

獵人

鐵砲打ちと云ふものには、よく、秋の汽車の中で出會つた。赤ら顔で、大柄な、さうして大抵、沈默勝ちな人が多い。

三等寢臺のあつた頃だ。

初冬の寒い夜更け、信越線の或る驛から、上り列車に乘り込むと、私の座席に、鳥打帽を被つた二人の男が坐つてゐた。

一目見てすぐ獵人だとわかつたが、夥しい獲物を携へてゐた。さうして、その獲物の鳥の、足や羽根には、ところどころ雪粉がついてゐた。

二人は向ひ合つてゐるが、別に、話をしてゐるのでもない、只どちらかの顔に、時々滿足らしい微笑が浮ぶ。

「どうれ、寢るとしようか」

やゝたつて、一人が云つた。相手は、輕くうなづいた。

多分、今日一日中、吹雪の中を信越の國境ひで獲物を追つてゐたのだらう、私はさう判斷した。

何氣なく、「見事な鳥ですね、それはなんですか」と私は話しかけた。すると、二人はたいへん不機嫌な顔になつた、さうして、一人の男が、「山鳥ですよ」と吐き出すやうに答へた。それはまるで怒つたやうな聲であつた。それでゐて、別に人に惡い

感じを與へるといふのでもなかつた。

私は下のベッドにやすんだ。男達は、もう一本紙卷煙草を根もとまで、美味さうに吸つてから、獲物を大切さうに提げて寢臺の小さな梯子を登つて行つた。

目をつむつてからも、私は何故か、上に寢てゐる獵人と、その獲物のことが氣になつた。あの氷漬けになつたやうな鳥達が、私の夢の中まで忍び込んで來るやうに思はれた。

戸隱ゆきの汽車の中で、うとうとしてゐると、私は肩をたゝかれた。遊ぶさうに目をあけると、私を呼び起した男は目の前に立つてゐた。赤ら顏の髭のある人であつた。背も隨分高かつた。「すみませんね」と低いが、よく通る聲で云つた。

私と竝んで坐ると、男はゆつくりと外套の隱しから、小瓶を出してきた。どうやら酒が這入つてゐるらしい。膝の上に新聞を一枚おいたが、別にそれを讀むのでもない、又すつかり目をさまされてしまつた私に向つて、話しかけてもこない。思ひ出したやうに、その小瓶の酒をちびりちびり飲み始めた。その内男は小瓶の詰をすると、それを脇にかゝへ、頭をうしろにもたせかけた。二三分もすると、氣持よささうに鼾をかき出した。足の間には、づしりと重さうな袋が置いてあつた。

汽車の窓は、まだうす暗かつた。この男の仕度を始める物の音に、私はもう一度目をさました。

男は袋と獵銃を手にしてゐた。もうさいぜんの祕密めいた酒の小瓶は何處にしまつたのか見當らなかつた。

「いや、お邪魔をしました」男は私にそれだけ云つてから、今度はひとりごとのやうに、「夜明けまで、火に溫まつてゆかなくちや」と呟いた。思ひがけないやうな山間で、汽車がごくんと停ると、男は靜かに降りて行つた。

その日の午後は、私は、飯綱原を走つてゐる乘合の客になつてゐた。

寒さの早いこのあたりでは、もう紅葉の時期はすぎて、黃色くすす枯れた林は、奧の方まで見透された。

車中は例によつて、いろんな人が乘つてゐた。鞄を持つた醫者、子を負つた女、そんな中に、お巡りさんも一人ゐた。

お巡りさんは、人のよささうな感じで、隣の人と世間話などしてゐたが、やうやく、戶隱の峯々が見え初めたころ突然、車中で立ち上つた。窓から何物かを探しもとめるらしかつた。

すると隣にゐた農人は、すぐ、「入り込んだらしいかね」と聲をかけた。お巡りさんは、それには返事をしなかつた。お巡りさんは林の方を眺めてゐる、かと思ふと、美しく晴れた空の方にも目をやつた。

「やつぱり今のはさうかね」農夫は自分ものび上るやうにして、もう一度聲をかけた。

「しやうのねえ奴だ」お巡りさんはやつと返事をした。さうして、今迄の笑顔は消えて、その面持は、一寸曇つてゐた。

車中の小事件はそれだけであつた。私には何のことか、よく分らなかつた。

坊の主人と、晩飯のあと、爐端で岩魚釣りの話をしてゐた。岩魚釣りも、カーバイトを燃やして、夜釣りをやる、これは中々面白いが、寒くなると川の中を歩くのはたいへんだ、全身が冷え切つてしまふ、もう駄目ですねと、話してくれる。私は思ひ出したやうに、火を搔きたてゝ主人の言葉に耳をかしてゐた。

すると、突然、表の戸をたゝくものがあつた。主人が立つて行つて、障子を明けると、土間の入口に、二人の服装の違つた人が立つてゐた。

眼鏡をかけた方の人は、早速云つた。

「署の者ですが、お宅には、獵師は泊つてゐませんか」

この人達はお巡りさんであつたのだ。

「御覧の通りです、別に居りません」

主人がさう云つて答へると、二人は別にそれ以上詳しくはきかなかつた。

「今夜は風が強いですね、御苦労樣」

主人は表戸をしめると、また爐の傍に戻つてきた。

「どうやら、密獵者が山に入り込んだと見えますね」
主人はさう云つた。
明日から獵が解禁になる、その前日を狙つて、こつそり鐵砲打ちをやるものがゐる、それで、あゝやつて、坊の一軒々々を調べて歩るくのだ、さう云つて説明してくれた。
私はやつと、晝間の乘合中の小事件も了解された。
「だが、あゝやつて、一寸覗いただけで、獵師の泊つてゐるのが、わかるか知ら」
私がさう云つて訊くと、「なーに、犬を連れてゐるので、すぐ分りますよ」と主人は答へた。お内儀さんも傍から、
「さう云へば、今夜は犬の鳴き聲もきこえませんね」と口を出した。
戸隱の坊と獵師では、あまり似つかはしくもない。しかし、秋おそい、山村の小話としては、捨て難い、私はそんな風にも思つた。さうして、もう一度、爐の火を搔き立てゝゐると、私はふと、車中で見た赤ら顏の男の事が思ひ出された。
勿論、あれらの人が、密獵者だと云ふのではない。
只、無口で、どこかいかつい所もあり、あの祕密めいた小瓶の酒を靜かに飲み、高鼾をかき、さうして降りるときも、こつそり出てゆく、獵人と云ふものの、或る性格を思ひ出したに過ぎなかつた。

春山の鐘

春山を一杯に鳴り響く鎮火の鐘の音が、のどかな午後の空に消えてゆく頃には、戸隠山中社の社殿も、舊別當職の屋敷も、全く灰燼に歸してゐた。

灰片づけに出向く、社中の人、農家の人が二三人づつ一塊りになつて、少し急ぎ足で、山の爪さき上りの道を歩いてゆく。まだ枯木のまゝの林の中では、時々思ひ出したやうに山鳩が「ボウ、ボウ」と現にないてゐた。

姉(あね)様冠りの下に、顔の黒子(ほくろ)が一寸氣になるくらゐ色白な若い女は、背後(うしろ)を振りかへりもしないで、半ば獨り言のやうに、こんな事を口の中で呟いた。

「行者樣の云はつしやるには、昨晩は枕にお就きなすつても、どうしたものか、胸(むな)騒ぎがして眠つかれなかつたさうな」

「それぢや、お屋敷には、ゐなすつたのかい」

聲をかけたのは、背の低い中年の女であつた。

「さうぢやないんだとさア、ゆうべのうちにお屋敷を出て、脇の家に行きなすつたと、俺はきいた」

「さうだらず」中年の女は如何にも、合點がいつたと云ふ風にうなづいて見せた。「なんせ、顔を見ただけで、その人の一生

が、歴々と讀みとれる位の御仁だものよゥ」
「だけんど、お屋敷の火事の前兆が、行者様にはわからなかつたのか知ら」
「お前、今、行者様は胸騒ぎがしたと云つたでねえかや」
「だからよゥ、あんな豪い御仁にでも、それを未然で防ぐつう事は、むづかしいものかねェ」
女共の話は中々つきない、一足おくれて、足どりも確かに登つてきた初老の男は、さう云ふ女共の多愛ない話を打ち消すかのやうに突然大きな聲で言葉をかけた。
「埒もねえ事をいつまで云つてゐるだ、焼けてしまつたものあ、なんとも致し方がねえ、みんな、運命と云ふものさな」
女共はうすら笑ひを洩して、振り返つたが老人の如何にも目信のありげな物云ひに、みんな當惑したやうな顔付になつた。
「運命！」若い女は、突然つき當つたその老人の言葉を、もう一度口の中で繰り返してゐた。遠くの森で、又山鳩が「ポゥ」と一聲鳴いた。後はもう話も途切れてしまひ、又せつせと山道を歩き始めた。
老若男女の灰片づけの人々の中に、私も一人まじつてゐた。坊の主人に誘はれるまゝに二時間ばかり前に、焼けてゆく現場を目のあたりに見てゐた私は、少し靜かになつた山の上の、屋敷跡をもう一度見ようと考へたのであつた。
初老の男は、山裝束をして、腰には莨入れをさげてゐる。農家の人でもなささうだが、あまり見かけぬ顔である。前にゆく

女達も、てんでに甲斐々々しい裝束をして、髮には、ほこり除けの姉さん冠りをしてゐる。若い人が老けて見えたり、年配と思つたのが、よく見ると案外幼い眸子をしてゐたりする。

お宮の前の廣場まで來てみると、もう人だかりはいつのまにか散つてしまひ、まだ幾分弱々しく見える春光の漂ふなかに、鳥居だけが寂然と殘つてゐる。周りの杉の巨木の繁みで、奧の方が見られないために、まるで、今でも、この石の鳥居をくぐり、幾段もある高い磴を登つてゆけば、そこには、つい先刻まであつた、古いお社も、社務所も、そつくりそのまゝ殘つてゐるやうに思へてならない。

別當屋敷は、お社とはものの一町も離れてゐないが、火元ではあつたし、もう全く跡形もとどめないまでに燒け落ちてゐる。表門は姿もない、塀構へに作られた侍長屋も悉く駄目になつた。そして幾分皮肉に思へるのは、この屋敷も黑塀の一部分がその原型を僅かにとどめてゐる事である。

さきほどの初老の人は、鳥居の前までくると、ふと氣がついた風に、立ちどまつて、いつもと同じやうに恭々しく拜禮した。女どものうちでは、ゆきすぎて又戻つて來、感慨深さうに老人の後から手を合せるものもあつた。

鳥居の前に竝んだ人々のうちで、私が期せずして心をひかれたのは、やはり、あの「運命だもの」と自信ありげに云ひきつた初老の人の顏であつた。そして、その顏は、もう充分山の風霜を凌いできたものであつたから。

「あゝ、かうやつて、拝ませて頂くと、俺ア涙が出るやうだ」

年配の女の一人は、云ふより早く、もう眸子をうるませてゐた。

初老の人は、女の方を振りかへると、額に幾重にも皺をよせて、只軽くうなづいたが、又急に張りつめてゐた氣持が崩れかかつたやうに、幾分鼻聲になつて、

「さやうさ、ほんとのところ、若い者にはわからねエ、お互にかうやつて年して見ればなア」と呟いた。

子供達

戸隱山の大火は、云つて見れば、全く「噫」といふ間の出來事であつた。幾日も雨を催ほさない山の上の空氣はもう充分乾ききつてゐた。その二三日前から、どこの坊でも、蒲團干しや、石がけ造り、座敷の掃除にいそがしく、もう麓の村々には、とつくに來てゐる春を、やつとこの深い山の中にも迎へようとしてゐたところだ。

前日の朝、久方振に戸隱に來た私は、寶光社からの山道を、行き交ふ人もないまゝに、ゆつたりした氣持で歩いてゐた。淙淙と私の耳朶に傳はるものは、一冬を越した全山の溪流が、今春の雪解の水を滿々と湛へてゐる音であつた。

「あゝ、何處を歩いても水音がする」

私はさう思つて屢々立ちどまつた。日の御子社のちかくまで來かゝると、林の落葉を踏んで、ばら〳〵と數人の子供の群が出てきた。皆一齊に眸子を私の方へ向けた。まだ着ぶくれた冬の姿をしてゐたが、中にはもう裸足の者もゐた。その自然にちかい皮膚の色が、また私の注意をひいた。しばらく歩くと、又子供の群に出逢つた。背にねてゐる幼兒も見かけた。幼兒の泣き聲がへんに爽やかにきこえた。

「あゝ、春の水の音がきこえる、さうして、見かけるのは子供ばかりだ」
私はもう一度そんな事を考へた。さうしてそれらの者が、この深い山の中では、季節の魁のやうなものだと思はれた。
「小父さんは、鞄を持つてゐるねエ」
一人の勝氣らしい少年はさう云つて目敏く私の荷物を指さした。
「お醫者様だナ」と他の一人が云ふ、すると小さな女の兒が、「さうだらず、長野の先生だ」とつけ加へる。私は微笑しながら、醫者ぢやないと告げると、こんどは、鞄の中には何が這入つてゐるかと訊く。重たさうだねと云ふものがある。
やがて、その勝氣さうな少年は「俺ちが持つて行つてあげる」と云つて、無理にも私の手から鞄を取らうとする。
少年は、何か大切な、しかも彼等にとつて極めて好奇心をそそるらしい、この鞄を、「俺ちにかせ、俺ちにかせ」と口々に云ひながら私の後から隨いて登つてくる。
「やつぱり違つてゐた、長野のお醫者先生はお前、こんな服だねえど、茶色の服だつたよ」
少年はさう云つて、やつと了解したやうに皆に云つてきかせてゐる。
私は道々、少年達に、これから訪ねてゆく坊の主人のことや、別當屋敷の人々のことを訊ねてみた。
「皆んな、お達者かね」私がさう云つてみても、この元氣のい

い子供達には、そんな事は一向無關心であるらしい。「あそこの小父さんなら俺ちも知つてる」さう云つて、競つて早口に答へるだけだ。

やがて、馴染深い中社の鳥居が見え始めた、春の水音はまだ冴々として、私の耳の中に殘つてゐる。さうして、この賑やかな戸隱の子供達と春の水音が、その二つのものが、何故か一つの物のやうに思へてくる。永い冬を越した山の中の、これは一つの滿ちあふれる勢にほかならないから。

「ではもう此處でいいよ、有難う、小父さんは、あそこの家に行くのだ」

私はさう云つて、坊の草屋根の見える別れ道のところで、少年達に御禮を云つた。

「つまらないなア」

鞄を持つた少年は、もう一度鞄をゆすぶつてみた。

「何が這入つてゐるんだい」

「いろんなもの」

「いろんなものつて、何だらず」

「小父さんの着る寢卷、齒磨、楊子、シャボン」

私が口から出まかせに答へると、少年や少女は、一々好奇心を持つてうなづいて見せる。

「さうして、小父さんは何しにきたの」

小さな女の兒は、少年の蔭から聲をかけた。

「さうね、小父さんは、君達に會ひに來たのだよ」

私の咄嗟の、甚だ不器用な返事は、然しこの素朴な少年少女には、一向無意味ではなかつたらしい。少女はこんどは正面から、まじ〳〵と私の顔を見て、

「ぢや、小父さんは、永くゐるね、又會へるね」と元氣よく話しかけた。

春山

私の愛する古い館――戸隱山舊別當職久山氏の屋敷の表門が、激しい火の勢ひに凄じい音をたててばつたり燒け落ちるのを、私は目の前に茫然として眺めてゐた。

戸隱中社の大火はちやうど私が行つた翌朝の事で、物靜かな里坊の一軒に宿つてゐた私は、その朝、突然鳴り出した半鐘の音と、お内儀さんの叫び聲でこの椿事を初めて知つたのであつた。私が坊の人々とお宮の前の廣場に駈けつけたときは、杉の木立と高い塀構へをめぐらした久山氏の屋敷はもう黑煙に包まれてゐた。火が見えないがなんとか消しとめられないでせうかと云つてゐるうちに、忽ち火炎がめら／＼と立ち初め「大伽藍が燃える、お屋敷が燒ける、あゝあんなに火が見える」と女の甲高い聲が私の周りに起きる時分には、もうこれは絶望だと思はれた。廣場に集まつた人々のうちでも老人や若い女は叫びながら顔を蓋(おほ)つてしまつた。そのざわめきの間を縫つて、戸隱村と背中に鮮やかに染めぬいた消防着の人達は、血眼になつて火事場に駈けこんでゆく。

　水の不便な山中の事である。しかも春のお天氣が久しく續いたあとであるから、乾ききつた空氣の中では火の勢ひはもうど

うにもならない。お屋敷の方が所詮絶望だとわかつた頃には、屋敷とは道を一つ距てた戸隠中社の社殿にもどうやら飛火したらしい。

「あゝ、どうしたらよからず、お宮まで焼いてしまつては！あれあんなにお屋根から煙が見える、誰でもいい、早く屋根に登つてはたき消して下せい」年老いた女の一人は、男の顔を見ると誰かれとなく喚めくやうにして云つてゐた。さうして、そんな悲痛な叫び聲は、この深い山の中に永い傳統を守つてきた神社部落のすべての人の聲でもあつた。

神職の人達は老いも若きも皆山裝束に身をかためて、各〻の部署についた。その中で、最も感動的な情景の一つを私は見た。それは人々の群から離れて、不自由さうな身體を震はせながらとぼとぼと歩いてゆく老婆の姿であつた。老婆の眸は開いたまゝで涙さへ見えない。まつすぐに、今さかんに焼け落ちてゆくお屋敷の方へゆくつもりらしい。「極意のおつかちやん切なからず」背後から起きる囁きに、私はもう一度老婆の顔を見た。山裝束はしてゐても、その人はまぎれもない極意の老夫人であつた。久しく中風で臥つてゐるときいたその夫人は、久山家の出身であつた。この懐しい古い館の最後を、ぢつと老の目に見ておきたかつたのであらう。

人々は只茫然と眺めてゐた。私も眺めてゐた。その目の前で、お屋敷の古代そのまゝの門構へは忽ち崩れ落ちて行つたのであつた。さうしてその時こそ、私は私自身の心の中でも何か美し

いものが、美しい一つのイメーヂが崩れてゆくやうに思はれた。
山地の空はくつきりと晴れ渡つてゐた。その青空の下に、久山家のかたへの畑には、屋敷から持ち出したらしい、襖や衝立、それに風呂敷包のやうなものが、そんな僅かな道具類が、しよんぼりと取殘されてあつた。「あれ見なせい、りつぱなお屋敷の寶はみんな灰だ。あとにもさきにも持ち出したものせえば、あれつぽつちさ」人々の目がそれを云つてゐる。だが、私はその痛ましい現實からしばしでも目を轉じたかつた。畑地のはるかな彼方に、北アルプスの山々と覺しき眞白に雪を頂いた連山が、まことに鮮やかに、まるで一つの錯覺のやうに浮んで見えてゐた。

久山家の人々はこの大火の中から無事にのがれる事が出來たらうか、燒跡の前に立つてゐると、その事がまづ頭に浮んできた。久山家の主人——宮司さんの姿はお宮で見かけた、さう云つて話す人もあつた。責任感の強い宮司さんは屋敷の燒けるのも忘れてお宮に走つたものだらう。「あゝ涙が出るやうだ。俺はまともに宮司樣の顏が見れなんだ」話す人の聲もうち震へてゐた。又屋敷の美しい娘さん達に就ても「お孃樣方は火の廻りが早くて逃げ場がなく、高い所から飛び降りなすつて、髮の毛に火がついたさうな」と語るものもあれば、「奥の竈場に逃げてゆき、竈の中にゐなさるらしい」と囁く人もあつた。

この不慮の騷ぎには、戸隱村全村はもとより、芋井柵の村々からも急をきいて消防夫が駈けつけた。さうして遙々長野の町

から二臺の消防自動車が着いた頃には、屋敷の方はもとより、中社の社殿も寶物倉を殘して大半は燃えつくされてゐた。それに神社附近にある、久しい年月を閲した杉の大木にも、既にその幾本かには火が廻り、中には杉の木の虛に火が這入つて、伐り倒すより手段がないと云ふものもあつた。

極意家は神社に隣してゐる。そこの屋根にも旗をたて、幾人かの消防夫が頑張つてゐた。

しかし幸ひな事には、その日は風がなかつた。そのためかさしもの火勢も、次第弱りに弱つてゆくやうに思はれた。

私共が幾分安堵して坊に一まづ戻つてくると、大きな爐端にはもう隣村の見舞客が詰めかけてゐた。「畑に出てゐて中社が火事ときいて吃驚した」と語る人は、二里の山道を走つてきたとかで「かうやつて安氣にお茶を飲めるとは思はなんだ」と云ひながら、お内儀さんのさし出す漬菜を大きな掌でうけてゐた。「山においでて、爐に火がないくらゐ寂しいことはないでせう」と口癖のやうに云ふお内儀さんも、今日ばかりは火を見るのも厭はしいらしく流石にそれも云はなかつた。お客に晝の膳が出て、勞らひに酒の一本もお燗される頃には、山の上の春の大氣を震はせるやうに、又半鐘の音が鳴りひびいた。鎭火を知らせる鐘である。ゴーンゴーンと鳴るたびに皆頭をもたげたが、人々の心を支配するものは、安堵の氣持ではなくて、云ひ

知れない寂しさであつた。「母あちやん、お神樂の衣裝はどうなつただらず、ない」と傍から口を出す娘の京ちやんは、山の巫女の一人であつた。小平安朝の面影をとどめると謂ふ岩戸神樂が、巫女の手に持つた美しい扇が、ふと幻影のやうに私の眉間をすぎた。それだけではない、あのお屋敷の京風な典雅な庭――私はそこである秋の一日、まるで古代の萩を見るやうな感興を味はつた――紫の總のついた重々しい襖の引手、風情ある草屋根、私はしばらく目をとぢた、それらの一切が燃えてゆくのを目の前に見ながら、どうにもならなかつた我々の非力が、耐らなく口惜しかつたのだ。

「京ちやんよ、心配しなくとも、神樣の御殿はちやんと又りつぱに出來上るさ、考へて御覽、神樣のことだものよう」客の一人はそんな事を云つて娘を慰める。お内儀さんはきつと唇をかみしめるやうにして、爐の面を見つめてゐた。「なんしろ、俺はあんな物凄い火は見た事がねえ」客の一人がまたさう云ふと爐のほとりは急にしーんとなる、すると半鐘の音が、漸く靜かになつた春の山をどよもしてゴーンゴーンと又きこえてくる。

晝からになると、各戸から一人づつ出て灰片づけがあるとふれてきた。

私は衣服を整へて、何はともあれ、極意家に避難してゐると云ふ久山氏を見舞ふことにした。坊を出て、裏道づたひに歩いてゆくと昨日きたばかりの私の耳に、極めて印象的であつた、雪解で急に水量を增した春の川音がまた鮮やかにきこえてき

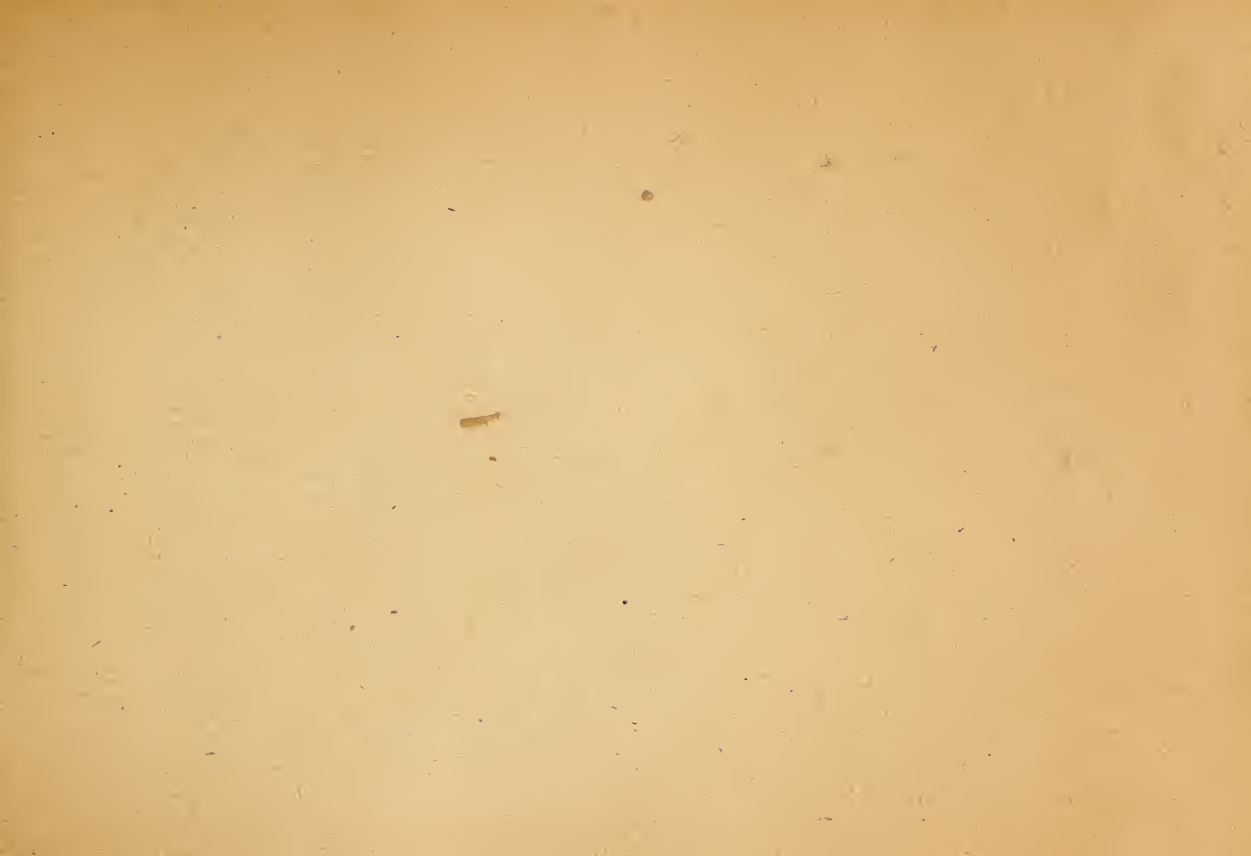
た。さうして、枯木林の、あのどこやら明るい、やはらかな色調が目に沁みるやうに感ぜられた。

紅殻塗りの美しい極意家のそばまできかかると、お宮の方で、どしーんと云ふ、大きな物の倒れるやうな音がした。さうしてそのあとから、人々のざわめく聲が微かにききとれた。「虚に火が這入つたと云ふあの杉の老木もたうとう伐り倒されたのだ」私は咄嗟にさう思つた。

極意家の庭さきにも、さきほどの避難騒ぎのまゝで、まだ荷物などが殘されてゐた。さうしてその中に、この傳説の『かまど池』の屋敷の少女が、ぽつねんと立つてゐた。少女は只「びつくり致しました」と辛うじて答へたきりであつた。

あの柔和な、貴族的な感じのする宮司さんにも、火事場からのがれたまゝの、山袴姿の久山家の娘さんにも會ふことが出來た。これらの人の顔を見て、只痛ましいと云ふばかりでなんと云つて慰めていいかわからなかつた。美しいものは、得難いものは、又同時にあんなにも脆いものかと、私はもう一度あの典雅な屋敷の記憶を呼び起して、惜しまずにはゐられなかつた。

「升麻の花が咲かなきや、戸隱山には春はこない」これは坊のお内儀さんの言葉であるが、極意家の庭にも、あの美しい藤色の戸隱升麻の花はまだ咲いてゐなかつた。「冬籠りが過ぎて、これからやつと山も賑やかになるばかりで御座いましたのに」かまど池の色白な少女は、さう云つて、まだとりとめのない茫とした春のなかに、ぢつと立ちつくしてゐた。

草むら

落葉松の林の中を辿つてゆくうち、私は一寸旅人めいた氣持もした。そんな林を二つばかりぬけて出ると、もう火の山は、眞正面によく見晴らされた。

「淺間嶺にけむりたつ見ゆ」と云つたやうな古歌だつて、まんざら無い譯でもない。

山のけむりは、今日は少しも動かなくて、青く澄んだ夏の空に、その夢のやうな重みをぴつたりと、もたせかけてゐる。

妻は耳に白い繃帶をして、私よりは、二三歩おくれてついてくる。婦人傘を杖の代りにして、「隨分でございますのね」などと謂ふ。私は振りかへつて、妻のそんな姿を眺め、妻が田舍少女であつた頃――妻とまだ結婚しない昔にも、こんな風な日があつたなと思ひ出す。瞬間、ちよつとへんな氣持がした。然しすぐ又大きな聲で、「早く歩けよ」と呶鳴りつけた。

驛からの道中を、鞄を交代で持つて來た。私も、妻も、もうすつかり汗を搔いてゐる。

(流石に、高原とは云つても、眞夏の日盛りに、遠くの森や木立は、ぼうと白く光つてゐた)

「早く、冷いお水でも頂きたいわ」と妻が云ふ。「木の下に立

つて見ろ、風が、ひんやりとするから」さう云つて私が答へると、妻は立ちどまつて、汗を拭きながら、「ほんとに！」と感心したやうに云ふ。

　街道に出ると、午さがりのこととて、人影はない、道に沿つて、二三軒古風な家があるかと思へば、お次は、ぽつかりと、まるで齒の拔けた跡のやうに空地になつてゐる。空地には、ひげの赤い唐もろこしが植つてゐる。

「眠つてゐるやうな村」と云ふのが、妻の卽席の批評である。ほんとに、小さな村全體が道ばたの、もろこし畑か南瓜畑の中で、午睡の夢を樂しんでゐるやうである。

　その街道をはづれ近くまでくると、一軒の農家があつた。私共はそこまで來ると、やつと足をとどめ、荷物を下した。なんの變哲もない、小さな農家、それが、前から約束をして置いた、私達の一夏の宿であつた。

　元來、私はどんな家でも、一つ際だつた取柄があれば、それで充分滿足する、さう云ふ方であつた。この夏の宿にはさて何があつたらう、しひて云へば、裏庭に面した廊下の所の手摺位であつた。それは古風でもあり、見やうによつては、西洋風——どこか、外國の田舍にでもありさうな奴である。その手摺のある廊下の下は、納屋になつてゐていろんな農具や、ひよつとしたら、馬鈴薯などを、ころがして置くところであつたのだら

う。庭には小さな流れが引き込んであり、手摺にもたれてゐると、四六時中、少し急な水音をきく事も出來た。流れの向ふ側は、火山質の一寸グロテスクな燒石を竝べて、不細工な築山が出來てゐた。

八十歲の老人と、四十歲の娘がゐる――これも至極無難であつた。實際、その八十歲の少し耳の遠い老人が、夕方ひよつくら廊下のところにやつてきて、言葉もかけずに、向ふむきに坐つたところを見ると、（その老人の禿げ上つた頭の上に、微かな夕方の光が漂つてゐた）植物――何かそんな靜けさもあつた。

土間の三和土の上には一匹の犬がつながれてゐた。この家の飼ひ犬である。こ奴は、もう最初から、私の氣に入らなかつた。と云ふのは、私の顏を見ると、すぐ猛烈な勢で吠えたてたからであつた。私は生來犬は嫌ひの方である。とりわけ、この白と黑の斑の犬は、いくら贔屓目に見ても、愛らしさと云ふものがない、まるで吠えるばかりが能のやうな犬であつた。おまけに、「これ、杵太郎や、吠えるでねえぞ」とその四十歲の娘が叱るのを見ると、一層、いやな氣持がした。人と同じやうな名前を犬につけると云ふやうな事は、凡そ私の趣味に合はぬのである。然も、その四十歲の女と云へば、意地の惡さうに、汚ない齒をむき出した、まるで小人のやうな――せむしの女であつたから。

家の內は、晝間でも仄暗かつた。襖やその他、座敷の造作には、農家としては、へんに凝つた風なところもある。私の借り

た座敷の次の間には、布袋樣の置物があつて、その上の壁のところに、一枚の寫眞が額縁に入れてかけてある。人物は女である。若い、一寸目のふちに險のある、一昔前だつたら、辛うじて美人の範疇に這入りさうな、そんな女の寫眞であつた。

夕方になつて、電燈がともると、暗い座敷も、やつと生きかへつた。最初の晩の食膳には、胡瓜もみがのつてゐた。

山羊が遠くで鳴いてゐた。その食卓で「この村には山羊が多いやうだから、お前少し乳を飮むといゝね」私はそんなことを妻に話した。

その夕べの出來事であつた。——とこのやうに云ふと、如何にも大袈裟に聞えるが、事實その出來事は、私に進退をさへ考へさせたからであつた。

月がたいへんよかつた。蟲聲も、最初の晩のこととて、私の耳にとりわけ快かつた。農家の戸口を一歩出ると、とつぷり暮れた野面と云ひ、裾野の景色と云ひ、あのひんやりした海拔何千尺かの夜風は、私の心を暢々とさせた。

「熔岩は月あかりに見るべきものぞ」とは、西歐の詩人の表現上の美しさばかりであるまい、私はそんな事を思つて火山の方も眺めて見た。

街道の一等はづれに、一軒きりの雜貨店がある。雜貨店と云ふよりは荒物屋、いや半ば休所にもなつてゐた。私の知つた人は、この村にきて、荒物屋でする最初の買物が妻楊子ださうである。妻楊子とは、都雅な思ひつきだが、私の場合はさうぢや

ない。五燭くらゐの仄暗い電燈の下で、青い林檎（長野邊で中手と云ふ奴）と、なるべく甘さうな水蜜桃を選ぶことであつた。店の親爺は、「三岡の桃だから、味はうけあひます」と云ふ、田舍の人はよくかう云ふ物云ひをする。三岡がどんな所か知らないが、さうかと思つて買つてみた。

夜道を、すーいすーいと蒼く光つて飛ぶ奴がある。妻は浴衣の袂で押へようとしながら、「大きな螢ですわね」と云つた。このあたりの農家でも蠶を飼ふ。どこの農家にも養蠶の棚が見えて、青くさい匂ひが、夜の街道にまで漂つてゐる。

月の光を頼りにして、今日移つてきたばかりの例の農家、それと道を一つ距てたところに、この近所數軒の家の共同になつてゐる井戸がある。その井戸の前あたりまで歩いてくると、突然、物蔭から、道路の上に飛び出してきたものがあつた。その奴は、時を移さず私を目がけて吠えたてるのであつた。月明りにすかして見ると、やつぱり私の豫感が的中して、例の氣に喰はない奴——白と黑の斑の、人のやうな名前の附いた犬であつた。

決して足もとまでは寄つてこない、一定の間隔を置いて、吠えてかゝるものだ、私は犬に就いてはそんな風な考へを持つてゐた。ところが、この奴は、見事に私の期待を覆へした。今にも、私の足にとびつきさうに近づいてくる。私ははたと當惑した。洋杖も持つてゐない。妻はと見ると、私よりは、どちらかと云へば犬好きの方であるのに、やつぱり困つたやうな顔をしてゐ

る。仕方なしに、私は月の光に白々と見える道の上の小石を拾つた。すると、流石に犬も躊躇した。それに勢を得たので、小石を右手にふり翳したまゝ、じりじりと犬を追ひ詰め始めた。然し、そんな方法も所詮この犬には無效だつた。規則正しく後退してゐた犬も、自分の家の入口の前までくると、ぴたりと、とまつてしまひ、足が地に生えたやうに、もう動かうとはしなかつた。それどころか、折あれば、飛びつかうと云ふ氣構へである。

「こ奴は、きつと俺にかみつく」ふと、私はこの犬の顏に、さう云ふ決意を讀んだのである。實際、その犬はたいへん意地の惡さうな顏付をしてゐた。

「家の人を呼んでみたらどうだ」私は相變らず、石を振り上げたまゝ妻にさう云つた。妻はそれには答へず、「主人は犬が嫌ひだからと云つたら、あの女の人は、なかなか人に馴れない犬だから、當分しつかり縛つておくつて、さう云つてましたのよ」と云ふ。そこで忽ち私は腹が立つてきた。けしからん事だと思つたのである。自分達が外出してゐるのを知つてゐながら、しかも今、かうやつて家の前で吠えたつてゐるのが、中にゐてきこえぬ事はない筈だ、今にも誰か出てくるかと思つてゐたが、もう土間の燈も消えてゐる。ことりとも音がしないで、寢靜まつたやうな氣配だ。

私は、その瞬間、ふと晝間見た、意地の惡さうな青い顏を思ひ出したのであつた。例の小人のやうな四十女の顏である。す

ると、あの黄色い齒をむき出した呪はしい表情が、そのまゝそつくり、この私に吠えたてる犬の顏の中にもあるのであつた。女の氣持をのみこんでゐて、かうやつて私達に抗つてゐる。私の强迫觀念は、すぐそんな妙な方へ動き始めた。

私は思ひきつて、家の中まで聞えるやうな大聲を出して呼んでみた。しかし、返詞はない。犬は私の聲を遮ぎるふうに、一層やかましく鳴きたてる。家の戶口の前を守らうとするこの犬には、すくなくとも、私達が闖入者と見えるらしい。私は動物の氣をそらすためひよいと空を見上げた、すると、流石にこの番兵も小首をかしげて、月を見てゐるふうであつた。恰度、その時であつた。折よくこの寢靜まつた街道に下駄の音がちかづいてきた。私は「しめた」と心に思ひ、例の女が外出してゐて、今歸つてきたものだと判斷したのである。然し、それは中らなかつた。人影は田舍によくある、白い頰冠姿の男であつた。男は、私達が、月がいゝ晚とは云へ、この夢ふけに、街道につゝ立つてゐるのを、怪訝さうに眺めた。然し、犬の鳴き聲で、それと領會したらしい「杵だ」さう小聲で云ふと、かねて、この犬の猛犬であるのを知つてゐたらしく、足早にその場を通りすぎようとした。

ところで、この意地の惡い犬にも、どこか拔けたところがあつた。私達よりも、新たに出現した人影の方が、警戒に値すると思つたらしく、徐々に顏をそちらの方向にむけ始めた。男が普通に步けばさうでもなかつたらうが、小走りに行くものだか

ら、反つて刺戟したものらしい。犬は突然、まつしぐらに男の跡を追ひ駈けた。私は好機とばかり急いで戸をあけて、飛びこむやうに家の中に這入つたのだ。土間の直ぐとつゝきの間が家人の部屋になつてゐた。障子の硝子戸ごしに、さし覗くと、爐の傍に、床が二つとつてある。その一つの方には、例の八十歳の老人が、もう心地よさそうにやすんでゐた。今一つの床は、もぬけの殼になつてゐた。

私達がやつとの思ひで、今日借りたばかりの座敷に歸つたとき、小事件はまだそれで幕にはなつてはゐなかつた。慌てて表の戸を閉めなかつたので、例の人影を追跡してゐた筈の犬は、程なく戻つてきた。そして、闖入者が既に座敷に上つたと知るや、なんの躊躇もなく、ぴよこんと土間から飛び上り、私が「あつ」と思ふまに、早くも次の間にやつてきた。その勢では、すぐにも私の座敷に踏みこむ可能性がある。私は立ち上ると、机の上にあつた文鎭か何かを手あたり次第に振り上げた――考へてみると、全く大人氣ない話だ。妻がその隙に次の間との境の襖をしめた。犬はそれでも屈せず、襖をがり〳〵引搔いてゐる、それから世にも悲痛な聲を出して鳴き始める、そんな事が、かれこれ十分が程は續いたらう、流石にこの屈强な犬も闖入者をあきらめたらしく、どうやら又土間の方へ下りた氣配がした。私は、やつと吻と息をついたが、來た晩からこんな工合である。あんな調子で、私の座敷にも絶えずやつてこられてはたまつたものではない、しかもこの犬を馴らすと云ふ仕事は、不器用な

私には一寸には出來ない業である。それにしても家人はなんとした事か、さう考へてくると、さき程からの妄想が又熾烈になつてくる。何か「敵意」のやうなものが身邊に充滿してゐる風に思はれてくる。私は横になつてからも、しばらくそんな妄想に襲はれどほしでゐた。

かれこれ、夜も更けて十二時を過ぎた頃であつたらう、戸口の所で足音がした。妙に嗄がれた聲が「杵太郎か」と呼んでゐる、つづいて犬の尻尾が硝子戸に當る音がする。私は半ば身を起した。「どうやら、あの小母さんが歸つてきたやうですわ」と妻が云ふ。私はそれをきくと、例の忿懣がむら〳〵と湧いてきた。私が立ち上りさうにすると、妻は小聲で「又明日にでもなすつたら」と云ふ、私は聞えぬ振りをして、襖をあけると、つかつかと次の間の方へ出て行つた。土間との境の障子のこちら側から、少し怒氣を含んだ聲で呼びかけた。

「をばさんですか」

瞬間、物音は止んだ。次に、そつと障子をあけて、土間の暗闇から顏を出したのは、例の青白い四十女であつた。

こんなに遲くまで、何處へ行つてゐたのです、私は餘程さう云つて詰問してやりたかつた。然し、考へてみれば、ついた早早の晩から、そんな口をきくのも少々可笑しい。さう思ひ乍ら、女と顏が合ふと、その面上には一寸人を小馬鹿にしたやうなうすら笑ひが漂つてゐる、女はゐざり寄るやうな恰好をして、

「お客さん達も、お出かけのやうでしたね」

その言葉つきが如何にも白々しい。――この魔法使ひの女奴、私は心の中で、そんな言葉を呟いた。實際、あの藻ぬけの殼の寢床を見たときから、そんな氣持がしてゐたのだ。自分の床を脱け出したこの妖女は、帚木に跨つて、へんにゆがんだ月の出てゐる村の内を一廻して歸つてきた――そんな風に思はれたのだ。私は忿懣を押へて、さき程からの犬の一件を詳しく話し始めた。隙間風が絕えず土間の方から吹いてきて、夏だと云ふのに、膝頭のへんがぶるぶるする。女は私の話をきいてゐる間、最初のうちは例のいやらしい笑ひを洩してゐたが、しばらくすると、すつかり默りこんで、その樣子はもうまるで水のやうに無表情であつた。私は女が返詞をしなくなると、益々苛つてきた。「僕が犬の嫌ひなことは、話して置いた筈です、こんな案配では、第一落つけない、明日にでもほかの家に移らうかと思つてゐる、大體貴女は意地が惡い」そこまで私が云ひ出すと、又女の顏色が三轉した。それはなんと說明したらよいか、とにかく幾つかの感情が交錯してゐる風なものだつた。そしてその雜多な感情の中、一つだけは容易に讀みとる事が出來た、それは意外にも、悲哀の情であつたのだ。

「旦那が」と云つて一寸唾をのみ「そんなにお嫌ひだら、杵は裏の畑に縛つておきませうか、旦那のお目にとまらぬやうに」

女はさう云つて私の顏色をうかがつた。私はそれに對して、すぐ返詞をしなかつたので、女は又しばらく迷つてゐたやうだが

「どうでもお嫌ひなら、八幡の方に、當分あづけて置いてもいい」女はそれだけを思ひ切つて喋つてしまふと、又その青白い顏に微かな笑ひが浮んできた。然し、こんど目のそれは、意地の悪い魔女の笑ひとは異つてゐた。

あくる朝、早いうちから私の枕の下で（そこは例の納屋になつてゐたから）がた〳〵と物を取り出す音がしてゐた。

例の手摺のところに出てみると、八十歳の老人は笠を冠つて、流れの傍で草とりをしてゐた。四十女の妖女も、朝の光で見ると、甲斐々々しく手甲をはめて、畑の方へ出て行く。極めて實直さうな農家の女にすぎなかつた。頭の上にのせてゐた汚ない手拭をとつて、下からお辭儀をしていつた。私はそんな姿を見ると、ふと昨晩のことが、少々馬鹿々々しく思はれてきた、何か後悔にちかい情が時々頭に浮んできたのだ。「杵太郎はどうしたらうか」一夜のうちに、それでも私は例の犬を心の中では杵太郎と呼ぶやうになつてゐた。

妻は洗ひ物をした手を拭きながらやつてくると、「をばさんが、今ここを通つたでせう」と前置きして、「もう杵太郎はゐませんよ」と云つた。昨夜の話があつたのだから、杵太郎のゐない事には私も驚かなかつたが、それに續いて妻がする杵太郎と女の話には、私も少々吃驚した。

女が妻に話したと云ふのは、こんな事であつた。なんでも、

昨夜は女はまんじりともしなかつた、側に杵太郎を寢かせて、色々と云つてきかせた。「お前の性質はどうして直らねえのだ、お前があんなに吠えるもんだで、又お前を他處へやらなくてはなんねい、お前と別れるのが、どんなに切ないか、わかつてゐるだらうに」女はさう云つて搔き口說き、遂に八幡の知り人の家に連れてゆく事にしたのであつた。

妻がそんな話をきいて「それでは、をばさんに餘りお氣の毒だから」と云ふと、女は默つて向ふむきになつてしまつた。しばらくたつと、又妻の方を見て「なにも永い間のこつちやない、又會へると思へばなあ」と云つたが、女の眸には涙が一杯たまつてゐた……

私は妻の話をきき乍ら、さき程からの後悔の念が又熾烈になつてきた。しかし、前にも一度人に喰ひついたときくとやつぱりいゝ氣持もしない。私はその日は一日中、鬱々と暮してゐた。魔女の幻はいつか消えて、私の頭には、せむしの慘めな境涯のが一人ゐる切りである。その傍に、みすぼらしい影のやうな犬が一疋つながれてゐる。そこに這入つてきたのが私達だ、してみると私達は——闖入者、さうだ闖入者に違ひないのだ。私はそこまで考へてきて、思はず溜息をついた。

坐つてゐても、例の火山岩で拵へた築山の蔭から、白くぼつと霞んだやうな野の素晴らしい景色が見えてゐる。なすびや胡瓜、南瓜、あんな田舍の娘達の生々した聲が遠くで呼んでゐるやうだ。

午後になつて、畑から藥罐を提げて歸つてきた女は、又例の手摺の下にきて「旦那」と云つて私の方を見上げた。

「ちよつと出て見なせいな、畑には唐黍がたんとありますに」さう云つて「旦那はもろこしは嫌ひかね」と付け加へた。それは明らかに昨夜からの事に就いてのお詫の意味が含まれてゐて、お愛想のつもりで云つてゐるらしかつた。私はもう詫など云つて欲しくなかつた、寧ろ、自分はもう何とも思つてゐないと云ふ事を、女にも納得させてやりたいと思つたくらゐだ。しかし、どうも適當な言葉がみつからない。すると、女は私の顔色を窺ひながら「父さんにもう働かなくてもいゝと云ふのに、父ざん昔から頑固者だで、見なせいな、あゝやつて草など持つて……」そんな途方もない事を喋り乍ら、草の中にしやがんで、笠だけを見せてゐる植物のやうな老人の方を指さした。

杵太郎が八幡に連れてゆかれ二三日たつた。その犬の出發のときの女の愁嘆振りを、妻は又私にきかせようとしたが、私は「もうたくさんだ」と云つて、なるべく聞かぬ振りをした。

又こんな事もあつた。

その日は一日晴れてゐたのに、夕方から雲が出て、大雨になつた。女の言葉に依るとなんでも、この地方では怖れられてゐる種類の雨ださうだ。

——淺間雷音ばかり

そんな小唄の文句もある由だが、實際は、雷光も激しく、風もあつて、どこか近くの森にでも落ちたものか、障子の内にゐても、火柱のたつのが見えた。
私はふと老人と女とのこんな會話を聞くともなしに聞いてしまつた。
「父さん、さうだらう、お前が死んでしまへばなあ」
女の聲である。老人は答へない。
「どうしるだね、こんな事は云ひたかねいが、お前だつて、もう八十せえばなあ」
「俺が死んだら、お前、泉洞寺様の裏のよう、お前ちの母さんと同じ穴に這入るばかりよ」
「死ねばさうさ、死ねばさうだけんど、俺ちはどうしるだね」
また老人は答へない。しばらくたつて、嗄がれた聲が云ふ。
「考へるでねえ」
「考へるでねえつたつて、お前、心細いだよ、かうやつて、風が吹く、雨が降ればよう……」
それから後の言葉は私にはきゝとれなかつた。私は勝手口に水を飲みに行く振りをして、下駄をつゝかけ、土間を通ると、障子の硝子戸越しに、目ざとく見つけて、女はまるで意味のないやうな御辭儀を一つぴよこんとした。

晴れた日は、ときたま庭に喙の黄色な鶺鴒がとんで來た。

妻は食事をしたあとで、何を思つたか、つか〳〵と手摺の傍にゆくと、そのまゝ手をかけて、打伏すやうな姿勢をした。私がどうしたのだときくと、何んでもありませんと云つてから、又一寸聲を落して「胸元がちよつと……」と云つた。顔色がよくない、私は少し不安な氣持もした。考へて見ると、近頃は餘り食事も進まないやうだ。胡瓜が美味しいと云つては、一寸野性的にぽり〳〵とかんでゐたのは來た當座のことだ。近頃では、その胡瓜もあまり食べない。犬の騒ぎもやつと一段落したのに、又ここで妻に病氣になられてはと思つて、しばらく妻のぢつとして動かない樣子を眺めてゐた。

二三十分たつと「何んでもありませんわ」と云つて妻は顔を上げたが、顔色はやつぱりよくなかつた。

夕方、氣晴らしに庭に出て、庭の裏手から野の方にゆかうとすると、こんもり繁つたすもゝの木の下で、畑から歸つてきた女と妻が立話をしてゐた。女は私の姿を見かけると、急いで付けたす風に「では、旦那には、今少し内證でね」と云つた。そして、私の方に向いて、「旦那、お出かけかね」と云つて、例のいやらしい笑ひを洩した。

私はその女の樣子が、なんとなく不愉快だつた。やつぱりあの魔女の幻影が、私の頭の中から拭ひ去られてゐなかつたのだ。

野の道をぶら〳〵歩き始めた。このあたりでは、日ざかりを過ぎても、畑には餘り人影がない。農家は如何にも閑散なやう

だ。水車小屋の傍までくると、脇の道からひよつくりと一人の娘が現はれた。例の山袴を穿いてゐる。手足は一寸華奢な女だ。頬冠りした手拭の端を口もとのところで、輕くかんでゐたが、目もとには僅かばかりの笑が漂つてゐる。髮の恰好は、手拭の上からではあるが、都會じみた形をしてゐるやうだ。じつさい、この附近では、夏の頃になると、外から這入つてくる都會女の影響がすぐ村の娘の上に表はれてくるのだ。感じやすい、受用し易い若い女の心は、あんな强い刺戟に會ふと、一たまりもないらしい。

娘は、人を見る目からして變化してゐる。あのおづ〱したやうな田舍の人らしいところはない。道が一つになる所までくると、娘は立ちどまつて、私をさきに通さうとした。わざとらしい笑ひ方をして、それからゆつくりと後から隨いてくる風だ。

目のさきの少し起伏のある野中には、ぽつりぽつりと樹が立つてゐる。そんな姿のいゝ一本の喬木の下で、何か白いものがちら〱してゐる。よく眺めると、白いものは山羊の子であつた。木の梢の方は、目に見えない風を豫知してゐるやうに、微かにかすかに搖れてゐた。

私は少し歩いてから、振り返つてみた。娘はもうゐなかつた。景色は、どうかすると一寸「西洋の田舍」のやうであつた。野中の日の沈むあたりに、マリヤの祠がある。あの娘は、あんな晴れやかな顔付にも拘らず、贖罪の道を急いでゐたのではな

いか、ふと私はそんな氣持もした。
それにしても、この村の衰微の姿はどうしたことだらう。私はそんな寂しい村をそびらにして、かうやつて日の沈んでゆく道を歩いて行くことが、何か耐へがたいものに思はれてきた。
寂しいのは村ばかりではない、第一今借りてゐる、あの家はどうだらう。古家のもつ寂寥だけではない、あれはひよつとすると、何か呪ひのかかつてゐる家ではなからうか。そこまで考へてくると、私の目の前に大映のやうに、例の魔女の顔が浮んできた。それと何か聯關でもあるかのやうに、さきほどの妻のことが――あの手摺から顔を上げたときの、氣色のすぐれない、青白い容子が、急に私の心をとらへた。私はもう一歩もあるく氣持にはなれなかつた。

「杵太郎、ほら、やるよ、杵太郎」
そんな犬をなづける妻の聲が、突然、庭の方で起つた。暑い午後であつた。机の上に坐つてゐた私は、初め一寸自分の耳を疑ぐつてみた。しかし、妻の聲は確かに「杵太郎」と云つてゐる。私は呼びさまされたもののやうに、急にすつくと立ち上つた。
裏庭の兎小屋の前にくると、柿の木に、やつぱり犬は繋がれてゐた。私は、そのぎら〱する柿の葉の照り返しの下の一光景に、茫然としてしまつた。

妻はビスケットの小片を無造作に犬の方に投げてゐる。その側に、例の女が、にたりにたり笑ひ乍ら立つてゐた。そして女の手には小さなコップが、牛乳を一杯滿たして持たれてゐた。流石に、女は私の姿を見ると、急に顏を曇らせて、「あれ、奥さん、旦那が」と早口に呟いた。私はその光景を一瞥して、直ちに、いつぞやの妻と女のひそひそ話の正體を領解したのであつた。

「もう大丈夫よ、おこつてはゐませんもの」

妻は女に安心させるやうにさう云つてから、私に向つて、「杵太郎が歸つて參りましたの」と事もなげに云ひ放つた。

私は當然何か一言云ふべしでやつてきたのであつた。然し、犬と妻のこの意外の情景を見ては、一寸言葉も出なかつた。杵太郎はもう全く妻になついてゐたのである。そればかりか、小首をかしげて、私の方も眺めてゐたが、見れば尾を振つてゐるのである。あの猛々しい容子がまるで見られない、それに僅かばかりの間であつたが、だいぶん窶れたやうなところもある。

女は、しばし狡猾さうな目つきで、私と杵太郎を見較べてゐたが、やつと安心した風に私の傍に進み出て、手にしてゐたコップを私の方へ差し出した。

「旦那、お願ひ致しやす。これを杵にやつておくんなして」

「これを、どうするのです」私が吃驚した風に云ふと「それを貴方が杵太郎にやれば、杵はきつと貴方にもなつくからつて、をばさんが云つてるのですよ」と妻が横合から說明した。私は

成程と思つて、その美味しさうな牛乳のコップを無言で女から受けとつた。

「いらいもんだ、他人の中にゐると、お前様、畜生でも苦勞をしると見えますねえ、ちつとの間、見ねえうちに、ほら、こんなに毛の艶も惡くなつた」

女はさう云ひ乍ら、あまり美しいとも思はれない犬の背中を、勞るやうに撫でてゐた。

「どうだや、櫟の山は淋しかつたかえ」

女は又人に、云ふやうにそんな事を呟く。

「櫟の山とは何處なのです」

「なにね、この犬をあづけといた所さね、櫟の林の眞中にあつて、わしらとは從姉妹同志さよう、昔の叔父貴の家ですがね」

女はさう答へ乍ら、犬の頭から尻尾まで、幾度も〳〵撫でてゐる。

私は牛乳のコップを、少しはまだ用心をしながら、犬の口のところまで持つて行つた。杵太郎は又一寸小首を傾げて、まぶしさうに私を見た、そして、ぺろりと自分の口の周りを一舐めすると、今度は舌を鳴らして、そのコップの中に首を入れた。もう夢中になつて飮み始めた。

「可愛ゆいものですわね」

妻がさう云ふと、女は頷いて、私も何か云つてくれないかと、促す風に、さし覗くのであつた。

「杵太郎」私がさう云つて呼ぶと「ほら、旦那が杵と呼んでゐ

なさるでねえか」と、女は機を逸せず云つたが、流石に犬は犬である。もうコップの牛乳から容易に顔を擧げなかつた。

それにしても、いくら櫟の山で寂しい思ひをしたとは云へ、それに家に歸つた喜びでとりまぎれてゐると云つてもあんなに激しかつた犬の氣象が、急にかう優しくなるとは不思議である。私はそんな疑問を抱いた。優しいのは擧動ばかりではない、顔の中にも、意地の惡い、とげ〳〵しさは、もうまるで見られなかつた。

私のそんな疑問に對しては、女は例の狡るさうな笑ひ方をしながら、こんな風に說明した。

「そりやあ、お前樣、私がゆうべ連れて歸つてから、一夜さ、ほんとに夜ッぴいて、杵にはようく云つてきかせましたで」

女はその「ようく」と云ふ所を、特に力を籠めて云つた。

「ほんとに、櫟の山ぢや、ちやんと連れて歸るときには禮をする、さう云つてあつても、あの慾張り爺奴、碌すつぽお飯もくれなかつたと見える……」

女は又例のとげ〳〵しい物云ひをして、ぢつと犬の顔を眺めてゐる。「さうなんだらう杵太郎、いいとも、もうお前、櫟の山の方なんぞ見るんでもねえぞ、誰がもうお前を手離すもんかい」

女の言葉の最後の部分には、櫟の山の人に對すると云ふよりも、寧ろ、私に對する、この間からのひそかな忿懣の意が含まれてゐた。

「でもよかつたわねえ、かうやつて、杵太郎とも仲直りが出來て」

元來犬の好きな方の妻は、もう女の寓意などには頓着せず、如何にも晴々しくさう云つて喜んだ。人と犬との和解は、私にとつても悪い氣持はしなかつた。こんなことが機になつて、動物に對する今までの神經質すぎる、やゝ偏してさへゐる嫌獸癖が、私の心の中からふつつり消えて無くなつたら、それだけで、ひよつとすると、自分の生活意識も豐かになるのでなからうか——世間が廣くなる、どうもこんな表現はいささか滑稽だが、そんな風にも思はれた。

「旦那、ですからね、これからは毎日牛乳を呉れてやつておくんなんしよ、一度に皆ぢやいけないから、さう、朝と晩、二度に分けて頂きやせう」と女は云つてから「毎日牛乳一合だせえば、月に積りや馬鹿になんねい」と付け足した。これも皆お前様達の爲だぞと云ふ意味を、明らかに言外に匂はしてゐた。

犬が歸つてきても、もう私の心は亂されるやうな事はなかつた。縛つてゐない時でも、犬は私の顏を見ても、——牛乳の旦那、とでも云ふ風に、一種の親しみを見せるのであつた。

然し、この古家に飼はれてゐるのは、犬だけではなかつたのだ。兎のゐるのは前にも云つたが、その外に猫もゐた、猫は親が一匹と子猫はどうやら三匹位ゐるらしかつた。親猫が天井で子猫を生んだのであつた、以來その天井裏がこの猫族の住居であつた。しかも何の因果か、その天井と云ふのは、實は私の部

屋の眞上に當つてゐたのだ。

子猫は乳が欲しくなると、天井裏から顏を出して、しきりに鳴き立てる。すると、どんな遠くにゐても必らずその聲をきゝつけて親猫は戾つてきた。私の机の前の廊下が、つまりその親猫のお通り道だつた。しかも、子猫の鳴くのはきまつて朝早くか、夜ふけてが多い。時刻にすれば恰度私の就寢時と目ざめる頃に當るのだ。その上、鳴くだけならばいゝが、子猫達は遊戲をやるらしい。激しい音をたてゝ天井裏を駈けずり廻る。その度に私の寢床や机の上には時ならぬ土埃が舞ふのであつた。

猫族の存在も、そんな次第で、すくなからず私を惱ました。然し、當時は恰度杵太郎が櫟の山に預けられてゐた頃だ。ここで又猫の苦情でも私が持ち出さうものなら、愈〻もつて私達はこの家にとつて非情な闖入者になる譯だ。そこを考へて流石の私も我慢した。それでも或る時など、私は何氣なしに「お宅には猫もゐますね」と云つた事があつた。すると女の顏は見る見る眞靑になつて、「旦那は、猫も、猫もお嫌ひかね」と悲痛な口調で女は問ひ返した。私はそれと察して、すぐ周章て打消した。「いや、僕は猫の方は苦にならない」

ところで、正直に云へば。私は猫も嫌ひなのだ。寧ろ犬の方が勇壯活潑で、あの猫族のこつそりと人の膝の上にのつてくるやうな不氣味さに較べたら、遙かにいゝと思ふ程だつた。然し、子猫の場合は別だつた。私と雖もあの小さな形には愛らしさを感ぜずにはゐられなかつた。

或る日のことだつた。

子猫の中の一匹が、どう足を踏み誤つたものか、突然天井裏から廊下に落ちてきた。落ちた子猫はそれでも早速柱を傳つて、天井裏に歸らうと幾度も試みた。それに悲鳴をきいて駈けつけた親は子猫をくはへて登らうと色々と工夫を始めた。然し、まだ力のない子猫には勿論ひとりでは登れない、親の努力も中々効を奏しない。私はそれを見てゐるうちに思はず涙ぐんだ。親猫にして見れば、どうしても天井裏の安全地帶へ連れ歸らなければ、安心が出來ないらしい。そこで、私は子猫を捉へて、私の手で天井へ返してやらうと考へた。然し、子猫は警戒心が強く、その上中々敏捷である。どうして私のやうな野呂間の手には捉へられない。仕方なしに私は思案の揚句、例の女に話して見た。「あんたなら飼主だから、先方でも安心するから、捉へてみたらどうです」すると、女はにやりと笑つてから、意外に冷淡な表情で云つた。「ふん、お前様でも可愛ゆいと思ひなさるからね」私は不愉快になつたが、「可愛ゆいとも」と答へると、女はもう一度、鼻の先で、「ふん」と云つたばかりだ。

それから二日ばかりたつと、廊下にも、庭さきにも、或は天井裏から、行儀よく顔を竝べて覗く子猫達の中にも、例の迷子の姿は見られなくなつた。私はその愛すべき子猫の行方がたいへん氣になつた。

腰を曲げて、不氣味な恰好をして歩いてゐる女を庭に見かけた、「あの子猫はどうなつたね」と聲をかけて

素知らぬ風をして行き過ぎかけたが、ふと氣がついやうに私の方を見上げて、「あれ、旦那、吃驚するぢやないのそんなに急に呼びかけて」と云つてから、「猫かね、猫ならもうとつくに流しちやつたよ」と如何にも面倒くさいもののやうに返詞した。

「流しちやつたとは」と私は呆氣にとられてきゝ返すと、「なにね、その流れにさ、見るみるうちに流れちやつたよ、造作もないものさね」女は益々冷然として云ひ放ち、私がそんな可哀いさうなことをと云ふ間も與へず「第一うるさいやね」と言葉を結んだ。

「俺が子猫は愛らしい」と云つた言葉を憶えてゐて、それでそんな意地惡をしたに違ひない。さう思ふと、私は急に腹がたつてきた。「畜生奴、あいつはやつぱり魔法使だ」私は女の不氣味な後姿を見送り乍ら、思はず、そんなことを呟いた。

　妻は、その後も、時々、へんに氣分が重かつたり、食慾の進まない事があつた。暗い部屋の内に坐つてゐると、庭のぎらぎらする青葉の照返しで、一層懶く、青ざめて見える事もあつた。

　私はその頃一途にこの家が不衞生なのだと考へてゐた。それも尋常の不衞生ではない、古い街道の昔からあつた家であるから、或は何か、呪ひのやうなものがかかつてゐるのではないか、呪と云へば、この家だけではない、この家の人にも――さう思つて、ふと庭の方に目をやると、流れの傍にしやがんで、洗ひ物をしてゐる女の目と、ばつたり行き逢つた。女の眸は、笑つ

てゐる、薄氣味惡く。「あゝ、いやなものを見た」私はさう思つて、急いで庭から目を逸した。

然し、意外な事實が、間もなく私達を訪れた。

「かうして、へんに體のだるいのは、只の病氣ぢやないやうですわ」

或る日の食卓で、突然、妻はそんな事を持ち出した。「あんなに好きだつた、お野菜なんかも頂けないし」さう云ふ妻の蒼白い顏の目のふちのあたりは、ぽつと紅をさしてゐた。

これだけ云へば、すぐ私にわかつて貰へると妻は思つてゐたらしい。然し迂闊な私は、さう云ふ點では凡そわかりが惡かつた。

「只の病氣ぢやないと云ふと、どうなんだね」

妻は今度は、わからない方ねといふ風に、一寸微笑した。瞬間、私はやつと思ひ當つたのだ。「あゝ、さうだつたのか」私があんまり大仰な表情をしたので、妻は今度はほんたうに笑ひ出した。

「さうだとすると、いつ頃になるのだい、生れるのは」

「でも、はつきりした事は、まだ一月位たつてみないとわかりませんわ」

「いや、それに違ひない、さう云へば俺もなんだか豫感があつたのだ」

「でも、ほんとにまだわかりませんことよ」

「さうだよ、きつとさうだよ。なんなら、小諸の醫者にでも診察して貰つたら」

「まだきつとそんな事、お醫者樣でもわからないと思ひますわ」

「いやそれは兎も角としても、姙娠は間違ひない。もうそれに決つた」

私は妻とこんな會話を交してゐる中に、段々と昂奮してきた。いつのまにか立ち上つて、それはほとんど無意識ではあるが、懷手をしたまゝ、部屋の中をぐる〳〵と步き始めた。これは私の妙な癖であつた。例へば何か小さな詩の斷片が、心の中で結實しかゝると、きまつて私のやる癖であつた。まるで、音樂にでも身が操られてゐる風に。「ほら又昂奮していらつしやる」妻は私の癖を知つてゐて、そんな時は、きまつてさう云ふのであつた。

「さうだと思つてゐて、もし違つたら、どうなさる。だから私はもうしばらくたつてから、申し上げようと思つてゐたのに」

私は妻のそんな言葉はもう耳に這入らなかつた。例の手招のあたりまで行つて、又部屋の中に戾つてくる。ぶらぶらと行きつ戾りつを始める。

「そんなに今から昂奮なすつて」

「あたり前だよ、俺は昂奮しやすいのだ」

妻はもう斷念した風に、ぢつと坐つたまゝ、私のぐる〳〵步

きを眺めてゐる。
「子供なんていらない、何日か、貴方はさうおつしやつたのに」
「云はないよ、そんな事は」
「でも、つい先達も、そんな事を」
「わからないな、それはお前、負け惜しみと云ふものさ」
私はもう上の空でさう云つて、相變らず懷手のまゝで立つてゐる、かと思ふと歩き出す。
それにしても、今の今迄私の考へてゐたことは、この家が日當りが悪く、不潔であつて、近頃の妻の樣子ではひよつとするとひどい病氣でもするのぢやないか——、そんな不吉なこと、暗い氣持で一杯だつたのだ。それが又これはなんと云ふ變りやうだらう。急に目の前がひらけたやうだ。陳腐な表現だが、夢のやうだとでも云ふ外はないのだ。
私はそんな妙な昂奮にとり憑かれたまゝ、やがて部屋を出て庭の方へ降りて行つた。
庭には、杵太郎がゐた、私を見ると、ちよつと尾を振つて、私の手の方を見てゐる。例によつて牛乳を持つてゐたのだ。私はつか〳〵と傍へゆくと、何の躊躇もなく、杵太郎の頭に手をやつた。私の愛撫にはなれてゐないので、不思議さうに目をぱちぱちさせてゐる。「杵太郎、俺と一緒にお出で」と云ふと、私はさつさと歩き出した。犬には未だ牛乳の未練が殘つてゐる。呼ばれるまゝに、後の方から隨いて來た。小さな流れを渡つて、茨の垣の間を歩いてゆくと、柵のところで野良歸りの女とぱつ

たり出會した。「そうら、又蟆子が食ひからかいて」と女は足のあたりを手でぱた〳〵と敲いてゐた。「旦那お出かけかね」とお定まりの挨拶をして、ふと杵のゐるのに氣が付くと、一寸目を圓くして、「お乳の時間でもねえのに、杵お前どうしただ」と怪訝な顔をした。「いや、なんでもないです、只隨いてきたのだ」と私が答へると、「ふん、さうですかい」と私の心を讀むやうにして、又杵に向つて、「お前、旦那のお伴をして、何處さゆくだ」と付け加へた。

私の顏色はきつと晴々としてゐたに違ひない。女はしばらくぽかんと口をあけて、私が傍を通つて柵をあけるのを眺めてゐた。

「旦那、行つてお出でなして、見なせえ、今日は夕立も來さうでねえし、いゝ案配だ」

實際、明るい夏の高原の空を流れてゆくものは、何の陰翳もない、一寸手でつかみたくなるやうな、白い美しい綿雲であつた。

「をばさん、今日は夕立もこないらしいな」

私はくるりと振返ると、まるで取つてつけたやうに、しかも、女が今言つたと同じ言葉を、まるで山彥のやうに、云ひ返した。私の心の中の平衡をとるためには、そんな事さへ必要だつたのだ。

流石に女の姿を見かけると、杵太郎は柵の外までは隨いてこなかつた。立つてゐた女はいつのまにか車前草の敷きつめた草

原に小腰をかゞめて、杵太郎の首を抱へるやうにしてゐた。元來せむしで小柄な女が、さう云ふ姿勢をとると、まるで現實離れのした、何か不思議な生物のやうだつた。犬の顏と女の蒼白い顏が二つ行儀よく竝んでゐた。

「お前さま、野良には俺ちの父さんがゐるだから、お茶が這入るからつて、ちよつと聲を掛けてやつておくんなんしよ」女の聲が、やゝ離れた所で云つてゐる、私はそれに對しても輕く頷いてみせた。

豐かな夏の作物の間を、ゆつくりと歩き始めると、あの五月頃の野で覺えるやうな、草いきれ、あれに似たものがついと私の鼻を刺戟した。野の一本道はまつ直ぐにゆくと、鐵道の堤防にまで續いてゐる。そのところに淺間葡萄飴の廣告が一つぽつかり突つ立つてゐる。

「父になる」さう云ふ何か嚴肅な感慨は、いつのまにか私の心から拭ひ去られてゐたのであつた。それとは反對に、私の心に浮んでくるものと云へば、私が妻と結婚する前後、さう妻がまだ田舍少女であつた頃のことが、不思議に強く蘇つてきた。と、忽ちに、白い夏の強い光が一杯に私の周りに滿ちてきた。あの山の名前は何と云つたつけか、烏帽子岳、さう確かそんな山だつた。その高い山竝が、行手にぽつかり浮んでゐた。葉が日の光にかさ〳〵になつた桑の木畑の道は、お城跡の公園から、だらだら坂を下つてきた所、私より少し後から、おくれて隨いてくる田舍じみた少女は、手に小さな風呂敷包を持つてゐる――

家の小さな弟に土産に買つてきたものだ、少女はそんな事を云つてゐた。その手に持つた風呂敷の中で、カルケットの罐がかちからと歩くたびに空しい音をたてゝゐた。娘の穿いたフェルト草履、その上の白足袋は縁が薄すらと汚れてゐた。私の黑の短靴も、道の土埃でもう白くなつてゐる。私達は道道どんな話をしたことやら、それはもう全然忘れてしまつた。少年と少女の、恐らく話はそんな未熟なものの間で交されるやうな事だつたに違ひない。私が何か云ふたびに、「ほんとにねえ」とか、「さうでございますわ」とか云ふきりだ。

「まあ、こんなところまで來てしまつて」

娘がさう云つて、持つてゐた洋傘の尖で指さすやうにする方を見ると、千曲川が流れてゐた。夕陽がその一筋の川の上できらきらと光つてゐた。まるで浮き出したやうに白い繭倉の建物の多い小さな市が、目の前にひらけてゐた。

娘の心が成長したやうに、私の氣持も成熟した筈だが、そして、それから……

束の間の白い夏の光は、急に立ち消えたやうに思はれた。

「ちよいと、御免なして」私は後から人に呼び掛けられてゐたのだつた。狹い野の路を私はいつのまにか堤防の所まで歩いてきてゐた。私の後には小さな荷車を曳いた農夫が立つてゐた。

「すみましねえ、道が狹いもんだで」私は、はつとして道をよけた。まるで大切な言葉を盗聞きでもされてゐたやうに。

車は男のぴよこんとお辭儀をするのと同時に、徐々に動き始

めた。車の上には、夏の作物、白菜が一杯に載つてゐる、その後に隱れるやうにして、小さな子供も坐つてゐた。子供は不安定な車の動搖の中でも、何やら笑顏を作つて手には赤い總の付いた、毀れたやうな喇叭を持つてゐる。車ががたん〳〵とするたびに、子供の顏は高くなつたり、低くなつたりして見えた。そのお粗末な玩具の赤い總と一緒に。

私は、もう一度さき程の續きを思ひ出さうとはしなかつた。私の身の周りには、やつぱりあの年の夏と同じやうな草いきれ、白い夏の光がまだ充分に滿ちみちてゐた。

一日は霧が深く、遠い森やちかくの澤の上に一杯に捲いてゐた。そんなどんよりとした天氣だと、部屋の内では、机に向つても本を讀むことが出來なかつた。

霧雨にしつとり濡れて、合羽をきた郵便脚夫が私の家の土間に立つ。それから少したつと、又表の硝子戶が開いて今度は、中込町から洗濯屋さんがやつて來る。小さな木のパイプに詰めた兩切を一杯に吸ひ切つて、「あゝ、魂消えやした。御代田の驛ではいゝ日和さ、それがどうだらず、坂を登りはねると、めた霧が深くつて、しめつぽくて」とさう云ひ乍ら、土間の所に腰をかけて、女の出してくれる澁茶をすゝつてゐる。

そんな日は犬も猫も一日中家の內で遊んでゐる。杵太郞はそれでも遠慮して、決して座敷の方まではやつてこないが、猫の

奴は一向にお構ひなしだ。なるべく廊下の傍の明るい所へと思つて、机を置くと、その前を洒々として通つて行く。挨拶のつもりか、私の方に向つて一聲「ニャー」と鳴く。だがそれでゐて、私は存外平氣である。猫を横目にちらりと見て、又書物の方に夢中になる。

妻は妻で、頗る近頃では機嫌がいゝ、時々何かひとり言を呟いてゐる。誰と話してゐるのだと聞くと、うす笑ひして、「お腹の中の太郎ちやん」と答へる。今度は逆に私の方で、「そりやあ、少し氣が早い」とでも云はなくてはならない。

妻は又こんな事も云ふ、「貴方は、あの小母さんのことを魔法使だなんておつしやつたけれど、考へて見ればお氣の毒ね、一生涯あゝやつて不自由な體で、子供はないし……」

その最後の「子供はないし」と云ふ所を特に強めて云つてみせる。そして「杵が可愛いのも無理はない」と、一寸溜息を吐くやうに呟く。私もそれには逆はない。成程と考へる。

そんな一日霧雨に吹きこまれた晩などは、どうかすると、私の方から禁斷を破つて、老人達の爐端に出向いてゆく事もあつた。

老人や女は、田舍の古い家によく有る、箱膳で飯を食ふ。鮭の燒いたのを半分だけ食べて、お皿の上から湯を注ぎ音をたてて啜つてしまふと、殘つた半分は又大切さうに箱膳の引出にしまつてしまふ。それから一寸口元を掌で拭いて、老人は如何にも滿足した風に口の中で何か呟く。

私が這入つてゆくと、女は最初は吃驚したやうだ。「旦那〻どうしなすつたね、御用かね」
「いや、用事ぢやないが」
私は言葉のつぎ穂がなくて、有耶無耶に爐の傍に腰を下ろしてしまつた。
「旦那が見えたのだ。おきぬ、お茶でも淹れて、一つ走り、菓子でも買つてこぬことにや」
老人は珍らしく、そんなお世辭を云ふ。
「どうして、このお天氣に、今頃店が開いてるものかね」
女はさう素氣なく云つてから、「父さん、この霧がお前には惡いんだね」と話を逸らしてしまふ。
私はこの老人から、驛路の昔話の一つでもきゝ出さうと考へてゐた。然し、耳が遠くて、その上無口である。話をするのが、とんと好かないと云ふ人だ。「お前の昔話がよう、旦那がきゝたいと云はつせるだに」女が耳もとで大きな聲でさう云つても、ふふう、ふふうと老人は、笑つてゐるだけである。
すると、しばらく私の顏を見てゐた老人は自分からこんな事を云ひ出した。
「旦那、お前樣は、えらく、その卷煙草を喫ひなさるが、美味いもんかね」
女は老人の言葉について、得たりかしこしと口を出した。
「俺もそれを云はうと思つてゐただ。皆も喫ひきらねえで捨てなさる、煙にしたつて勿體ねえだ」

それから又三人が無言になる。ごほん、ごほんと老人の咳が始まつたが、その咳の合間に、嗄がれ聲で、「きぬや、ほら、夜業蟲が鳴いてゐら、夜なべしろ、夜なべしろつてな」

私は老人や女に一寸氣兼ねしながら、又もう一本、巻煙草に火をつけた。

晴れた、爽やかな日は又すぐそれに續いた。

「もうお別れも近いやうでね、わしら、秋はほんとにいやだよう」

女は如何にも耐へ難いものゝやうに、秋風の冷たさが、ほんとに骨身に沁み透るやうに、さう云つて喞つのであつた。

どんなに明るい晝間でも、老人の坐つてゐる爐のほとりは薄暗い。うしろの障子の開いたところを見ると、小庭に恰度老人の背中のへんに、美しい百合の花が咲いてゐる。それがこの陰氣な、何の色香もない古家にとつては、少し不似合でなくもない。勝手の土間にはバケツが一つ置いてある。皮をむいた玉葱が一つ、水の中に浮んでゐる。その玉葱の皮は土間の上にも落ちてゐて、猫がそれをこつそり踏んで、床の上にぴよこんと飛びあがる。微かな光が土間一杯に漂つてゐる。この弱々しい光線の下に見ると、世に猫ほど美しい動物はない！

禰津の黒姫様のお札、別所の觀音様の厄除、そんなものが、黒ずんだ、蟲の喰つた太い柱にぺた〳〵とはつてある。その前

で、老人はもう少しも動かうとはしないのだ。
　朝ごとに、街道を馬に乗つて通る少女があつた。私が部屋に坐つてゐても、襖や障子の開いてゐる時は、その騎馬の姿がよく見うけられた。女の話によると、昨年の夏とかに、村のはづれに有る測候所の地續きのところに新らしく家を建てた、其の富豪の娘ださうである。いつも白い運動服姿で、肩や手のあたりが綺麗に日焦けした、頗る活潑な少女であつた。それがもう八月も半ば過ぎると、いつのまにか運動服の上に、オールドローズの美しいセエターを着るやうになつた。そして、後毛を一寸手で搔きやり乍ら、相變らず元氣に乘馬を續けてゐた。が、もうこの二三日は乘馬の女騎士も通らなくなつてしまつた。
　街道は、日がな一日、お構ひなしに少し肌に冷たい風が吹き通つてゆく。家の軒に吊した芋の葉がかさ〳〵と鳴つてゐる。日溜を慕ふやうに、村の女が幼兒を連れてあつまつてくる。
「めつきり朝夕寒くなりやした」
「ほんにねえ、いゝ案配だと思ふのも、ほんの一つきりさ」
　そんな中に、吾が家の魔女も、如何にも氣易げに交つてゐた。

　夏の間に、私達は西瓜を二つばかり買つて置いた。一つは食べて、殘りの分は食べよう〳〵と思つてゐる間に、急に時候が涼しくなつてしまつた。少し暑い日が戾つてきたら、裏の川で冷やして置いて、食べてしまはねことには、私はさう思ひ、そ

れが妙に氣になつて、口ぐせのやうに妻に云つてゐた。そして「ぢいさんにも呉れた方がいゝね」とも忘れずにつけ加へた。
障子をしめて置くと、うつすら汗ばむやうな日も稀にはあつた。私は机の前で仕事を始めてゐた。少し位暑くとも障子をしめない事には、虻がくる、いや、虻よりも農家は蠅の方が大變であつた。
庭の方で、妻と老人が立話をやつてゐる。きくともなしに聞いてゐると、どうやら西瓜を妻が持ち出してきたらしい。老人はもう食氣一方だ。しきりに傍から口出しをしてゐる。
お前さま、袋に入れて、しつかり結へて置かぬことにや、どうして、この川は流れが早い、すぐ流されてしまひますに、と老人はいつもの調子に似ず、少しせはしげに喋つてゐる。
「さうでせうか」と妻が訊く。
「さうとも、お前様、この川はこんなでも、善光寺様までつゞいてゐるだからね」
「まさか、そんなこと、おぢいさん」
「何云ひなさるね、こゝからぽいと西瓜を流せば、なんなく、お前様の故郷まで辿りつくと云ふものさ」
ふふう、ふふうと云ふ、老人の氣の抜けたやうな笑ひが、その後から洩れてくる。
妻は明るく笑つたやうだ。すると又老人が何かぼそ〳〵と喋つてゐる。
「いゝ事もあれば、又悪い事もありますからね、おぢいさん」

と妻が答へてゐる。
「ほんに、お前様たちでも、しばらく戻りなさらんと、そんなものでごわすかなあ」
　老人の相槌をうつ聲が、又はつきりと聞えてきた。
　私は机の傍を離れて、疊の上に、ごろりと手枕をして横になつた。例の古い手摺の影が、今日はくつきりと障子紙に映つてゐた。私はそのまゝで手をのばして、側の毛布をひきよせた。

　追記……古い驛路の一夏の手記も、もうこの邊で擱筆しようと思つたが、私は一つ書き忘れたものゝあるのに氣がついた。外でもない。この宿の女が私を呼ぶのに「旦那」と云ふ。これは私にとつて甚だ耳觸りであつた。恰度かうやつて文を綴つてゐても、さて「旦那」と書く段になると、そのときの厭やな思ひが、まるで惡夢のやうに蘇つてくる。
「旦那」もいやであつたが、それよりもつと私の氣になつた言葉づかひは、この女が屢ゝ自分自身を呼ぶのに用ひた「あたい」と云ふ言葉であつた。甘つたるくとも、若い娘の場合であれば、それはそれで又風情もあらうが、この四十女の、醜い口からそれが出ると、私はむしずが走るやうな想ひがした。
　その事と、以下に述べる事とは、幾分關係するところがあるやうに思はれる。と云ふのは、私がこの家の壁間に、若い女の寫眞を見たことは最初に記した。その若い女の正體は、後にな

つて、やつと判明した。それは餘人ではない、私が醜いと云つた、魔女その人の若い日であつたのだ。

女には、如何なる境涯にあつても、何か自慢するものが必要であるらしい。この四十女の私の妻に話す自慢の一つは（もつとも今となつては、慰めと云ふ方が適當だが）女の若い頃の美貌であつた。口で云ふより、事實を示す方が效目があると思つたのか、或時つひにその寫眞の事を喋つてしまつたのであつた。

その後に、私はふとした機會があつて、村人から女の前身に就いてもきく事が出來た。それも甚だ漠とした事ではあつたが、この魔女は、昔、遊里にゐたと云ふ事であつた。

私はそんな話をきくに及んで、遊里の女が何故あつて、又この寂しい秋風の里に戻り、八十の老人と侘しい生活をするやうになつたか、又寫眞で見ればまんざらでもない容貌が、どんな境涯と運命の下で、今日の醜い、不運な體となつたのか、そんな事を、とつおいつ空想してみた。

「ほんに、長病ひのあげくが、昔から見れば、半分の身體になりやした」

これが僅かに妻に洩した女の述懷の凡てであつた。

魔女の正體は結局私にはわからなかつた。

私が今少し才覺かにめぐまれてゐたならば、或は一篇の傳奇な物語が出來たかも知れない。

私は只、火山の麓の、秋草のしげみに、何か人間のぬけ殼――形骸の如きものを見たにすぎなかつた。

御

坊

一

紀の國は昔から蜜柑の名所（などころ）である。

私の幼時を回想すると、蜜柑山、蜜柑船、なんでもそんなものが、子守唄の中にたくさん織りこまれてゐた。父が紀州生れであり、從つて、乳母（おんば）の中に、幾人か色の黑い紀州女がまじつてゐたものと思はれる。

然し蜜柑だけではない。紀州では洵に見事な柿も實る。もつとも、私がそれを知つたのは、ほんの近年の事で。父が亡くなる年の秋、初めて、私はその美しい富有柿を口にした。

富有、禪寺、堂上蜂屋、次郎柿、花御所と數へて見ると、柿と云ふものは、見た目にも美しいが、その名前も亦優雅である。

「こんな見事なのが出來るのですか？」

秋の一夜、私は大柿をむきながら、傍の父に訊いてみた。

「そりやあ有るとも、今頃氣がついたのかい、さう云へば、一體お前方は紀州のことは知らないね」

父の返詞はかうであつた。さうして、なんとなく寂しい面持であつた。

私は今ここで紀州の柿の緣起を記さうとは思はぬ。只、その

時の父の言葉が妙にいつまでも私の頭に殘つたのであつた。

父が亡くなつてから、折に觸れ、私は父の遺著を讀む機會が多かつた。

「南國拾遺」そんな書物を手にして見ると、その中には、父の在所の色々の昔話、或ひは傳說に類するものが、こと細かに記るされてあつた。そして一讀後、茫々とした紀州の春を感じるとともに、父の愛したものが――ありありと目に浮んできた。

元來、私の父は經濟の學を修めた人である。さうして、日常の生活でも、不合理な物の見方、あやふやな事柄、さう云ふものはたいへん嫌つてゐた。

ところで、その父が、「南國拾遺」の中ではしきりに、例の道成寺の「淸姬傳說」を取り扱つてゐる。土地で「淸姬の帶」と呼ばれてゐる、日高川川畔の秋雲のことが書かれてゐるかと思へば、淸姬の愛人であつた、僧安珍の塚の柊の木のことが見えてゐる。又或る一個所では、自分の幼時の友であつた忠僕の話が、あたかも日高大野の一つの創造された傳說中の人物の如く、たいへん深い愛情を籠めて書き記してゐるのに出遭ふ。

して見ると、父はまんざら傳說嫌ひでもなかつたと見える。否、すくなくとも故鄉の傳說だけは又別個であつたと解釋出來る。それらの話が、幼時から歿する日まで、父の腦裡から去らなかつたとすると、人の心の中に生き生きと活きてゐたと云ふ

一つの事實が、もうりつぱに傳說の價値でもある。
とつおいつ、私はそんな事を考へた。さう云ふ折に、ふいと、思ひ出されるのは、父の在りし日の秋の一夜と、紀州柿の話であつた。
父の故鄕に行つてみたい、愛してゐたその風物にも、じつくり目を通してきたい、さうして、さうする事によつて、ひよつとすると、父の心の在方にもほんとに觸れられるのではないか。私はそんな事も思つてみた。
秋のお彼岸前のこと、私は故山に歸つて、母の許にあつた。そのとき、偶然の事から、父の家の系圖に就て母から語りきかされた。これは私にとつては、全く耳新しい事であつた。
元來、私の父の生家は商家であつた。祖父の代までは、江戶積蠟燭を商つてゐたときかされてゐた。武家の系圖は不思議はない。然し、父も一度もそんな話はしなかつたし、私の家にそんなものがあるとは、夢にも考へてゐなかつたのである。
母の語る處によると、系圖は私の家にはなくて、紀州の本家に存したものであつた。その紀州の本家も、今は故あつて離散した。母は父の歿後、その系圖を、他鄕に住んでゐた本家の人から借り受けたとの事であつた。
「分家だとて、私共も見ておかなくてはと思つたのだよ、やつと一枚分だけ寫したが、お前の分にも、もう一枚寫しておかなくては」
母はそんな事を云つた。

私は系圖を目の前にして、もう一度、紀州ゆきを思はずには
ゐられなかつた。
　系圖は是非寫したい、しかし、その前に、丁度お彼岸にもな
るしするから、一度母子連れで、紀州へ行つてみませんか、私
はさう云つて、母にすゝめてみた。
　父の歿後、病身の母は多く床にあつた。稀にしか外出しな
い。然し、母は珍らしく、私の誘ひに乘つてくれた。「さう云
へば、お前と二人で旅をするなんて、幾年振りだらうね」さう
云つて、母は如何にも樂しさうに見えた。

　紀州ゆきは大變いい日和に惠まれた。
　和歌山からさきの紀勢線に乘ると、もう赭ら顏の紀州人、紀
州言葉が、そこここできかれた。
　父に云はせると「紀州顏」と云ふものがあるさうである。母
が私の洋服の袖をひいて、「あの顏なんかが、つまり紀州顏だ
ね」などと、信玄袋を股の間にはさんで、腰かけてゐる娘の方
を指して云つたりした。
　箕島へんまでくると、もう車窓から、蜜柑山が手にとるやう
に見えた。然しまだ季節には早い。私は、ぼんやりと窓外の景
色を眺めてゐたが、柿の木には、なんとなく氣がひかれた。
　御坊に着いたのは、夜の九時頃で、暗いプラットホームに立
つて迎へてくれたのは、昔の乳母の一人で、「ようお越しやつた

のし」とその赭顔は云つてゐた。

宿は、中町の、本願寺派日高別院と、丁度むかひ合せであつた。ガラス窓を明けて見ると、大寺の甍が夜空に黒々と目に映じてきた。

この御堂を抜けてゆくと、東町に出る、そして其處には、昔の和佐屋――父の生家があるのであつた。

あくる朝は「紀州にお越しになつたら、これを食べてもらはな、どもならん」と云つて宿の女將が、茶粥を食膳に出してくれた。

元來、紀州では、朝と晩は粥をたべる。所謂茶粥と云ふ奴である。その茶粥も、お冷やの御飯を椀に半分位入れて、その上からお粥をかけて食べるのである。普通の町家では、朝飯は、それに金山寺味噌、梅干などの自家製を供する位の、至極簡單なものであつた。

秋の彼岸で、御堂の裏門も中々賑はつてゐた。手桶と花を提げた老人達が、幾人か出這入りしてゐた。さうして、この老人天國の上の空も、美しく晴れ上つてゐた。

私は母と乳母の一人の三人連れで、御堂の裏手の、先祖代々の墓地に詣でた。墓地にゆく小徑のかたはらには、一本の大きな百日紅の老木があつて、まだ一杯に小さな花をつけてゐた。

歸り道に、御堂の庭を横切るとき、乳母はふとこんな事を呟いた。

「御覽じろ、旦那はんも、ちさい時は、この庭で遊びやつたの

よう」
さう云へば、御堂の庭では、町の子供達がベースボールをしてゐる最中で、餓飢大將らしい、背のひよろ高い子供が、何か甲高い聲でしきりに叫んでゐた。

父の生家、東町の和佐屋は、御堂の正門を出ると、すぐ目の前の建物であつた。幾度か增築をした筈だが、人が住まなくなつて久しい建築のすべては、もういゝかげん時代めいてゐた。
昭和初年の金融恐慌で、伯父の家は急に傾いた。伯父が逝き、祖母がその後を追つた。大家族で有名な、いつも笑ひ聲の絕えなかつた和佐屋も、その後二三年の中に離散し、當主である父の甥も今では他鄕で暮してゐる。
考へてみると、父が折にふれ、故鄕の事を書き始めたのは、あたかも、晚年の和佐屋を眺めるやうになつてからである。現實に喪つたものを、もう一度心の裡に、組み立てゝ見る、父は無意識にもせよ、そんな事を果した結果になる。
和佐屋の表門は堅くとざされてゐた。塀に沿つて、私は母と裏手の方に廻つてみた、ひつそりとした小路である。「のり」を賣る紅殼塗の家などがあつたが、道は小綺麗に掃かれてゐた。
母は立ちどまると、心覺えのある、朝顏棚のあつたあたりの裏木戶を、そつと押した。木戶はすぐ開いた。
「留守番の人でもゐるかも知れないね」

母はそんな事を呟いて、しばらく庭先をさし覗いてゐたが、私は急に押しとどめた。筋かひの家の店の間の格子の中から、老人らしい人の聲が突然起きたからである。
「どなたもをりませぬで、清兵衞はんは、川原に釣に行つてゐやんす、どちらからお越しなら？」
母は一寸口の中で返事をしたが、急にもう引返さうと云ひ出した。清兵衞とは何者であらう、その知らない人物が住んでゐるときいては、訊ねてみても所詮無駄だと知つたのである。

その日の午後は、道成寺に詣でた。道成寺は御坊の町から十八町、今では紀勢線の道成寺驛が出來てゐた。
天音山道成寺には六十二段の石段がある。傾斜がたいへん上手に出來てゐて、能の足拍子をふむ調子通りであると語りつたへられてゐる。石段の中程には、昔大津浪があつてその時、浪がこのところまで押しよせたとかで、石に記念の碑文がきざまれてゐた。
僧房には、老住職と、その人の養子の中年の僧とがゐた。老僧は獨身である。然し「わしは一生獨身(ひとりみ)であつたが、これからの若い者は、嫁はんがのうては」と云ふ思ひやりから、若い方の僧には妻女があつた。
天台のりつぱな書院の間で見かけた妻女のひとは「まるで吉祥天女のやうな顏だね」と母が後で云つたが、美貌な、胸高な

女人であつた。

本堂で父の回向をすませると、私は老僧に乞うて、私の幼女のために、髪長姫のお守りを頂いた。髪長姫とは、この寺の創建にかゝる傳說の宮子姫の事である。

僧坊を辭して、庫裡の三和土におりると、夕明りに、少し缺けた大きな甍が二枚ほど、片隅においてあるのが、目についた。

「さうさう、まだ御見舞も申しませんでしたが、先日は雷樣が落ちましたさうで」

母は甍に氣がつくと、そんな事を老僧に云つた。

「さやう、たいへんな落雷がございまして、御覽じろ、これがその時に破れた本堂の尾敷瓦ですら」

と老僧は例の鬼瓦を指さした。五百年以前の瓦であつて、大檀那源金比羅丸と云ふ文字と、忘れてしまつたが、瓦工の名も記されてあつた。

「方丈樣でも、その時は、隨分こはかつたで御座いませうね」

「なんの、阿房なものは倖せと、もうどうであつたか忘れてしもうた」

老僧と母との間には、そんな會話が交はされた。

日の傾いた頃に、やつと一日の旅程を終へて、私達は宿に歸つた。

夕食の後で、母は、この御坊の町に、たつた一人生き殘つてゐる、父の舊友を訪ねると云ひ出した。舊友は岩國屋九兵衞と云ふ町の雜貨屋さんである。もう久しく中風で臥せつてゐる老人だ。

母が出かけると、私は所在なく、茶卓の前に坐つてゐた。窓から、御堂の大銀杏の梢が見えてゐる。宿は料理屋も兼ねてゐる、町の藝者でも來てゐると見えて、廊下の、エビスビールの大きな廣告鏡のあるあたりで、時折、女の笑聲が起きたり、ぱた〳〵と走るスリッパの音がする。その間に入りまじつて、あのゆつたりした女の紀州言葉は、「好かんよう」とか、「姐はん、うちのお座敷どこなら」と云つてゐる。然し騷がしいと云ふ程ではない。

私は、持つて來た鞄の中から、例の家系圖をとり出して來た。

家系圖は是非私の分としても、寫して置きたい。それには、このまゝ寫すのもなんだか興が薄い。

幸ひ、私は今日の一日中、御坊のところどころを歩いて見た。それ相應の感銘があつた。又母からも、道々いろんな事を物語られた。潤色を施すと云ふ心算はないが、私は私流の筆で寫して見よう、ふとそんな事を思ひ付いた。

私は手を拍つて女中を呼ぶと、電燈の球をすこし明るくして貰つた。さうして、今一度詳しく、家系圖に目を通して見た。

分家して家を興した私の父は、何事も舊に屬するやうな事に

は、無頓着の方であつた。然し、晩年は、必ずしもさうではなかつた。「落人」と云ふ短い文章の中で、自分の祖先にも觸れてゐて、父の家はもと源家の一族で、和田氏の末だと記してゐた。和田氏の一族が、熊野路の村々に潜入したのが、その起りだと云ふ風に書いてゐた。父は、この系圖を見て書いたものか、その點は不明だが、私はそれにより、朧ろげにも過去を想像したのであつた。

さて、この家系圖を讀んでゆくうちに、私にとつて、朧ろであつた過去は、段々明るくなつて來た、二十代にわたる一つの氏の變轉をつぶさに知る事が出來たのであつた。

人の一生と云ふものは、凡そ如何なる平坦な生き方をした人にあつても、これを詳細に眺めれば、それ相應の高低がある、波瀾がある。見方によれば、中々ロマネスクである。まして、一つの氏の歷史の場合は尙更だ。

私は、平凡と思つてゐた豫想に反して、屢々感嘆した。さうして、その感銘の消え去らない前にと思ひ、急いで、茶卓の上に、紙をひろげた。

二

津村氏は始祖を三郎宗家と云つた。勢州渡會郡に住んでゐた。

その子三郎左衞門重家の代になつて「北畠戰後紀州入」とあ

るから、初めて津村氏が紀之國の人となつたものらしい。
重家から三代を經た、宗重後永壽軒と云ふ人は、文龜年間の戰ひに敵將内堀彈正を討つと、簡單ながら記されてある。さうして、この人は、行年八十九歲と云ふから、中々長命の人であつたらしい。

宗重の孫を信近と云つた。この人の事は就中、私の心をひいた。それは信近の條に、「故有テ湯川家臣ト成」と記されてあつたからだ。

湯川氏は、御坊丸山の城主であつた。父の著書中から、湯川氏に就ての說明を借用すると、次のやうなものである。

「紀勢西線御坊驛の直北に接して、日高平原の眞只中に、丸山と云ふ孤山が屹立してゐる。この丸山は元龜天正の頃から、南朝の遺臣湯川直春の居城であつた。この直春は一面信仰厚き石山本願寺派の客將であつたので、ここにわざ〳〵本願寺の別院を迎へたのだと云ふ。つまり、城があつて、その城下に寺が出來て、その寺の周りに町が生れたのだから、かうして生れたこの新しい寺町には、その當時、自らなる城主の保護の厚かつたことは想像するに難くない。それだけに今も御坊の日高別院の内陣には、本尊の阿彌陀如來の御厨子に、湯川直春公の尊像が祭られてゐる」

私が湯川直春に就て知るところもこれだけである。この父の說明によつても、わかるやうに、湯川氏は、父が好んで云つたキルヘン・シュタット――御坊の町の殿樣であり、又同時に、

この田舍町には珍らしい、大伽藍の庇護者であつた。
然し、史實はそれだけとして、私共の少年時を回想すると、そこには又別な湯川直春があつた。少し傳奇めいた話である。
話と云ふのは、父の生家に久しく召使はれてゐた老僕友助の口から、きかされたものであつた。
老人はたいへん寡默な男であつた。無愛想と云つてもいい位、にこりともしない。その友助が一日の中で、一度だけ機嫌のいい折がある。それは晩酌のあとであつた。暖國と云つても、一月すぎると、寒い晩がある。店の間にゐて、海鳴りがきこえる。
「信(のぶ)ちやんら、早う、おやすみなよ」と優しく祖母に云はれても、少年の好奇心は中々ねむらない。そんな晩に、私は醉餘の友助をつかまへると、早速「話をして」とせびつたものだ。
「こはい話(はなし)んかい」と老僕は云つて、にたりと笑ふ。「小坊(ちいぼん)さんは、こはい云うて、便所に行けぬなど云うては、どもなりませぬで」と先づことわる。
老僕は膝をゆす振る、首を振る、さうして話を始めるのだが、ざつと云ふとこんな事である——
紀之國の秋もおそい頃になると、きまつて、御堂に祭られてゐる湯川直春公の御命日がくる。
すると、月のいい晩が幾夜かつづく。
舊城跡のある丸山は、山と云ふよりは小高い丘と呼んだ方がいい位のもので、入山(にふ)と云ふ恰度兄弟のやうな小山と、二つ相

竝んで、日高平野の中にぽつかり浮き出てゐる。

御坊の町の或る者が、そんな靜かな晩のこと、庭にある後厠に入つてゐた。すると、丸山の方向にあたつて、時ならぬ物音がする、物音は耳を澄ますと、段々近づいてくる。やがて、男には、それが鐵蹄の音であると氣がついた。不審に思つた男は、恐る〳〵後厠の窓から覗いて見た。すると、月明に地の面が白白と光つてゐる、御坊東町の街道を、今し、鎧甲冑に身をかためた一人の白面の武者が、騎馬の姿で通りがかる、男は、はつと思つて息をつめた。馬上の武人は、ゆる〳〵と手綱を引くと、この町の中心になつてゐる――そして其處には湯川直春の尊像が安置されてある、本願寺派日高別院の寺門にさしかかつた。そして、こは如何に、夜目にもはつきりと、大寺の門は眞一文字にひらかれてゐるではないか。馬上の武士は、一寸沈痛な面持をして、空を仰いだ。それから後は、まるで吸ひこまれるやうに、寺門の内にその姿を沒してしまつた……

話はそれだけである。老僕は幾度も話した事柄らしく、日頃の訥辯に似合はず、ここまでを一氣に語る。

もとより年代も不詳、昔語りにすぎないが、庭にランプのやうな蜜柑の木の見える、初冬の紀の國の夜更け、老僕の口から、そんな話をきかされると、私は戰慄をおぼえた。

然し、子供心にも、唯こはい話とばかりは思はなかつた。日本の幽靈話には一寸類のない、何か戰國の悲壯なロマンチシズムを夢見るやうな心地がした。

別な湯川直春とは、つまりこの話である。
さうして、史實も、湯川直春は居城丸山に據つて織田勢を敵にして勇戰し、討死したと傳へてゐる。
ところで、本文に戻つて、吾が家の系圖によれば、このロマンチックな、さうして、宗教的でもある武將湯川公の家臣中には、私共の遠い血筋のものがゐた譯である。即ち、信近と云ふ人の代になつて、津村氏は湯川家に仕官した。さうして、その女(むすめ)時女も同じく湯川の臣津村信秀と謂ふ人に嫁してゐる。
それだけではない。信近の孫兵部之烝宗虎は「天正十二年極月三日、若林ニテ討死、行年二十八歲」と誌るされてゐる。その室は津村信秀の女(むすめ)とあるから、宗虎夫妻は從兄弟の間柄であつたものらしい。この夫人の方も、「天正十一年三月十一日、行年二十一歲」となつてゐる。さうして、宗虎の弟將辰の條には「天正十二年極月三日、兄宗虎ト共討死」と明らかに記錄されてある。して見ると、夫人は夫より一年前の、春淺い日に歿した事になる、しかも二十一歲と云へば、あまりにも早世である。又宗虎兄弟は、日を同じくして、城を枕に討死したものである。
ここまで讀んできて、私は何か深い感銘を覺えた。天正十二年極月三日と云ふ日は、果してどう云ふ日であつたか——おそらく丸山落城と關係するところがあつたらう、二十八歲と二十三歲の若武士二人、丈ながい黑髮の女、私はそれらの人々を思はずにゐられなかつた。さうして、そんな私の思ひの中に、幼

時に聽いた、あの月明の晩に馬を驅る武者一騎が浮びあがつて來た。

宗虎の子宗清は「父宗虎討死後、西川家ニテ成長」と記されてゐる。早く父母に別れ、孤兒として成長し、家名を繼いだものであらう。同じく宗虎の一子權太郎宗成の方は、「慶長十九年大坂陣淺野家先手加手負故鄕ニ歸ル」となつてゐた。主家湯川氏の沒落後、ほどへて、當時の和歌山の城主淺野氏に仕官したものであるらしい。さうして、豐臣、德川の決戰には、出陣して、手負となつた。故鄕に歸つてからは、どうしてゐたものか、おそらくは南紀の日暖かな海べりで、手負の身を養つてゐたものであらう。宗成の孫は權兵衞宗正と呼んだ。宗正の代に到つて、津村氏は武門を離れて、日高郡和佐村の庄官となつてゐる。武士を捨てた理由に就ては、別に明らかにされてゐない。

系圖はこの權兵衞宗正と云ふ人のところから、新にされてゐて「寛文十二年壬子暮春再號」と云ふ註が附されてゐる。つまり津村氏の武士としての系圖はここで終り、その後は新に、鄕士或は町人としてのものである。權兵衞宗正の孫佐七は、御坊村に造酒店を開いた。さうして、初めて和佐屋と云ふ屋號を名乘つたのである。佐七には男子が二人有り、德藏、文右衞門と呼んだ。德藏は故あつて、造酒屋の店を弟文右衞門に讓り、自分は故鄕である和佐村に歸村してゐる。妹はとみと呼んだ。この妹も和佐村の好玄寺に嫁した。

好玄寺は津村氏の代々の菩提寺であつた。私がもう少し早く、

この系圖を知つてゐたなれば、一度この寺を訪れたかつたのである。好玄寺には、古い過去帳も殘つてゐた。ところが悲運にも、好玄寺は、丁度この春大火を發し、堂宇は空しく炎上してしまつた。さうして、老住職も寺と共に燒け死んだのであつた。

老住職とは私も一面識もなかつた。そしてこれは單なる挿話にすぎないが、この老人には一寸奇妙な評判が傳はつてゐた。評判と云ふのは外でもない、老住職の吝嗇に就てであつた。渡しの賃金が惜しくて、寒中にもかゝはらず、裸になつて川を渡つたと云ふ一事を話せば、略その人柄が想像されようと思ふが、兎も角近村まで鳴りひびいてゐた。

元來、好玄寺は肉食妻帶の許されてゐる眞宗の寺であつたので、檀家の人々がその老後を慮つて妻を持つやうにすゝめた事があつた。すると、老僧は「女子(をなご)も錢をつかはんとえゝが、錢を使はれてはどもならん。一日三十錢位ですむものであれば、嫁はん貰うてもえゝが、さうでなければ、結句獨身(ひとりみ)の方が、氣づつうなうてえゝわだ」と平然として答へたさうである。

寺の火事の原因に就ても、又こんな話がある。この孤獨な老僧は當時もう八十ちかくなつてゐたが、それまでの年月に、餘程蓄財の才覺があつたと見え、十數萬の金を積んでゐたさうである。さうして、偶ゝ、檀家の寄進もあり、修復のためか、寺の普請をやつてゐる最中であつた。その時、寺内には鋸屑がうづ高く積まれてゐた。そこで大工達がそれを處分しようとした。すると、老僧はその鋸屑をさへ惜しんで、大工達の自由に

はさせなかつた。それが禍の因となつた。何の過失から起きたものか、火はその高く積まれた鋸屑から發したのである。春の猛火は忽ちに、堂宇に燃え移り、それを灰燼に歸せしめると同時に、老僧自身をも燒いてしまつたのであつた。

人の風説は區々であると云ひたいが、事實は、すべて僧への非難に一致した。日頃の吝嗇が祟つたのだと云ひ「和尚はん、火の車に乘つて、地獄詣りをしやんした」と口々に罵しつた。もつとも、ある思ひやりの深い、同郡の僧の一人は、私にさうは語らなかつた。「なんせ、あの仁はえらいもんよのし、人のやうせぬ事をしてゐやんした」

話は又脇道にそれてしまつた。

文右衞門の子は德藏と云つた。そして妹りゑは「若山駿河屋庄兵衞ニ嫁」とあつた。

現今でも、和歌山市には、老鋪で駿河屋と云ふ菓子屋がある。その赤羊羹は名代であり、一寸類のない位美しい光澤を保持してゐる。私も幼年時代、好物の一つであつた。妹りゑの嫁いだ先は、この羊羹の店であつたらしい。

德藏の弟に佐吉があつた。佐吉は幼名を留藏と呼び、御坊の町で、新に江戸積蠟燭の店をひらいた。明治八年四月四日寂となつてゐて、この人が私の父の祖父に當る。歿年の明治八年は丁度父の生れる一年前の事であつた。父があるとき、「俺の家は代々商人であつたが、中には、風流な人もゐて、發句を作つた」と私に語つた事があつた。その風流人はこの佐吉であつた

と思はれる。

家系圖はこの佐吉と云ふ人の所までで止んでゐた。

三

宿の中はもうすつかり靜かになつた。

座敷の前には物干のやうな、出つ張りがある。そこに置いてある鉢植ゑの大きな濱木綿が、深い蔭を落してゐた。

母はほどなく戻つて來た。隨分疲れたらしい顏色をしてゐた。

「でもよかつたですね、かうやつて先祖のお墓詣りも出來て」

私がさう云つて話しかけると、

「ほんとに、お日和だつたし、おまけにお彼岸だもの、御先祖のお引き合せだよ」

と答へて、何氣ない風に、茶卓の上を眺めた。

「寫してゐたのかい」

「ええ、やつと今書き終つたところです」

私が系圖をさし示めした。すると、母は突然こんな事を云ひ出した。

「御先祖のおひき合せと云へば、ほんとに世の中には不思議と云ふものが、間々あるものだね、お前にはまだ話さなかつたかしら」

母は前置をした。さうして、この春に道成寺に詣つた折の事

を次のやうに語つてくれた。

この前母が道成寺に行つたのは、もう春も少し闌けた頃であつた。連れの年老いた女が一人あつた。

母は老僧に會つて、父の冥福を祈るために回向を依頼した。道成寺は天台の寺であり、天台は人も知るやうに密教に屬する、その儀式めいたところ、莊重な讀經などを、母はたいへん好んでゐた。すると、讀經の前に、僧房で、老僧は「つかぬ事をうかがひますが、お宅の御先祖のどなたかで、當寺に御位牌をお預けになつた方がある。貴女は御存知でありませぬか」と訊いた。

母はもとより、そんな昔の事は知る由もなかつた。唯「私の家では、御位牌はすべて日高別院の方に安置して御座います筈ですが」と答へただけであつた。

さて、老僧は、母と老女を、暮春の庭をゆつくりと歩いて、本堂の方へ案内した。そして、愈〻亡父の回向を始めるといふ前に、奥の方から、一つの古びた位牌を持ち出してきて、「只今申したのは、この方で御座います」と母の前に示した。

母がその位牌を詳さに按じてみると、それには、しかじかの法名が記され、裏面には和佐屋と云ふ屋號も書いてあつた。確かに津村家の何代目かのお内儀さんには違ひない。さうして、「子を生みて死す」と云ふ文字もあつた。

母はとりわけ、その文字に感動した。あはれ深く思つた。そ

れに津村家の人であるとすれば、勿論粗略には出來ない、さう思つたので、早速、老僧にお願ひしてその御位牌を安置し、亡父と共々、回向を願つた。

老僧はそれをきくと、大變よろこんで「御先祖のお引き合せよのし」と云つた。

丁度、讀經の最中であつた、役僧は立つて、蓮の花の形をした小さな紙を撒いてゐた。頭を下げて、自身も小聲で經をよんでゐた母は、突然、時ならぬ物音をきいた。物音は上下に響いた。母は思はず、はつとして頭を上げた。もうその時は既に物音はやんでゐた。

經が終ると、母は不審でたまらず、早速「方丈樣、さきほどの物音は何で御座いませう、只の地震とも思はれませんが」と訊いた。老僧は、衣の袖を合せて、威儀を正し、母の前に來て坐ると、「おきゝであつたか」と云つて、あれは愚僧が按ずるに、世間で云ふ、家鳴震動と申すものであらうと、言葉少なく說明した。

「それでは、その家鳴震動とは、どう云ふもので御座いませう」と母が重ねて問ふと、老僧はもう一度、前のやうな、たいへん喜ばしげな表情をして「いや、貴女樣が、遠方からお越し下さつて、洵に偶然の事と申すほかはない。當寺で今迄お預りして居りました、この御位牌の佛も、さぞよろこばれた事であらう」と靜かに云つて、言葉を切つた。

暗い廻廊を案內されて、めぐるうち、老僧は戶を繰つて、「御

存知であらうが、あれが當山の入相櫻ぢや」と云つてさし示した。母はまだ夢のやうな氣持でゐた。惜しい事に、櫻の季節はすでに幾分すぎてゐたが――

母は話し終ると、もう横にならうと云つた。

前に賴んでおいたと見え、夜更けであつたが、町の按摩がやつて來た。

若い按摩は後に廻ると、靜かに母の肩を揉み始めた。

「お前と、かうやつて、旅に出るなんて、幾年振りだらう」

母は又そんな事を呟いた。そして間もなく目をとぢた。かと思ふと、又細目をあけて、私と茶卓の上をそつと眺めた。

「紀州へは、初めてかのし」

若い按摩は話好きらしかつた。母がねむつてしまふと、今度は私に話しかけた。

「いや、子供の時に二三度來た」

「御坊の町は、昔と較べて、どうですら、ちよつとはようなつてゐますかのし」

「子供の時の記憶だと、いつまで暑い所だつたが、今年は秋が早いやうだね」

私は、そんな事も云つた。

母の安らかな寢息が時々洩れ始めた。私が默つてしまふと、この若い話好きらしい盲人も、所在なさうに、口をつぐんだ。

「電燈を暗うせぬと、ねつけぬ仁がある、電燈は暗うなつて居りますか」

しばらく間をおいて、又按摩はひとり言のやうに呟いた。

私はそれには返事をせず、茶卓の上の、家系圖と、その寫しを靜かに疊み始めてゐた。

濱木綿の鉢植ゑは、まださつきのまゝの大きな竊を、物干しの床に投げてゐる。

「旦那はん、きこえませぬか」

ふいと又盲人は、私にむかつて、そんな事を云つた、私は頭をもたげた。

「夜さりは、海が荒れてゐるらしい、きこえませぬか、ほれ、潮騷がします」

私は、盲人の指さす方向を眺めた。濱邊はどちらの方に當るものか。

秋の夜の、星空のもとに、御坊の町家の屋根は、もうひつそりと寢靜まつてゐた。

碓氷越え

高原停車場に汽車が着くと、私はプラットフォームに降りて冷たい水を飲んだ。
「七分間停車」甲高い聲で呼びながら、驛夫が通りすぎて行つた。
「少し時間があるから」さう云つた顏付で、ぽつぽつフォームに姿を見せる人々もあつた。首に卷いた手拭を取つて、驛の冷たい水で絞る人も、立賣の名物蕎麥を忙しくかき込む人もあつた。トンネルを幾つも拔けて來た人の目には、峠一つで、こんなに季節が移り變るかと訝るくらゐ、遮ぎるもののない、薄の原を吹いて來る風は冷たかつた。薄の穗の一つびとつは蜻蛉の臛が凝つと止つてゐるかのやうに、夕方の光りのなかで、ちかちかと目に映つて來た。
「あれは、冬に氷を作る室ですね」
ふと、私の背後に聲がしたので、振り向くと、紋付袴の中年男であつた。私はあゝこの人かと思ひ出した。
「なかなか冷えますな」
男はさう云つて、又田舍の人らしく遠慮勝ちな目付で、私の姿を上下に見た。

「どちらまで、おこしです」
「善光寺の町まで行くつもりですが」
「はあ、善光寺、ぢやまだ二時間の餘ありますね、俺らは小諸まで、御婚禮がありましてね」
男は濡手拭でしきりに首筋を拭いてゐた。

私はこの中年男を憶えてゐた。汽車が丁度横川の驛に着いたとき、二等車の方へ乘りこんで行つた御婚禮の人々があつた。振袖姿に、重たさうな髮をしたお嫁さんを中心として、かれこれ七八人の人達だつたか、フォームの所で、しきりに皆の人の乘込の注意をしたり、荷物を數へたりして、世話役を務めてゐたのがこの男であつた。乘客達は窓から首を出して、稀らしさうに一行を眺めてゐた。
私も、實はその一人で、田舍のお嫁さんが稀らしいと云ふだけでなく、峠の秋を、汽車に乘つて嫁づいて行く人が、なにか美しいやうな、いぢらしいやうな氣持さへしたのであつた。
それには、きつと、私の感じ易い心の狀態も手傳つてゐたのに違ひない。
上野を發つてからの永い汽車の旅の間ぢう、私は一人の女のことを考へつめてゐた。それは、これから訪ねて行かうとしてゐる、善光寺の町の一女子のことであつたが、この花嫁の姿を見てゐると、急に激しく私の頭のなかで、搖ぎ始めたのであつ

た。
田舍の花嫁は、ほとんど顏は見る事が出來なかつた。ただ、堅く閉ぢた口のあたりだけが、一寸窺はれた。
「おあきらめ下さいませ、お忘れ下さいませ」
それは私が夏の終りに、一女子と高原を徒歩で行つたとき、桑畑のなかで、きかされた言葉であつた。それが、あの花嫁の堅く閉ぢた口元を見てゐると、不思議に思ひ出されてくるのであつた。

花嫁を見送る人のなかには、子を負つた婦人もゐた、二三人のお友達らしい娘達もゐた。口々に何か云つては、その都度花嫁の方に目を遣るのであつた。男の人には提灯を持參したものも見かけた。あれは婚禮の習慣だらうか、それとも、この横川の町から、田圃の夜道を歩いて歸る土地の人なのだらうか。

汽車が發車する間際に、すこし年をとつた婦人が、窓の傍に近づいて、花嫁の耳に何か囁いてゐた。「菊ちやん」そんな言葉だけが聞きとれた。年寄らしく、一寸ハンケチを出して涙を拭いてゐた。

あの人だつたか、私はさう思ふと、一寸反射的に一行が乘りこんだ二等車の方を振り向いて見た。車窓には付添の人々の顏は見られたが、「菊ちやん」と云ふお嫁さんの姿はなかつた。
「善光寺までは、あと二時間もあるのか」私は獨言のやうに云

つて、プラットフォームの上を行つたり、來たりし始めた。と、頭の上が急に明るくなつた。停車場に電燈がきたのであつた。それは澄んだ山の空氣のせゐか、冴々とした秋らしい匂ひのする灯影であつた。

「善光寺に行つても、はたして、今晩のうちに逢へるものだらうか」

私は何度も、懷中時計を出して、眺めて見た。

「もし、お稀らしい、木内さんぢやありませんか」

突然背後から又呼びかけられて、私は吃驚した。

「今頃お見かけするのは變だと思つたが、やつぱり貴方でしたか」

さう云つて近づいて來たのは、夏の頃沓掛で暮したときからの顏馴染の、町のパン屋の主人であつた。

「どうしました、御旅行ですか」

私は又、さつきのやうに善光寺までと云ひかけて、ふと口を噤むだ。

「いえ、一寸」

「さうでしたか、私はこれから沓掛まで、どうです、町に寄つていらつしやいませよ、もう東京のお客はゐませんが、さうさう、L先生、御存知でせう、L先生がまだ御滯在ですよ」

「L先生？」

私はさう云つて聞き返すと、ああ先生はまだいらつしたのかと思ふのであつた。すると今迄ぼんやりと眺めてゐた薄の原

も、このまま見過して行けないやうな氣持がした。
　夏なかば、沓掛で一女子を知り初めた頃と、L先生とは、そしてこの火の山の裾に擴がつた高原地が、いづれの一つも、私には離して考へられなかつた。
　L先生はこんなに秋深く、まだ薄の原に燈を點してゐられるのか！　L先生に御逢ひして行かうか、すると、夕方のひもじいやうな侘しさが、私の心を不思議に老師の許に牽きつけるのであつた。
　私は主人の方に向くと、突然かう云つた。
「ぢやあ、一寸途中下車して行きませうか、秋には一度も來たことはないし」
　主人は合點して、降りるなら、早く荷物や帽子を取つておいでなさい、もうかれこれ發車の時間ですよと云つた。私は自分の氣まぐれを顧みるいとまもなく、主人に挨拶もそこそこにして、三等車の方へ取つて返した。
　私が荷物を提げて、プラットフォームに立つと、下り列車がごうごうと響きをたてて、這入つて來た。それと前後して、私達の汽車の發車のベルが、けたたましく鳴り響いた。パン屋の主人は、もう汽車に乘り込んだらしく、姿が見えなかつた。例の濡手拭の連中も首に卷きつけたまま、列車の入口に急いでゐた。鞄を提げて歩いて行く私と、すれすれに汽車が動き出した。私はこの善光寺行きの汽車と竝んであるき始めたとき、自分が氣まぐれなことをしたもんだと云ふ、後悔の念が湧いて來

た。丁度、二等客車が私の傍を横ぎるとき、私はふと窓に白い顏を見た。峠の花嫁であつた。あの菊ちやんと呼ばれたお嫁さんは、少し緊張が解かれたかのやうに、疲れたらしい瞳を、ぼんやりと硝子窓に寄せてゐた。それは何か、夕方の畠で見る白い花のやうな美しさであつた。胡瓜や茄子のやうなお嫁さんであらうか、私は通り過ぎて行く窓を見てゐると今さらのやうに、どうして途中下車などをしたのかと悔ゆるのであつた。

胡瓜や茄子のやうなお嫁さんは、峠の上と下で、氣候があまり變つただけでも、心細い思ひをしてゐるだらう、落葉樹の林にうすい霧のかかつてゐるのを見ては驚き、白樺の幹が光るのを眺めては、外國の旅のやうな想ひをして。

汽車の窓と白い顏は、瞬く間に遠のいて行つたが、私はいつのまにか、善光寺の一女子の身の上に思ひを馳せてゐる自分に氣が附いた。

沓掛にゐた頃、折に觸れて、私は都の話をきかせたことがあつた。さう云ふ場合に、「女子は稀らしさうに、熱心に聞いてゐたが、終つたあとでいつも溜息まじりにかう云つたものだ。

「私のやうな草深いところで育つたものは、都會のお話を伺ふだけで、もうなんだか怖ろしくて」

驛から昔の中仙道に當る町の方に出るためには、また小さな輕便電車に乘らねばならなかつた。

驛前の廣場も、夏場のやうな自動車の混雜もなく、田舍でよく見かける鐵道草が、驛の柵にそつて繁茂してゐた。そのあたりに遊んでゐるのは、頰が夕燒いろに染つた子供や子守娘の群であつた。私は通りすがりに、子供の頰からふと目を空の彼方にうつして見たが、夕方は雲が多くて、火の山の姿は見えなかつた。

輕便電車は二等も三等もない一臺限りで私は靑色の切符を握つた。上州の溫泉に行くらしい二三人の商人風の客の外、誰も乘つてこなかつた。車內の隅にかけてあるガラス瓶に、もう洞れてしまつた秋の花が活けたままになつてゐた。目の下の原には、限りなく色さまざまの草花が咲いてゐるものを、何か夏が過ぎてしまへば用のない土地柄が、さう云ふ所にまでもうかがはれた。

「見えませんね」

さう云つて商人達が窓から首を出してゐるので、私もつられて眺めてみたが、やつぱり火の山は頂きはもとより、裾のあたりも見せてゐなかつた。さきほどからの、うつすらした悔いの心には、火の山の見えないこと、そんな些細な事すらが、妙に拘泥つてくるのであつた。

昔、あの木曾路の森林を傳ひ、和田峠越えで遙々と佐久の平に出てきた旅人にも、平野の地方から、碓氷を越えて落葉松の中をあるいて來たものにも、この町の灯は心樂しいものであつたと。今、私は中仙道の本通りにあたる町をあるいてゐると、秋

の一夕の景色は、家並も、軒燈も、何やら煤けて思はれた。まるで、淺間三宿と呼ばれた草鞋くさい昔の夕方のなかを、とつとと歩いて行く自分のやうな氣持がした。

老師の家は、町の本通りから少し右にそれた所であつた。私は歩みながら考へた。丁度私が沓掛を引き上げるとき、一停車場の距離にあるこの町に立寄つて、老師や賑やかな家族の人々にお別れを云つて行つたのは、つい二週間ばかり前のことである。それだのに、今頃ひよつこりとお訪ねしたら、どんなに吃驚することだらうと。

町の端れにちかく來ると、何處からか、かすかな谿の流れが聞え始めた。

舊本陣である龜屋と云ふこの町で一番古い宿の前を通るとき、私は一寸奥を覗いてみた。このあたりも夜寒をかこつてか、帳場には、あの愛想のいい主人も、肥つたお主婦さんも坐つてゐなかつた。大時計がちらつと見えただけであつた。

老師も、秋になつて客人が減る頃になると、夕方から、ふらりとこの宿に來て、籐椅子にぽつねんと坐ることがあると聞いてゐたが、もとより、それらしい人影はなかつた。

私が垣根の外から一寸さし覗くと、老師は緣端に坐つて、しきりに、ハンケチで額を拭いてゐた。湯上りらしかつた。もうその前には黒塗の夕べの膳が並べてあつた。

私の顏を見ると、吃驚したと云ふよりは、呆れたやうな顏をしたが、

「信スケ、君は疲れた顏をして、どうしたこつちや」

さう云つて立ち上つた。

「夕飯はまだがか」

さう聞いて、私がすませましたと答へるのを待たず、奥の方に向いて、夫人に聲をかけた。

「爲子！　信スケが來たぞヲ」

奥さんは御勝手で、煮物でもしてゐたらしく、胸からあるやうな大きな前掛をして出てきた。

「どうしたこつちや、信スケさん」

奥さんは仰山らしい表情をして、緣端にぺつたりと坐つてしまつた。

「ねえ、爲子、信スケは疲れた顏をしてゐるだらう」

老師はさう云つて、夫人に私の顏を指し示した。

老師は、例によつて、晩酌を始めてゐるところで、「今、漸く一本傾けたばかりだ」とも云つた。

私は夫人にすすめられて、風呂に浸つた。耳をすませると、湯槽の何處かで蟲が鳴いてゐるらしい、馬追ひだらうか、それとも晝間から、古い壁などにゐて鳴く蟲だらうか、だがしばらくぢつと湯槽に沈んでゐるうちに、どうやら、蟲ではないらしい、長い旅をして來た私の耳のなかが、ぢんぢんと鳴つてゐるらしく思はれた。

單衣(ひとへ)ではもとより寒むかつた、その上に借着の羽織を重ねても、緣端にちかく坐ると、そくそくと迫る秋冷であつた。

老師は、私が酒を飲めないのは知つてゐる筈だのに、その夜は不思議に、「まあ一杯」と云つて幾度も盃をさした。

「山家料理で、何もないぞ、信スケさん」

さう云つて夫人は膳の上のものをすすめたが、かう云ふ不便な山のなかでも、老師の家らしい趣向があり、夫妻の國訛(なまり)の言葉つきと、それは不思議に調和してゐた。

食事の席には、夫人のほかに、つひぞ見かけない若い婦人が一人ゐた。

「叔父さん」さう云つて老師の酌をしたり、時々、輕い戯談口などを利く人であつた。鼻の高い、色のおそろしく白い女(ひと)であつた。

「この人は僕の姪でね、奈良の人ぢや、君は知らないかね」

老師がさう云つて紹介すると、私の初めて見る女(ひと)は少しも臆せず、丁寧に挨拶をした。若い女(ひと)の口をひらくたびに見える眞白な齒は、何か鮮やかな、ひとしほの秋冷を感じさせた。

「信スケさん、ほんとにどうしたこつちや、今頃出てきて、私達も明後日は引き上げやぞ」

さう云つて、夫人は隣室のごつた返した荷造の品を示した。

「お前はなんぢや、餘計なことを聞いて」

叱るやうに老師は夫人に云つたが、酒燒した顏を、ときどき凝(ちつ)と私の方に向けた。

夫人は「ああ、さうか、さうか」と云つたが、こん度は、若い姪の人とひそひそと話を始めた。なんでも、今晩御飯がすんだら、町へ買物に行くらしかつた。町の店に、ジャケツや靴下のいいのが未だ殘つてゐたから、子供達に買つて置かうと夫人は云ひ、

「絹ちやん貴女（あんた）も寒くなるから、一ついいジャケツを買ひなさいな、洋服を着てお洒落をすることつちやぞ、若いものが」

さう云つて、絹子さんと云ふ若い姪の人を笑はせてゐた。

「君は、今度沓掛によるがか」

夫人と絹子さんが席を外すと、老師は突然そんなことを訊ねた。

「沓掛にはよりません。善光寺に行かうと思つてゐます」

老師には、手短ではあつたけれど、一女子に就て夏の頃話したことがあつた。

「善光寺に行く、ああさう」

そしてまた、こんなことを云つて、頭を掻くやうな眞似をした。

「若いものは、いやはや、御苦勞なこつちや」

醉のまはつてゐるとき、老師はあまり人の言葉を耳に入れない様な振りを見せた。しかし、なにか大切なことだけは、醉眼の奥でくわつと見開いたものがあつて、しつかりつかんで置く、さう云つた風な性質であつた。醉餘の機嫌で、何かわからない唄のやうなものを、低い聲で唸つてゐたが、ふと、私の方に向

くと、又こんなことを云つた。

「君は頓馬な男ぢや、いつぞや私が書いて上げた短冊を忘れて行つたらう」

ぷいと立ち上ると、違ひ棚の下から、新聞紙に包んだものを持つてきた。「沓掛は、薬雞頭の盛りやぞ」さう云つて、新聞紙を解きにかかつた。

――くつかけや秋日にのびる馬の顔

知つてゐる。憶えてゐる。私はその短冊を手にすると、忽ち、夏の日の哀れが胸に湧いてきた。「君はくつかけの住人だから」さう云つて老師が筆をとつてくれた。午後の永い日のことどもが……

老師は脇息によつて、楊枝を使ひながら、目を庭の上に轉じてゐた。庭は、老師のこのみで、この西歐風な高原地には、一寸不似合な位、苔のしつとりとついた、さびのある築庭であつた。

「あの苔を見給へ、今年はよくついたぞ」

私の氣のない返事を見てとると、

「どうもはや、信スケなんぞに、苔は見せられんわい」

苦笑をまじへて、大きな吐息をした。

庭の苔の上に、一筋電燈の灯が流れてゐた。老師は、ときどき瞼を閉ぢ、またぱつと見ひらくのであつた。

「くつかけや」そんなことを小聲で口ずさみながら、早寝の老師は立ちあがりかけた。

「信スケ、やすんだらどう、君は疲れた目をして」
そして又こんなことも云つた。
「爲子達が歸つてくると、また何やかやと話が永くなるぞ、早く寢みなさい」
老師は、そのまま隣室に出て行つたが、女中を呼んで、私の寢床のことを命じてゐた。
「信スケ先生は、今夜どこに寢るこつちや、離れには絹子がゐるし、仕方がない、絹子の隣室で寢てもらふのだな、ああ、電燈が一つしきやないのか、ぢやあ、絹子と相談して使ふこつちや」
女中が「さうで御座いますね」と云ふと、老師は、又隣室から首だけ出して、「信スケ、それでいいね」と訊ねた。
私は「何處でも結構ですが、絹子さんに惡くはありませんか」と答へると、「いいも惡いもないぢやないか」さう云つて、それぎり、どうやら寢部屋の方に行つたらしかつた。
「若いものは、いやはや」
老師の獨言が、しばらくして聞えた。それもどうやら、もう寢床の上でらしかつた。

蟲の音が、ひとしきり繁くきこえ始めた。さきほど迄、庭で鳴いてゐたのは、草ひばりの優しい聲であつたが、更けると、蟲聲も少し荒くなつた。町の方から歸つてくる人の足音もしないので、山の蟲は、もう怖れるものがないのであらう。

林間の別莊と、町の通りをつなぐこの小さな道も、夏の頃は、かなり往來が繁かつた。夜は螢のやうな懷中電燈の灯が流れるし、晝間は、西洋の子供を乘せた、自轉車や驢馬が、ひつきりなしに行きすぎて行くのであつた。

或る日、老師をお訪ねすると、樹の下の椅下に坐つてゐて、「君、ここに坐つて見てゐると、一日に何十本と云ふ女の足ばかり眺められるよ」

そんな話をして、「ほら、又通る、あれは老人だな」と早速道の方を指さして云つた。垣根に遮られて、顔は見えないが、まるで小鳥のやうに樂しげに語り合ひながら、すぎて行く洋裝や和服の下半身がちらちらと見えるのであつた。その詩情めいた果敢ない美しさは、それはそのまま、かう云ふ土地の、束の間の夏のあえかさを表はしてゐるやうであつた。

「昨日は、誰それがお歸りになつた」

さう云ふたびに、林の奧で一つづつ燈が消されていつて、今では、もう小徑を通る人もなくなつた。

小半時たつた。賑やかな話聲がしたかと思ふと、漸つと、夫人と絹子さんが歸つてきたのであつた。

「ああ、どつこいしよ、お父さんはもう寢たがか、あんたも、さきに寢めばよかつたのに」

夫人は買物の風呂敷を疊の上に置くと、さも疲れたらしかつた。風呂敷包の隙間から、紅い毛絲がちらつと見えてゐた。

「いいのがありましたか？」

「ああ、あつたぞ、でも絹ちやん、やつぱり縞のある方がよかつたやうな氣もするね」
そんな事を云つて、絹子さんをかへり見た。
「さうね、をばさんも、なかなかハイカラだから、私なんかにはわからないわ」
絹子さんは夫人の傍に坐ると、私の方に向いて馴々しく話しかけた。
「貴方はお一人でいらつしたの、ぢや散歩にお出掛けになればよかつたのに、もつとも、町はとても寂しいですのよ、お店の開いてゐるのも二三軒きり、それに肌寒くて」
夫人は火鉢によつて、一寸鐵瓶に手をふれて見た。
「お湯は沸いてゐるね、今美味しいものを註文んできたから、あんたもお腹がすいてゐるやろ」
私は夫人と絹子さんの話を、しばらく所在なげに聞いてゐた。
お蕎麥が屆いて、目の前に出されたときも、平常のやうにすぐ手を觸れなかつた。
「信スケさん、何を考へとるこつちや、早くお上り」
私は夫人に催促されて、初めて取り上げた。
「しやうもないか」
「いや、お美味しいです」
私は喰べながら、いつになく蕎麥を疊の上にこぼした。
夫人と絹子さんは一寸顔を見合した。夫人は半ば戲談のやうに私をたしなめて、

「信スケさん、どうしたこつちや、あんたも物を喰べるのに新聞を敷かねばならぬ方ね」

私は、不器用な手つきを眺めてゐられると思ふと、尙うまく口に運ぶことが出來なかつた。

「信スケさん、もう寢みなさい、話は又ゆつくり、明日にでも聞くまいか」

夫人は慰めるやうに云つて、立ち上つた。

離れで寢む事になつた。灰吹きと水の這入つた器を手にして、庭の苔を踏まぬ樣にと靜かに步いたが、蟲聲は忽ちやまつた。

離れは、山家風の作りであつた。背後に、その屋根を覆ふばかりの栗の大木が立つてゐた。部屋は二間で、奥の一間にはこれも山家らしい大きな爐が切つてあつた。明り取りの窓は部屋毎についてゐた。晝間は閉めきつてあるらしく、中に這入ると壁に張りつめた杉の樹皮が強く匂うた。

電燈は先生の云はれたやうに、奥の一間にしかなかつた。絹子と云ふ女は、少し遲れて、やはり下駄音に注意しながら、こつそりと離れにやつて來た。入口の硝子戸をあけた絹子さんの背後には、楓の葉が靑く波うつやうに戰いでゐた。

「あたくしは、奥でやすませて頂きますわ」

さう云つて、一寸挨拶をすると、奥の間に過ぎて行つた。セルの寢卷に羽織を重ね足袋もきちんと穿いてゐた。それは何故

か、食事のときや、火鉢の傍で見た母屋の絹子さんとは、まるで別の人のやうな氣持がした。襖を閉めかけて、ふと氣が附いたやうに、

「あら、電燈がそちらに御座いませんのね、襖を閉めてしまつたら、貴方の方は眞暗、電燈を獨占しちあいけませんわね」

一寸女學生のやうな言葉つきであつた。

「どうしようかしら」

首をかしげて、考へこんでゐた。年は二十四五位だらう、一寸姉さん振る女で、そのくせ、初の印象よりは、ずつと若々しい樣子であつた。

「敷居のところ迄引張つてきて吊したらどうです。兩方の部屋が明るくなるでせう」

「ああ、さうね、眞中に吊せばね」

さう云つたが、一寸口籠つて、

「それぢや、襖は開けとくの」

絹子さんは、顏を少しあからめた。私も、ああさうか、下手なことを云つたと氣が付いた。

「この頃は、晩くなつて月が出るから、さうすりや隨分明るいんだけれど」

絹子さんは、半ば照隱しのやうに獨言を云ひながら、しばらく立つたまま考へてゐたが、

「ああ、かうしませう」

突然、快活に云つて、押入をあけて、大きな風呂敷を出して

きた。

「どうするのですか」

「すみません、それぢや、電燈を一寸引張つて下さらない」

私は不精さうに立つて行つて、電燈をどうやらかうやら、敷居の所まで引張つてきた。

絹子さんは「有難う」と云つて、その大風呂敷を電燈の背後からかぶせた。私の部屋の方には、明りがさつと流れ出たが、今度は奥の間が暗くなつた。

「それでは、貴女の方が暗くなるでせう」

私が訊ねると、

「あたくしはいいのよ、すぐ寝つかれますわ」

さう云つて、又さつきの快活な調子で、

「夜更けに、月が登ると、この部屋はそりや明るいのよ」

絹子さんは電燈の笠の蔭で羽織を脱いで疊み始めた。

「なかなかロマンチックでせう」

絹子さんは顔を一寸上げた。

「僕の部屋は、蟲聲がきこえて風流です」

私はそれきり床に就いた。絹子さんも寝仕度が終つたらしかつた。

しばらくして、床に就いた筈の絹子さんの聲が又聞えた。しかし微かな聲ではあつた。

「あら、蜘蛛がゐる」

私はふと自分の部屋の壁を見廻してみた。そこにも、一二疋ば

かりの蜘蛛を見出した。山家には附き物の、あの足の長い蜘蛛である。

「氣味が惡い」

絹子さんは、どうやら手でそれを追つてゐるらしかつた。私は一寸聲を掛けようとしたが、隣室の婦人がもう床に這入つてゐることを考へると、なんだかそれも出來なかつた。

私は靜かに頭を枕につけた。「おやすみなさい」私はせめて、それだけは云はなければと考へたが、もう隣室の暗闇で寢てゐる女は今しがた會話をした婦人のやうには思はれなかつた。私はしばらくの間、妙に氣詰りな思ひがした。重くるしい氣持がした。まるで、あの足の長い蜘蛛が蒲團の上を匍つてゐて、少しでも身體を動かしたりすると、顏に飛びかかつてくるやうな、云つて見ればそんな氣持であつた。

私は、なるべく音をたてないやうに、身を起すと、蒲團の上に腹匍ひになつた。枕もとのコップの水には、いつのまにか黃色な蛾が浮いてゐた。私は水を飮むことを斷念して、煙草のマッチを手さぐつた。火をつけると、隣室で、寢返りをする微かな音がきこえた。私は立て續けに煙草を喫つた。冴えてゐる頭の中が少しぼんやりするやうな氣持もしたが、それは束の間で、しんしんと頭の痛むやうな冴えが再び襲つてくる。その頭の冴えは、なんだか蒲團の下に縮こめてゐる足さきの冷たさと、關聯があるやうに、頭の痛みと足の冷たさが、あたかも同じ一箇處のそれのやうに思はれてくるのであつた。

蟲の音が、また繁くきこえ始めた。

私は、いつぞや、さる夫人からこんな話を聞いたことがある。その夫人は不幸な幼年時代を送つたとかで、いつも寢む時刻にその母が傍にゐてくれなかつた。子供の誰もが記憶してゐる母の子守唄を絶えてきく事が出來なかつた。それで、その夫人は、小さなオルゴオルの箱を買つてもらつて、毎晩寢むときに、その歌の箱を枕にしたさうである。

私は、まるで蟲聲が一杯詰つてゐるやうな枕に頭を置くと、不思議にそのオルゴオルや夫人の幼時が思ひ出されるのであつた。しかし私の蟲聲の枕は、オルゴオルのやうに、甘美には響いてこなかつた。

やすまれない、どうやら睡眠が私には來さうにない。眠られないと、益々隣室の暗が氣にかかつてくる。

暗闇の部屋のなかで、あの絹子さんと云ふ人は、まだ大きく目を開いてゐるのではなからうか、そして、凝と私の動作に聞き耳をたててゐるのでなからうか、いやひよつとすると、私の心のなかまでも、私が何を考へてゐるかも、みんな透視するやうに知つてゐるのではなからうか、若い女の人と云ふものは、想像以上に敏感なものださうだ。こんな秋深くなつた高原に、風來坊のやうにひよつくりやつて來た私を、あの女の若い感性は、ちやんと知つてゐるのに違ひない。

すると、隣室で又寢苦しい時にするやうな吐息がきこえた。やはり起きてゐるらしい、きつと若い人には、女にしろ、男にしろ、案外安らかな睡眠と云ふものがこないのではなからうか、私の頭は變に冴えてくるのを覺えた。

隣の間で靜かに瞼をとぢようとしてゐるのは、たしかに笑ふと白い齒の見える、何處か快活なところのあるあの絹子さんに違ひない。それだのに、私には、それがまるで違つた若い女の人のやうにも思はれてくる。誰だらう、すると、二等車の窓との白い顏が浮んでくる、口元を堅く閉ぢ、まるで觀念したやうに、そつとくくり枕に頭を載せるお嫁さんの姿が映つてくる。一緒に高原停車場をすぎて行つた「菊ちやん」と云ふお嫁さんお嫁さんの堅く閉ぢた口元が心持動いた、何か云つたやうだ、こんどは、それは「菊ちやん」と呼ぶお嫁さんでもなかつた。睫の長い、憂ひげな一女子の顏であつた……

ふと目を轉じると、例の敷居の、電燈の吊した下に、羽織の端が見える、さきほど、絹子さんが脫いで疊んだものらしい、私はもう一度、あの羽織の模樣と、隣室の若い女のひとを結びつけて考へようと努めた。と、突然、何處かで少し重たい咳拂ひがきこえた。もとよりそれは隣室からではない、もつと遠くの方から、どうやら母屋らしいと思はれる。老師の咳拂ひかしら、老師はよく夜中に、起き出して酒を飮む癖がある。「先生はまだ起きていらつしやるのかしら」さう思ふと、二三度續けて、籠つたやうな咳拂ひが聞えた。「やつぱり先生だ」私は老

師が又一升瓶をこつそり寢床にもつてきて、靜かに冷やをやつてゐる姿を想像してみた。

今度こそは大丈夫、眠むれさうだと、私は瞼を閉ぢた。すると確かに庭をあるいてくる人がある。離れは硝子戸だけで、雨戸はない。足音はその二三歩手前で、ぴたと止んだ。

「信スケ、信スケ、起きとるがか」

私は一寸吃驚したが、すぐ聲の人に氣が付いた。蒲團の上に起き直ると、靜かに入口へ行つて硝子戸を開けた。外は割合にあかるかつた。楓の葉の戰ぎの傍に、片手に莨を持つた、寢卷姿の老師が立つてゐた。

「先生でしたか」

「なんぢや、大きな聲を出して」

察した通り、老師は酒を飲んだ後らしい顏であつた。「隨分、煙つてゐるね」さう云つて、莨の煙のたてこめた私の部屋を一寸覗いた。

「眠りにくければ、これを飲んだらどう、一寸掌を出し給へ」

私が右手を出すと、老師は袂をさぐつて、掌の上に白い丸藥を三粒ばかり落した。

「これで大丈夫か、君は平常飲まないだらう」

私は老師を打ち眺めた。瞳がまことに優しかつた。

「有難う、先生もおやすみにくいのですか」

「いや、僕はそんなことはない」

私が何か物云ひたげであるのを見てとると、

「さあ、君もねたまへ、夜中に話をすると、感傷的になつていかん」

老師はさう云ふと、再び庭の暗闇をあるいて行つた。

藥の效用でしばらくやすんだ。その次に目が覺めたとき、消して寢たつもりの敷居の電燈がまた點つてゐた。人の氣配がした。入口の硝子戸とは反對の側にある、御不淨に行く戸があいてゐた。ふと見ると、御不淨から出てきたらしく、裏側で手を洗つてゐる人影は絹子さんであつた。手洗ひの上は高い崖になつてゐた。その崖にさつと電燈の光りが射して、靑い雑草の葉のいろが鮮やかに見えた。絹子さんは手洗が終つてからも、しばらく崖の方を向ふむきになつて眺めてゐたが、戸を閉めるときに、「よく鳴いてゐること」と獨言を云つた。

隣室に行かうとして、ふと目覺めてゐた私と顏が會ふと、一寸照臭さうな顏付で、周章て胸もとを掻き合せた。

「起きていらしつたの」

聲は不思議に落着いてゐた。

「いや今目が覺めたのです」

「すみませんでしたわね、そをつと戸を開けたのですが」

「いや、そのためでもないのですが、きつと眠り藥がきれたのでせう」

すると、絹子さんは、ああさうかと云つた顏をした。

「やつぱり、叔父樣がさつきいらしつたのね、私なんだか夢のやうに聞いてゐたけど」

立つたまま話してゐることに氣付いた絹子さんは、一寸中腰になりかけて、

「何時でせう」と腕時計を眺めた。

「お月樣は出ましたか」

「ええ、さつき私が起きて來たとき、とても外が明るかつたのよ、今はどうか知ら」

絹子さんは、時計から目をはづすと、

「あらもう三時よ、まごまごしてゐると、朝の早い叔父さまなんかが、起きていらつしやるわ」

「もうそんな時間ですか」

「まあ、あたくしこんな恰好で、ぢやおやすみ遊ばせ」

絹子さんはそんなことを云ふと、立ちあがつて隣室に行つた。電燈を消してくれたのも絹子さんであつた。

「おやすみなさい」

今度は、私もまるで自然なやうに、さう答へることが出來た。

老師の聲は、朝早い庭できこえた。

昨夜の飲みさしたコップも、死んでゐる蛾も、そのまま枕もとにあつた。私は寢たりないやうな氣持で、ぼんやり蒲團の上に起き直つた。隣室はと見ると、もう敷居の眞中に吊された電燈も、もとの位置になほつてゐて、絹子さんの蒲團は片隅に綺麗に疊んで積み重ねてあつた。奥の間の障子は開け放たれて、

手洗ひの向ふに、手を後で組んだ老師の姿も見えた。
朝の庭は、垣根の外に、小路をへだてて巨きな木が立ち竝んでゐるせゐか、まだ容易に朝陽が射してこなかつた。しかし楓の葉の隙間から見える山の秋空は、心地のよい落着いた色をしてゐた。庭一面の楓の色も、昨夜のままの靜かさであつた。
「お父さん、植木屋の粂さんは今日來るか」
夫人の聲が母屋の方できこえた。緣側の方に歩きながら、何か答へてゐる老師の聲もした。それらがまるで木洩れ日やうに、或ひは遠い記憶のなかの言葉のやうに、私の耳に響いてゐるのであつた。
「ここの葱を喰べまし、東京ではこんな味噌汁は喰べられんぞ」
夫人は食卓の膳に向ふと、私にさう云つてすすめた。
「今やつと目が覺めたやうな氣持がします」
私がさう語ると、老師は傍の絹子さんと顏を見合せて笑つた。
絹子さんは洋裝をしてゐた、その上に、多分昨夜町で買つてきたものと思はれる、グリーンのスウエターを着てゐた。うつすら化粧したらしい面持には、別に寢不足らしい暗い影はなかつた。
「どうや、信スケ、あれで眠られたか」
さう云つて、老師が訊ねると、絹子さんは橫合から、
「あら、叔父樣、さうぢやなくつてよ、私は叔父さまが、あんまり咳拂ひをなさるからそれが氣になつて、とても寢苦しかつたわよ」
さう云つて、私にも同意を求めるやうな振をした。老師は苦

笑してゐたが、絹子さんが一寸席をたつた隙に、
「君はゆうべ、隨分煙草を喫んだらしいね、煙がみんなあの娘の部屋に舞ひこむので、絹子は眠られなかつたと」
さう云つて、また老師は一寸感嘆するやうに、
「絹子はかしこい娘や」と云つた。
私はこの「絹子は賢い娘や」と云ふ言葉が不思議に胸にこたへた。何故かそれは、平衡を失つてゐる自分と對比して云はれた言葉のやうに思はれてならなかつた。
夫人は食事の片づけをすますと、もう引上げの仕度にいそがしかつた。一夏ぢう使つた食器類を丁寧に新聞紙にくるむのであつた。
「信スケさん、來年はもうお勤めね、それでも一寸は遊びにお出でよ」
「さあ、何處にお勤めになるか知れないし」
「もつとも、來年くるときは、信スケさんもお嫁さんと一緒でないがか、いいお嫁さんを貰はないと駄目よ」
絹子さんは夫人の方を見て微笑むでゐた。
「絹ちやんも、來年はお嫁さんぢやないか」
老師がまぜかへす樣に口を出すと、
「ほんとに」
夫人は眞顏になつて答へた。

「ああ、すみません、汚ないのですから、そのままにして置いて下さればよかつたのに」
私は玄關の所で、私の靴を磨いてゐる絹子さんを見付けると、慌ててさう云つた。
「いいのよ、一寸磨いて上げただけ、靴墨がないものだから、綺麗にはならないけれど」
顔をあげた絹子さんの額のあたりに、秋らしい陽があたつてゐた。そして絹子さんの頭の上にかかつてゐる鳥籠のなかも、同じやうな光りが漂つてゐた。

老師は「わしもそこまで散歩する」と云つて、私と連れだつて出た。
畑中の道は町に出るためには、少し上りつめて、又くだる小さな坂になつてゐた。その坂の頂きに、信濃の古い俳人の碑が建つてゐた。
「善光寺の女、その女はたつしやでゐるのかね」
少しうつむきかげんに背中を圓くして歩く老師は、杖をひきながら、初めてそんなことを訊ねた。
「はあ、夏から一度も逢ひませんが」
「ああ、さう」
老師は、それきり又默つて、歩きつづけた。
「今度も家を嘘をついて出てきたのですが、私もなんだか、不

行跡を重ねるやうで」
私は知らずしらず、昨夜から押へてゐたことを、一度に吐き出すやうにしやべり始めた。老師は、別にそれには答へなかつた。
「身分が違ふ、そんなことをその女は思つてゐるのかね」
「それよりも、あんまり運命と云ふやうなものに從順で、自分の悲運を信じ切つてゐるやうな……」
老師は例の大跨であるいて行くので、私は動もすれば遅れ勝ちになつた。
「爲子もそんなことを云つてゐた、心配なこつちやと、だけど所詮は人生のことだから」
私は老師らしい「人生のことだから」と云ふ言葉をきくと、それが、妙に自分の今の氣持にぴつたりくるやうに思はれた。
「信スケ、今年の秋は、幾度もいくども碓氷を越えるこつちやろなあ」
老師は洋杖を振つて、いつのまにか、句碑のある小高い所まで來てゐた。
「淺間が今朝はよく見えるぞ」
洋杖で指しながら、さう云ふのをきくと、私はなんだかいそいそして老師に追ひすがつた。雲の少ない桔梗色の空に、山の輪廓は誠に鮮やかであつた。
老師は昨夜のやうなことを、また訊ねた。
「信スケ、沓掛には寄らずに行くがか」

荒地野菊

一

亡くなつた萩原朔太郎先生には、お化趣味があつたかどうか私はよく知らない。只晩年ラフカディオ・ヘルンを愛讀していらしつた所をみると、まんざらその趣味にも無縁だつたとは云へまい。

萩原さんが或る晩、私にかう謂ふ事を云はれた。「津村君、どうも君の描く女の人は、みんなろくろ首のやうだね、行ひ澄ましたやうな綺麗な顔をしてゐて、夜になると、首がのびて、油をなめる」

先生はその後で、例の極めて愉快な時に限つて發せられる、クククと云ふ笑ひ方をされた。

私はその頃も、今も、たいして散文らしい散文を書いてゐなかつた。然し、散文で表現したいと思ふやうな素材には、時折ぶつかつた。文章を書けば、その中には女人も出てくる。しかるに、その女の人が、先生の云はれるやうに悉く、ろくろ首では、どうも始末が悪い。

私はよくそんな事を考へた。

尋常の女の人が描きたい、尋常の女の人とは、それでは、どう云ふものだらう？　すると、極めて滑稽な妄想が湧いてき

た。

私の妄想の結論を話せば、なる程、世の中には尋常の女が一杯だ。しかし尋常の女だと思つてゐて、案外さうでない場合もある。

女の人には、無意識の部分が非常に多い。まづその行爲を見てもわかる。それから物の云ひ方でもさうである。自分の考へと全く逆の事を云ふ、それも意識しての場合もあるが又さうでない場合だつてある。

小宮豐隆さんは、漱石の小説「三四郎」の女主人公を無意識的偽善(アンコンシャス・ヒポクリシイ)だと解說してゐられた。アンコンシャス・ヒポクリシイと云ふものは、讀んでみても、中々解釋がむづかしい。然し、女主人公美禰子の言動をよんで見ると、朧ろに了解される。

ここまでくると、私の妄想が少し飛躍する。と云ふのは、この女の無意識的部分、これはひよつとすると「ろくろ首」ではないか。首がのびて、行燈の油はなめなくとも、無意識の行爲は、色々に働く。

私の妄想の結末は、ざつとこんな所で停止した。

そこで、私は甚だ危ふげな安心を得た。

何か物語めいたものが書いてみたい。そんな技癢を感ずるまに、私は思ひ切つて筆をとつた。只心の中でこのやうに念じた。いづれは、この物語の斷片の中にも、女の人が出てくるであらう。さうして、それが、願はくば、尋常の女であつて欲しいと。

私は數年前の或る夏を信州追分宿で暮した。鐵道開通以來、荒廢した中仙道の驛路はそれでも夏の間だけは、かなり賑はつた。

私の借りた家は「裾山山莊」と云つた。もつとも「裾山山莊」は私一人の獨占ではなく、私がついた時には——まだ夏の初めであつたが、すでに先客が二組ばかりあつた。その內の一組は二階を占領し、他の一組は——と云つてもこの方は男一人であつたらしいが、離れの一室に陣取つてゐた。

私は奥庭に面した二間を借りた。

厨は一つしかない。私は食事の方は、只一軒しかない舊脇本陣の宿に行つて食ふ事にきめてゐた。從つて厨は無關心でもゐられたのだが、夕方、何氣なく、其處を覗いてみた。

暗い五燭ばかりの電燈が、だたつ廣い厨の眞中に吊してある。

ひよいと隅の方を見ると、急ごしらへの米びつがある。籠が置いてある。その中には、にんじんと南瓜が這入つてゐる。なほよく見ると、籠の傍には、ひつそりと玉葱がおいてある。

私は「自炊をしてゐるのだな」と思つた。すると、こんどは、開けたまゝになつてゐる厨の入口の方から、しきりに、煙が舞ひこみ始めた。どうやら、外には人がゐるらしい。さうして、その人間は火を燃やしてゐるらしいのである。

人の食事支度を覗くのは、失禮にきまつてゐる。まして、炊事をするのはまづ女の人でなければならぬ。私はさう考へた。

然し、私には、又別の氣持があつた。それは、一夏を一緒の屋根の下で暮す人々の事である、兎も角、一應顔を見知つて置かぬと、何かと不都合である。

私は思ひ切つて、入口の處まで出て見た。外はもう仄暗い。夕顔の花の傍には、七輪が置いてある。火は熾んにおきてゐる。然し私が先づ觸目したのは、美しい夕方の火の色でも、白い夕顔の花でもない。その七輪の前にゐた男であつた。

男は荒い縞の浴衣を着てゐる。しやがんでゐるが、明らかに尻端折だ。ネズミ色の猿股の後をみせてゐる。打ち見たところでは、年は不惑をすぎた甚だ肥滿した人物だ。

その人物は、手に破れ團扇を持ち、盛んに七輪を煽つてゐた樣子だが、私の靜かな足音にも意外に素早く、背後を振りかへつた。

目が合ふと、その人は、私の想像と略々一致した。只思ひがけなかつたのは、その不惑を過ぎた人物の口のあたりから頤にかけて、たいへん見事ないかめしい髭があつた事と、はだけた胸のあたりによく見える、物凄いやうな胸毛ともう一つは、それらに逆比例して、極めて優しい眸の色であつた。

然し、その眸の色も、私を豫期しての物ではなかつたらしく、次の瞬間、急に變つた。たいへん不愉快さうな表情になつたのである。「俗物奴」とでも云ひたいやうだつた。つまり彼は尻端折で、七輪を煽いでゐても、頭の中では、何か高踏的な思索をしてゐたらしいのであつた。その思索の最中に、へんな男が首

を出した。それが癪に障つたらしい。
私は挨拶をしようと思つてゐた。しかし、相手の出様がそのやうでは、私も亦穩やかではなくなつた。私はぷいと眸をそらして、あらぬ方を眺めた。さうして、用もないのに、その入口にあつた下駄――恐らくその男の仲間であつたかも知れないが――を穿くと、さつさと、家の裏手の方に廻つて行つた。
私の出て來た處は、中庭の處で、苔むして小さな一寸不氣味な恰好をした石燈籠があつたが、隅の方は、全く手入れが行き屆いて居らず、雜草の生ひ茂るまゝになつてゐた。さうして、其處からは、私の部屋も、離れの方もよく見えた。離れの方には、もう燈がともつてゐた。人はゐない。然し、籐の椅子なども置いてあり、座敷の眞中に、晝寢の跡らしく、座蒲團が二つ折にしてあつたが、一體に小綺麗に整頓されてあつた。
「今の胸毛の親爺の部屋にしては、少し綺麗すぎるぞ」
私はそんな事を思つた。すると、庭からはなんの垣根もないので、一眺の中に見渡される、廣々とした畑の彼方で、電燈を一列に連ねた、夕べの汽車が、すうーと通りすぎてゆくのが見えて來た。

小半時して、私は又さき程の厨の入口に戻つてきた。
七輪はそのまゝになつてゐた。火はもう消えてゐた。さうして、私は其處に、思ひがけなく二つの人影を見た。一人はたし

かに胸毛の親爺である。然し、今一人の方は――その一つの人影も、まるで胸毛の先生の影法師かなんぞのやうに、その背たけと云ひ、その肥滿した體軀と云ひ、浴衣に尻端折の姿と云ひ、すべてが全く同形の人であつた。只胸毛の方は、さき程のまゝの破れ團扇を手にしてゐるのに、こんどの人影は、どうやら、たつた今、畑から引き千切つてきたばかりらしく胡瓜と茄子を兩手に抱くやうにして、持ち上げてゐた。

二

「裾山山荘」には、玄關の板敷の隣に三疊の小さな間があつた。

　この部屋だけは、私のでも、他の客のものでもなかつた。無所屬であり、云つて見れば各自の共有物になつてゐた。

　その晩方、舊脇本陣で食事をすませて、ぶら〳〵と戻つて來た私は、はからずもこの三疊の間で催ほされてゐた、奇妙な晩餐の光景を、見るとはなしに見てしまつた。

　茶卓の周りには、三人の人物が坐つてゐる、一人は例の胸毛の先生である。この人を眞中にして、右方の方には――後で思ひ出したが、この人物がさき程見た野菜を手に一杯持つた男であつた、肥滿して、顏の眞赤な、まるで、酒呑童子のやうな人物が、杯を手にし坐つてゐる、左方には、今一人の、やはり小肥りした男がゐる。

茶卓の上はと云へば、鍋もある。湯呑もある。しかし何よりも目についたのは、洋皿に盛つた大きなまゝのお頭つきの魚である。

魚は私の判斷によると、鯉であるらしい、その鯉を、酒呑童子や胸毛の先生が、左右から突ついてゐる。如何にも愉快らしく、一二と云ふと、皆から／＼と笑つてゐる。

私は思はず立ちどまつた。然し、この室内の空氣は、もう外界とは凡そ隔絶してゐるらしい。かりに、私が聲をかけても、或は窓から覗きこんでも、恐らく氣がつかずにゐただらう、そんな風に思はれた。

三疊の間の晩餐は、その後も、夕べゆふべに繰り返されてゐた、そして、通りがかるたびに、私は無關心ではゐられなかつた。

然し、茶卓の上は、最初の晩のやうに賑やかではなかつた。多分あんな大きな鯉が出たのは破格であつたのだらう。二度とは表はれなかつた。それに反し、例のから／＼と云ふ笑ひ、そしてあの奇妙な空氣は、ずつと變りなかつた。

この何者かわからない壯漢風の男達、私はそれらに對し、少しづつ興味を持ち始めてゐた。そして、家の中では、ほとんど顏を合せなかつた。只私の知り得た事は、離れにゐるのは例の酒呑童子であること、そして、二階にゐるのは、眼鏡をかけた

小肥りの男である事只それだけであつた。それにしても、私が見かけた最初の人物――あの胸毛の先生は、何處にゐることやら、食事の前になると飄然と厨に姿を現はし、例の澁團扇で七輪を煽つてゐるらしかつた。

道でゆき會つた事は二三度あつた。街道が二つ分れる馬頭觀音のあるあたりで、ひよいと三人連れが向ふからやつてくる。然しそんな時でも、至極他人には無關心であつた。決して私の方をじろ〳〵眺めたりはしなかつた。

一體何がきつかけになつたものか、その大切な所を私は不思議に記憶してゐない。然し私がこの三人の仲間と初めて口をきいたのは、確かに路上であつた。そして、三人のうちでも、小肥りの眼鏡をかけた人が、思ひがけなく、氣輕に話しかけたのだ。

胸毛と酒呑童子は、相變らずの態度で、まるで言葉が通じ合はない人間同志のやうに、默つて側に立つてゐた。

それから二三日たつた。

朝から小止みなく、高原獨特の霧雨が降つてゐた。肌寒むかつた。私は庭に面した緣側に座蒲團を敷いて、荒廢した苔の庭を眺めてゐた。

すると、後からひよいと聲をかける者がある。どうやら緣側づたひにやつてきたらしい。

「よく降りますねえ、どうです、お仕事のあき間でしたら、私共へお出かけになりませんか」

さう云つて、立つてゐたのは眼鏡の人だつた。私は氣持が鬱屈してゐた、そこで聲をかけられると、持ち前の人なつつこさが、すぐ頭をもたげた。

私は導かれるまゝに、初めて、離れの、酒呑童子の部屋に這入つたのであつた。人物は例の通りである。二人とも、あぐらをかいてその前には、茶碗が散亂し、竹の皮に包まれた、赤洋かんが置いてあつた。

ひよいと私を見上げた、胸毛先生は、突然大きな、びつくりする程の聲を發した。

「やあ來た、來た、待望の人物が來た」

胸毛はさう叫びながら、浴衣の上から、まるで腹鼓みを打つやうな恰好をした。そして如何にも愉快さうである、その眸も、私が最初に云つた、極めて優しい色をしてゐた。

ものの三十分程も話してゐるうち私共はもう舊知のやうな親しみを感じてゐた。なんでも、胸毛は、ドイツ語の先生だと云つた。傍から、眼鏡が「この人はね、ホフマン、御存知でせう、あのホフマンの研究家ですよ」と說明してくれた。胸毛は、さう云はれると「いやあ、どうも」と云つて、頭をつるりと撫でた。話の工合で、他の二人も、學校の先生である事、それはすぐ了解された。

私は誰よりもこの胸毛の人が好きになれさうに思へた。そこで、私が這入つてきた時、どうして「待望の人物だ」なんて大きな聲を發したのか、その理由を訊いてみた。胸毛は、もう一

度「いやあ、どうも」と云つてから、至極簡明に、こんな返事をした。
「おんたは感心に肥つてゐる、肥つてゐる人間はお芽出たい、いい眺めだ、それで僕は歡迎した」
胸毛の先生は、裾山山莊の庭つゞきの、隣家に住んでゐた。
先生は一人ではない。他に少年が一人ゐた。先生がその少年を私に紹介してくれたとき、
「今に、家内もきますよ、知合の娘つ子もくるかも知れない。然し長男は海軍兵學校を受けるので、一足さきに私と來た」
そんな事を、明けすけに話してくれた。
私は退屈すると、庭づたひに、よくこの隣家を訪れた。
胸毛の先生の住居は、雨漏りでもしないかと思はれる位、たいへん荒れた家であつた。私がそれを云ふと、先生は如何にも、吾が意を得たりと云ふやうな顔をした。
「あんたも、さう思ふかね、それは結構、大體、この家はもう幾年も空家だつたのだ。住み手がない、それをきいて、實のところ、吾が輩觸手が動いた」
「それぢや、化け物屋敷？」
私がきゝ返すと、先生の顔には又笑ひが浮んだ。
「それそれ、君、それですよ」
先生は一膝のり出した。そして、こんどは極めて低い聲で囁

いた。

「夜の庭は實に荒涼としてゐてね、さやう、十二時すぎて、雨戸をあけたまゝ、机に向つてゐると、いやどうして君、只の家の感じぢやないね」

しかし、先生は如何にも愉快さうである。さうして、ドイツ語などは稀にしか口にしないんだが、ホフマンの話などをしてくれた。

「あの仁は、例のやうな物語を書くときは、夜などは、必ず、細君を起して置いたと云ふぢやないかね、つまり、自分の空想力におびやかされるのだね、こはいのは自分なんだから、自分の心の中にある物なんだからねえ」

そんな話になると、中々盡きなかつた。

私がこの胸毛の先生と、一見甚だ無口で、取りつき端のないやうなぶつきら棒の人と、どうして、こんなに容易に親しくなれたか。

然し、それはこの先生の性質を知るに至れば、一向に不思議でもなんでもなかつた。

先生は、ひどく人見知りする、まるで小兒のやうである。しかし一體に人見知りする程の人間は、甚だ寂しがりやなのである。寂しがりやが昂じると、得てして、人に會つた場合に態度が不自然になる、つまり感情が激しすぎるのである。先生の場

合は、正にこれが當てはまる。

先生だけではない。今一人の酒呑童子も、同じ種類の人物である。酒呑童子は名前通りに、極めて酒が好きである。酒ほがひが始まると、のこ〳〵脇本陣に出かけてゆき、其處の大きな火鉢の傍に陣取つて、二日でも三日でも飲んでゐる。しかもこれは一人ぽつちの酒ほがひであつた。云つて見れば、同じ人見知りでも、胸毛の先生は陽性であり、酒呑童子は陰性であつた。

私は時折、三疊の間の晩餐にも加はつた。晩餐の菜には、よく茄子の煮付けが出た。胸毛の先生に云はせると、世にこれ位美味いものはないさうである。私が鯉の話をすると、

「いやあ、あの晩は僕の御誕生祝ひだつたのだ、鯉はさう度々は出ませんぞ」

さう云つて、から〳〵と笑つた。

晩餐に加はる回數がふえてくると、もう私は、お客様ではゐられなかつた。或る日、胸毛の先生に、厨に出張するやうに命ぜられた。

「あんたのやうに、懐手(ふところで)では埒があかない、さつさと、尻を端折りたまへ、さうして、井戸から水搬びをするのです」

私は、否應(いや)なしに、この人々と同じ尻端折の恰好をさせられた。

料理をし、味を見るのは、酒呑童子一人に限られてゐた。酒呑童子の味覺は天才的だと云ふ事であつた。胸毛も、眼鏡の人

物も、それに、一枚加はつた私も、單なる雜役夫にすぎなかつた。
「俺にも天才はある、飯炊きだけは、俺に限る」これが唯一の胸毛の自慢であつた。
炊事の最中は、あまり誰も口をきかなかつた。たまに話し出すのは、眼鏡の人物で、それに對して、應答するのは、きまつて胸毛の先生だけだつた。酒呑童子は、晩餐の席でも無口の方だが、料理の最中ときたら、絕對にと云つてもいい位、物を喋らない。顏を眞赤に充血させて、時折習慣的に、髮の毛をかき上げるだけである。
時折、妻君の噂が出た。ところで面白いことには、この三人は揃ひもそろつて、最初の妻君で失敗つてゐる、もつとも胸毛の場合は病死であつたが。
「先生方も、奧さんがこちらに見えられたら、少し樂が出來ますねえ」
私はそんな事を訊いてみた。
すると、眼鏡は「とんでもない事です、妻君は休養が必要です、一層いそがしくなる位ですよ」と口をとがらして云つた。そして胸毛の先生も、相槌を打つやうに、「さうなればあんた、尻に帆をかけて、駈けずり廻るさ」と語つた。
或る時、お釜の飯をうつし代へてゐた、胸毛の先生は、のび上るやうにして、窓の外を眺めた。そして、大變ほのぼのとしした表情をして、「いよーう、美人、今日は魚を燒いてゐるらしい

な」と云つた。
　私は何を云ひ出したのかと思つた。ところで、胸毛の先生の云ふ美人とは、裾山山莊とは畑一つ距てた、農家の二階にゐる若い女の事であつた。成る程、窓から覗いてみると若い娘は、二階の窓のところで、七輪に何かかけてゐる。袖無しの青いジャケツなどを着てゐる。
「あゝ、あの女の人ですか」
　私がうつかり、さう云ふと、
「あんた、もう知つとつたかね、紹介しようと思つてゐたのに」
　胸毛は眼を圓くして云つた。そして「うーん」と溜息をついた。
　鍋の中に鼻を押しつけるやうにして、香氣を嗅いでゐた酒呑童子は、こはい顔をして、じろりと私達を見た。そのまゝ、厨の中は又靜かになつた。五燭のほの暗い電燈の下の、この一瞬の奇妙な光景は、私に、何と云ふ事はなしに、「寒山拾得」の圖を思ひ起させた。

三

　路上に立つと、目のすぐ前に、八ケ岳の姿がたいへん鮮やかに見える朝があつた。風はもう充分冷たかつた。荷車曳きの林檎賣りが、通りかゝる。私はよくそれを呼びとめて、あの青い

林檎をもとめた。「篠ノ井の林檎です」そんな言葉をきくと、私は譯もなく懷しかつた。奥信濃の林檎山が、よく眉間に浮かんできたりした。

八月の半ばになると、人の出入りが急に盛んになつた。

胸毛先生の所でも、奥さんが見えた。小さな子供達も來た。そして、時にはリュックサックを背負つた、活々した娘さんなども、その家の客になつた。

「いやあ、どうも失敬、實はねえ、今日は昔の教へ兒、娘つ子がくるんですよ」

そんな事を云ふ時は、尻端折の先生は、全く尻に帆をかけかねない勢ひだつた。

眼鏡の先生が、若い背の高い奥さんと、睦まじさうに散歩に出かける光景なども、よく見かけられた。

只、酒呑童子の所には、いつまでたつても訪ふ人とてはなかつた。以前と同じやうに、廚の中で、顔を眞赤に充血させて、料理などをしてゐたが、この人だつて、寂寥を感じない譯ではないらしかつた。夜ふけて、外に出かけてゆく酒呑童子を見かけたので、私の方から聲をかけると、

「今夜は、十時からラジオの放送で、飛騨山中の狼の聲がきかれると云ふ、どうです、君も本陣にゆきませんか」

そんな事を云つて、私を誘つたがラジオの方は、どうでもよいらしく、そんな夜から、又連續の酒ほがひが始まるらしかつた。或ひは、心中の寂寥をまぎらすために、山中の狼の聲を酒

の肴にでもする、そんな考へであつたかも知れない。
その頃になると、又別な、一つの流行がこの小さな村の生活にも起つてゐた。
それは百物語のやうなもので、勿論蠟燭消しまでは發展しなかつたが、まづ怪談會と云つた處だ。
夜寒をかこつて、よく晩飯のあとで人が集まつた。場所は大抵胸毛先生の家であつた。話はそれほどある譯ではない。誰かが、思ひ出話の中で、ひよいと氣味の惡い事を云つた。そんな事が發端になつた。その上、胸毛先生の住居は、前にも云つたやうに、そんな話には、もつてこいの處であつた。
「先生のお宅には、お二階があるのですね、梯子はどこですか」
若い學生の一人が何氣なく、そんな事を訊くと、誰かが、「さう云へば、この家の二階などは、少しくさいな」と云つた。
胸毛先生は、やをら一膝のり出した……
怪談の集ひは、誰から云ひ出すともなく、その後幾度か續いた。

或る晩のことであつた。夕刻一しきり驟雨があつて、後はたいへん爽やかな宵になつた。
胸毛の先生が、ひよいと庭さきから廻つてきて、聲をかけた時は、私も吃驚した。

「今晩もあるよ」と云ふ。
「雨もやんだし、いい星月夜ぢやないですか、どうもあんまり怪談には似合しくない」
私がさう云つて答へると、
「いや、ところがさうぢやない、今晩は特別、美人がくる、しかも二人くる」
胸毛の先生は少し焦れつたさうにさう云つた。
「美人は怪談にいいのですか」と私がきくと先生は一寸妙な顔して、「そりやあ、悪からう筈がない」と答へた。
實際、その晩は、隣屋敷は思ひがけぬ位大入りであつた。
男の人々は五六人であつたらう、その後からも、「やあ、遅くなりました」と云つて、平常は秋の講義の支度に夢中で、全く顔も見せないやうな、老先生が、學生を連れてやつてこられた。胸毛の先生は、一人くるたびに、「やあ、これはどうも」を連發して、座蒲團がないもので、大切にしてゐた、毛布を二枚持ち出し、「男の諸氏は、これに坐つて下さい」など云つた。
「座蒲團を敷いちや、いけないのかね」と誰かが云ふと「いや、さう云ふ譯ぢやないが、美人がくるのでね、女の人は、まさか毛布の上に並べて坐らせられない」ど如何にも、もつともらしい顔をして云ひ譯をした。
小半時遅れてから、懐中電燈で、狭い玄關の土間を照すものがあつた。「御免下さい」と云つて部屋に這入つて來たのは、例の、二階借りをしてゐる娘さんであつた。今夜は、セルの着

物に、羽織を重ねてゐた。
その女なら、もう一座の者はよく知つてゐた。先生の云ふ美人はこの女の事かと、一杯喰はされたやうな顏をした。すると、その娘さんに續いて、淑やかに膝まづいた人があつた。
年齡はきつとこの娘さんより三つ位上であつたらう、細面の、少し蒼白い顏の女であつたが、眸が如何にも涼しさうで、額のあたりがとりわけ美しく見えた。
胸毛の先生は、紹介の勞をとる樣子もなくいつもの人見知りらしい所を見せた。
「よくいらつしやいましたね、どうも少し無禮講で恐縮ですが」
さう云つて、眼鏡の先生が、どうやら取りなした。酒吞童子は一杯飮んでゐたらしく、いつもよりは大膽になつてゐたが、それでもちらりとそちらを眺めただけで、後はもう目のやり場に困るやうな風であつた。
娘さんの方は、中々快活である。
「私のお姉樣のやうな方でして」と云つて紹介したが、その話によると、英學塾あたりを四五年前に出たらしかつた。輕井澤の叔父さんの家に來てゐて、急に思ひ立つて、この村にやつて來たと云ふ。
「この方は、いつも、こんな風に突然いらつしやるのです」とも娘さんが云つた。
「高原地方はお好きですか」

眼鏡の先生が、お世辭のつもりで訊くと、「はあ、私は只雷が嫌ひなもんですから」と初めて口をひらいた。

「雷がお嫌ひでは、怪談の方もいけますまい」と老先生が鹿爪らしい聲で云ふと、それに續いて、「雷と云へば、私にはこんな話があるのです」と口を切つて、どうやら、お化け話が始まり出した。

その若い婦人は、話を聽いてゐる間、別に膝もくづさない、そして、たいして興味を持つてゐるやうにも見えないが、さりとて、退屈もしてゐないらしい、蒼白い面には絶えず微笑が湛へられてゐた。

私も話の最中、時々婦人の方を眺めた。

その晩の話にかう云ふのがあつた、それも新顏の男が話したものであるが、この人は前置として、「お笑ひになつては困りますが、私は、今迄に數回、不思議と云ふかともかく解釋のつかない目に逢つてゐます」と云つた。

この人の話によると、少年時代にもさう云ふ事があつた。それから靑年になつても二三回あつたと云ふのである。その中で特に印象の深かつたのは、少年の時の話であつた。

この人の隣家に勝子ちやんと云ふ少女がゐたと云ふ。この人もその勝子ちやんも十歳位であつた。たいへん仲よしで、よく庭の鞦韆に乘つて遊んだ。ところが、ふとしたことから、この勝子ちやんが病氣になつた、肺炎ででもあつたのだらう、短い間に、もう醫者も絶望だと云ふやうに昂進した。或る晩、この

人――少年の方も急に熱が出た、お母さんは枕もとにつききりであつた。すると、この少年は突然「母さん、勝子ちやんが來た」と叫んだ、少年には確かに、被布をきた勝子ちやんが見えたのである。母親はしつかりと少年を抱きしめてゐた、すると又少年が「鞦韆に乘つてゐるでせう、ほうら、乘つてゐるでせう」と叫んだ。そして、この時は、鞦韆のキイキイと云ふ音が、あたかも、その上に人が乘つてゐるやうに、母親の耳にも明瞭にきこえてきたのであつた。勿論風のある晩でもなかつた。
そして、間もなく、隣家から知らせがあつて、恰度、鞦韆の音をきいたと同時刻に、勝子ちやんは死んでゐた。
話はそれだけである。そしてその後で、この人はかう云つて附け加へた。
「その後、私の經驗したと云ふのは、すべて人體をはつきり見たのです、然し、これは私の解釋ですが、私の神經が少し異常で、錯覺を見る、どうもさうらしいのです」
胸毛の先生は話の途中で、庭に面してゐる背後の障子をそつと閉めた。
「貴方は勝子ちやんが餘程好きだつたのですね、ひよつとすると、それは怪談ではなくて實は貴方の初戀物語かも知れない」
例の老先生は、默つてきいてゐて、突然そんな事を口出した。
「はあ、お恥しいですが、ともかく僕は好きだつたのですね」
その人は意外に正直な告白をした。

胸毛の先生は今にも何か云ひ出しさうな顏をしながら、その實、默つて皆の前の湯呑に澁茶をついで廻つたりしてゐた。しかし面上には明らかに感銘の色があつた。感銘の色は胸毛先生だけではない、一座の誰の顏にもあつた。とりわけ、私の注意をひいたのは、例の若い婦人であつた。

若い婦人の面には、さきほどまでの微笑はもう全く消えてゐた。眸の色は、今迄にないくらい、強く輝やいてゐた。さうして、話がすんでしまつてからも、時折、ちら〳〵とその視線は、新顏の男の方に向けられてゐた。

一人だけ、默りきつて、少し退屈した風に、竹の皮に包まれた赤やうかんを頰張つてゐたのは、酒呑童子であつた。

その後、一人二人、何か話をした。「大町街道と云つて、信州から越後の國にぬける道がありますね……」そんな少し陳腐な前置をして話しだすものがあつても、以前ほど人々の氣をひかぬらしかつた。

「然し、幻覺を見ると云ふのはいやだなあ、貴方のやうに、今迄に幾度かそんな經驗があつたとする、すると、これから先も見るかも知れない、いやひよつとすると、今夜あたりも見るかも知れない」

胸毛の先生は、急に話を元に戾すやうにして、そんな事を云つて、そして、さう云つて置いて、一寸首をすくめる眞似をして、私の方を見た。

「御婦人方は如何です、一寸氣持が惡くおなりぢやないです

か」

眼鏡の先生が女の人達の顔色をうかがつた。

「いやあで御座いますわね」

娘さんは手で胸元を押へるやうにしてさう云つた。しかし若い婦人の方は、さきほどのまゝの、強い輝きを眸の奥に湛へたまゝ、身じろぎもしなかつた。

その時、突然酒呑童子が口を出した、しかも極めて冷然と、投げ出すやうな云ひ方で、

「幻覺もいいぢやないか、さつきの話の戀人とか、美人の幻ならば」

すると、例の話の主人公は、一寸にらむやうな目付で、酒呑童子の方を見たが、又急に氣持を變へたらしく、冗談めいた口調で、

「いや、今夜あたり、どうも幻覺が見えさうです」と云つた。

話がすんで歸り支度を始めたとき、私は、土間に懷中電燈を照して、皆の足もとを明るくしてゐた胸毛の先生に、小聲で囁いた。

「あの話をした人は御存知なのですか」

「知らない、誰が紹介したのかよく知らないのだ。會社員らしいね、脇本陣に泊つてゐる」

胸毛先生は、ぶつきら棒に答へた。

外は星が出てゐて、割合に明るかつた。

四

酒呑童子のゐる離れからは、間もなく大きな鼾聲がきこえてきた。然し私は容易に寢つかれなかつた。秋じみた蟲の聲がしきりに私の枕邊に通つてきた。

「もうやすんでしまつたかね」

硝子戸の外から聲がした時は、私も吃驚した。庭には、尻を端折つて、懷中電燈を提げた胸毛先生が立つてゐた。

私は立つて頭の上のスイッチをひねつた。

胸毛先生は、座敷に上ると、やれ〳〵と云ふ風な顏をして、

「どうも女の人には困るよ」と云つた。

若い婦人は、娘さんと同じ處に泊つてゐたのではなかつたらしい。一人きりで、脇本陣に宿をとつてゐたのであつた。

夜道であり、しかも怪談のあとだからと云ふので、氣をきかして、誰か送つてゆく事になつた。年配の點で、胸毛先生が一緒に行つた。

先生は女の人との道行きは苦手であつたらしい、仕方なしに、空を眺めて星の話をした。星の話は、先生中々得意の方であつた。「さうで御座いますことねえ、これだけ空に近いものです

か、東京などではこんな美しいお星樣は、眺められませんわ」

そんな話をして、若い婦人も至極爽やかであつた。ところが宿について、部屋の前まで送りとどけて、先生が歸らうとすると婦人は、一寸お待ち下さいと云つた。そして「恐入りますが、眠り藥はお持ち合せで御座いませんでせうか」と訊いた。

婦人の部屋には、もう床がとつてあつた。そして、婦人はその傍に、柱によりかかるやうにして坐つてゐた。その顏色は全く惡かつた。輕い眩暈（めまひ）の後のやうであつた。

胸毛の先生は廊下に棒立ちになつたまゝ、困惑しきつた表情をした。「あんな話がいけなかつたのですか、いつそ、貴女は娘さんの處に一緒に泊ればよかつた」さう云つて見た。すると、「私はどう云ふものか、人と同じ部屋ではやすめませんもので」と答へた。聲は極めて、はつきりしてゐた。少しも前とは變つてゐない……

胸毛の先生は、そんな話をかいつまんでするとき「まあ、君が起きてゐてくれてよかつた。時に、眠り藥と云ふものはあるかね」と私に訊いた。

私には、そんな藥は持ち合せない。先生はそれをきくと、がつかりして風で、

「そりやあ、こまるね、眠り藥を誰かに貰つてきてあげると云つて、やつて來たのだから、あのまゝ放つておくのも惡いから

「俺はとんだ役目を引き受けた」

私も先生が氣の毒になつた。私は鞄の中を手探つて見て、藥らしいものをさがして見た。

「こんなものならある」

私はアスピリンの箱と、炭酸の袋を持ち出して見せた。先生は、「これは風邪藥か、さうだ、この炭酸の方なら、ききもしないが、無害だね、噓も方便だ、これを眠り藥だと云つて、呉れてやらう」さう云つて、急に元氣づいた。

「然し眠り藥なんか、常用してゐる神經には、そんなごまかしが效くかしら」

私がさう云ふと、

「なあーに、そこは、あんた、暗示ですよ、女の人は暗示にかかりやすい」

さう答へると、先生は、炭酸を小さな紙に包みかへ、不精らしく立ちあがつた。

離れ座敷の鼾聲は、相變らずきこえてゐた。

先生は懷中電燈を提げて、庭下駄を穿いたが、着てゐる白絣が、へんに寒々しく見えた。

五

朝早くから厨の方で音がしてゐた。

私はまるで、夢の中でのやうに、ぼんやりそれを聽いてゐた

が、へんに頭が重く、容易に起きられなかつた。
　洗面道具をさげて厨に出て行つたときには、もう平常のやう
に朝飯の支度の最中であつた。
　然し今日は酒呑童子が一人で立ち働いてゐる。胸毛の先生は
傍にゐながら、破れ團扇も持たず、一向に手助けもしてゐない
やうだ。
「お早う」と聲をかけると、私を心待ちにしてゐたらしく、す
ぐこんな事を云つた。
「君、ゆうべの藥は役に立たなんだ」
　酒呑童子は相變らず、むつつりしてゐる。
「さうでせう、駄目だと思つた」さう云つて私が裏の流れの方
にゆかうとすると「實は俺も顔はまだだ」と手拭を顔にあてが
ふ眞似をして、胸毛先生も隨いて來た。
　一體、追分と云ふ所は、流れの水がとりわけ美しい。井戸が
あつても、私などは、洗面の時には、この水を使つてゐた。
　私が流れに跨るやうにして、齒を磨き始めると、先生も、私
と向ひあつた。
「いや、ゆうべは失敬した」
　さう云ふと、早速昨夜の續きを話してくれた――
　胸毛先生は、私の藥が役に立たなかつたと云つた。然し、そ
れは藥の效目がなかつたと云ふ意味ではない。先生が例の炭酸
の紙包をもつて、脇本陣にとつて返すと、玄關の燈ももう消え
てゐた。婦人の部屋は二階であつた。先生が襖の外から聲をか

けると「どうぞ」と云ふ聲が、しばらく間を置いてした。恐るおそるあけてみると、婦人はさつきと寸分違はない姿勢で、柱によりかかつてゐた。先生が藥をさし出すと「もう大變氣分がよくなりました」と答へ藥はのまなくとも大丈夫のやうですと云ふ。先生は狐に抓まれたやうな氣がした。それ以上骨折損と云ふ感じもした。「枕もとにでも置いておきなさい」と云ふと、婦人は一寸微笑を洩して、枕もとに置いておくと、ついのみたくなる。恐入りますが、お持ち歸り頂いた方が、と云ふ挨拶であつた。婦人の顏色は一寸もよくはなかつた。只その眸は、何か遠くのものを凝視してゐるやうな、そんなほのぼのとした色を呈してゐた。

胸毛先生は少し中腹（ちうつぱら）になつて宿を引き上げてきた。二三歩あるいたとき、後で音がした。ひよいと振り返つてみると、星空の下に、寢靜まつて、建物全體が一つの大きな影になつてゐるうちで、階下の一部屋だけが明るくて、今しがたの音は、窓をあけて、水を吐いたものらしかつた。人影は動いた……

先生はそこ迄一氣に話した。そして「その人影と云ふのは、例の男、あの幻覺の男らしかつたよ」とつけ加へた。

「話はそれだけですか」

私は何かまだありさうな氣がして訊いてみた。

「それつきりさ、お蔭で今朝は寢坊した」先生はさう答へた。

遠くの森は、薄ぼんやり霧がかかつてゐた。こんな日は、きまつて午後からいいお天氣になる。

胸毛の先生は流れに跨つたまま、顔を洗ひ始めたが「ぶるぶる、隨分水が冷たくなつたね」とこぼしてゐた。

その日の晝飯には、食卓の上に、珍らしく大きな鯉がのつた。眼鏡の先生にきくと、昨夜の若い婦人の贈物だと云ふ。お禮の意味が含まれてゐたものらしい。鯉をとどけてくれた脇本陣のお内儀の言葉によると、その若い婦人は午後に歸ると云ふことだつた。

鯉の料理は兎も角、無類に美味かつた。なにしろ脇本陣の老人の手料理である。中仙道の昔から、この老人の鯉は名代とされてゐた。

酒呑童子は珍らしく上機嫌であつた、胸毛先生の方を向くと、かう云つた。

「君の御蔭でありついたのだ」

「さうとも、この前は、君の御誕生日だし、君と云ふ人は鯉に緣がある」眼鏡の先生も橫合から口を出した。

然し、胸毛の先生は、今日は少しむつつりしてゐる。

「どうも、女の人と云ふのは譯がわからない」

胸毛の先生はやがて、そんな事を、私の方にむいて、口走つた。さうして、又しばらく間を置いて、

「ときにもう、怪談の方は、昨夜かぎりでよしにしようね」と、こんどは皆の顔を見較べながら、少し改まつた風にきり出した。

私は思ひがけなく、この若い婦人をもう一度見る機會を得た。
午後はたいへん氣持のいい日和になつた。
私が胸毛先生の宅の前を通りかゝると、恰度、そこには、人を待つてゐる風な、若い婦人と娘さんの姿が見かけられた。
若い婦人は「昨夜はどうも」と誰にでも云ふやうな挨拶をした。その面には、胸毛先生の云つたやうな、暗い翳も別になかつた。寧ろ、木洩れ陽のやうな靜かさが漂つてゐた。
「この方が急にお歸りになりたいとおつしやるので、先生の所に御挨拶に參りましたの」
娘さんがさう云つてゐるところへ、太い櫻の洋杖をさげた胸毛先生があらはれた。
私と目があふと「やあ、これは好都合、君も一緒に歩きませんか、この女(ひと)達を見送りかたがた」
先生はさう云つて、早速私を誘ひにかゝつた。
歩き出すと、明るい午後の陽射しは、まだ少し汗ばむ位だつた。そして、その美しい日射しの中には、何か人間の心に、恢復(コンバレッサン)の力を與へるものがあつたらしい。その上、娘さんの方は至極快活である。その快活にやがて先生も感染した。私も感染した。
追分には、迷路がある。草原を分けて、日の沈む方に歩いてゆくと、何處まで行つても涯しがない。まるで草叢の下にすつ

かり隠された小徑である——

先生は歩きながら、娘さんをつかまへて、そんな話をする。すると、水色の服をきた娘さんは「先生、それは素敵、中々ロマンティクだわ」と叫ぶ。そして、一人はしやいで、「その道を歩いてみませうよ」と云つた。

「今日はいかん、又の日だ。あの方の汽車に間に合はなくなる」

先生は一寸勿體をつける。

默つて歩いてゐた婦人は娘さんの方を見た。さうして腕時計を眺め「まだ大丈夫で御座いますわ、面白さうですこと、まゐりませうよ」と意外に氣輕に云つた。

水車が靜かに廻つてゐるあたりで、私達は流れに架けられた小さな橋を渡つた。最初は四人が竝んで歩いてゐた。それが二人づつになり、やがては辛うじて一人が歩ける位の、草の小徑を分けて行つた。

夏から秋への季節の移りかはりは、あの微妙な日の色に、一番よくあらはれてゐた、そして見渡される草原の遠近が、いとも鮮やかにその色を變へてゐた。

案内者の先生がいつのまにか殿になり、若い婦人は、和服のすらつとした背中を見せて一番前を歩いてゐた。

「先生、少し草臥れさう、一體ここん所をずつと行つたら、何がありますの」

娘さんは、少し甘えたやうな聲で訊いてゐる。

「そりやあ、別に何もないさ」

「ぢや、やつぱりつまらないわ」
「そのかはり、この草叢の下には、古い追分の夢が睡つてゐる……
……」
「あらいやだ、またお化けの話になりさうだ」
「いや大丈夫」
先生と娘さんの間には、そんな會話が取りかはされる。
若い婦人の方は、ゆつくり歩いてゐる。時々一寸立ちどまると、顔をもたげて、高原の眞晝の空を流れる、白い誘惑者のやうな雲を眺めてゐた。
「それは松蟲草、そのうすむらさきの花ですよ」
先生の話は、どうやら植物の方に移つて行つたらしい。
「それぢや、この花は」
娘さんが、又何か別の花を指さした。
「あゝそれですか、まてよ、よくある花だが一寸思ひ出せない」
先生はさう云ふと、後から私を呼びとめた。私は振りかへつた。だが私にも、その路傍にこぼれ咲いた可憐な花が、なんと呼ぶのかわからなかつた。
「勝子さん、御存知」
娘さんの甲高い聲が、はつきりと私の耳朶を刺戟した。
そして、若い婦人は靜かに後を振りかへつてゐた。口もとに靜かな、微笑を湛へて、
「間違つてゐたら御免なさいね。あの、荒地野菊と云ふのぢやなくつて、小さい時、私達はそんな風に呼んでゐたと思つたわ」

婦人は、娘さんの手にしてゐる野の花を、ぢつと眺めてゐた。
「荒地野菊、いやそれで結構、それに相應しい」
先生は感心したやうに云つた。そして私の場合は、その幾倍か感じ入るものがあつた。
然しそれは花の名前ではなかつた。私の記憶のどこかに、鞦韆の上の幻の少女——勝子が殘つてゐたものか——
急ぎ足で、昨夜の出來事が私の心の中を一周りした。
勝子さんは又靜かに前を向いて歩いてゐた。
先生と少女は又別の花を見つけてゐた。そして、そんな事は誰の心にも、もう消え去つてゐたのに違ひない、記憶の遠くの方に追ひやられて。
私は勝子さんの後から歩きながら、この明るい日の下では、似つかはしくない、小さな妄想をいそいで打ち消さうと試みてゐた。
歌聲が後で起つた。それは胸毛の先生の歌であつた。先生には、こんな趣味があつたかどうか、つひぞ私はきかなかつた。
先生は歌つてゐる、しかもドイツ語で歌つてゐる。野薔薇であるらしい。そして、少女が、低い聲でそれに和してゐる。
「あら、先生、そこんところは、一寸聲を落すのよ」
娘さんはさう云ふと、今度は、はつきりした日本語で歌ひ出した。先生の聲はもうきこえない。一筋の薄の原を、娘さんの若若しい聲が、いつまでもいつまでも、行つたり來たりしてゐた。

後記

津村秀夫

「最終の人々」は多分昭和十八年八月に戸隠山で書いたのであらう。九月に歸京して會つた時は非常に衰弱してゐたし、すでにアディスン氏病と決定したのでもあつたから、九月以後十二月までの間は、恐らく執筆の氣力も暇もなかつた筈である。十月、十一月は借家探しに沒頭してゐた。この小說は信夫の生涯で愛惜措く能はなかつた戸隱の人々の悲しみを歌つたものであり、火災のあとの舊家の生活に憐情をそそいだものである。彼の文學は、戸隱山を摑むことによつて初めて散文の世界に入つた。「戸隱の繪本」がその出發點である。彼は現代都會生活を嫌惡したが、彼の神經には恰も戸隱の山氣と圍爐裡端の夜ばなしと山女魚の燒いた香りが、最もふさはしかつたのであらうか。だが神社をめぐる傳統の色に染められた人々のこころが特になつかしかつたのであらう。彼は、戸隱山の中に夢と詩を求め、そこに生きてゐる人々の魂に淸淨なる息吹きを感じた。信濃と戸隱は彼の中に眠つてゐた日本のこころを呼び醒ましたのかも知れない。何人も彼の初期の詩が凡て北歐的情緖への憧れに發してゐたのが、「父のゐる庭」(第二詩集)に至ると變化してゐるのに氣付くであらう。「愛する神の歌」と「父のゐる庭」の

間の七年間は、彼の短い生涯の中でも最も重要でかつ樂しい時代であつた。その七年間に彼は結婚をし、父親となり、そして散文を勉强してゐる。しかもその散文では惡戰苦鬪した痕跡があるのだが、その間に彼の憧憬も感覺も變化したやうである。幼き青春の夢であつたエキゾティシズムも消える。かつての信濃の戀人は妻となつて彼の食卓の支度をする身となつてゐる。彼は憧憬を失つたが、さうかといつてどつかとあぐらを搔いて現實的な人生と格鬪するといつた風な人でもなかつたのである。彼はゴーゴリをかなり前から愛讀し、「ネヴスキイ通り」や「死せる魂」には感動してゐたものの、所詮は自らさういふ突きつめた文學の方向へ進むことを斷念する外はなかつた。ドストエフスキイの「白痴」や「惡靈」にも感激してゐながら、およそ彼の魂は現實の惡や醜には堪へられなかつた。實生活上の醜や惡に遭遇した彼は、時々憤激したが、それを冷靜に眺めたり、舌の上で味はひ、かつ思索することは到底できなかつた人である。さういふ彼が、戸隱山の自然と傳説と人情の中に、自ら美しい憩ひの園を發見したのも當然であつたかも知れない。つひに戸隱は彼の精神の生理にとつて必須な鹽となつたらしい。恐らくは「最終の人々」は彼の最後の小說といつて誤りなからうが、それを書き終つた時、皮肉にも彼の生命の方も燃燒しつくしたのである。ここにも幸福なやうな哀れなやうな「死せる魂」がある。これは死後、昭和二十一年十月の雜誌「プロメテ」創刊號に發表した。

「最終の人々」が若い者の書いたものとしては、ある澁い光りを底にたたへた寂し氣な小説であるに比し、「荒地野菊」には潑剌たる生命の躍動が感じられる。

「荒地野菊」は追分の夏の生活の產物で、彼の結婚の幸福と健康とが重なつてゐた時代の作であるが、遺稿を見ると、最初は「怪談」と題するつもりでゐたらしい。後にそれを消して「荒地野菊」と改めてゐる。昭和十四年夏か秋の作で、冗漫で饒舌な點もあるが、信夫のものとしては珍しく陽氣なのである。文章のスタイルも些か違つてゐる。ここには人間としての信夫の天性の滑稽味が珍しく出てゐるので、この集に收めたいと思つた。「胸毛先生」も要するに最後のあの女性の出現によつて光彩をおびて來るし、あの終りの夏の晴れた高原を行く數人の男女の描寫に、この作の陰翳が美しくきざまれ、靑春の香ばしい匂ひが出てゐるやうに思ふ。生への憧れといふか享樂といふか、さういつた活き活きした雰圍氣が、きらきらした眞夏の光線を背景に呼吸してゐる。但し怪談の集りの夜の描寫などはひどく拙いものである。

「碓氷越え」は三田文學昭和十三年十月號に發表した舊作であり、信州のある少女をめぐる小說である。

この集に收めなかつた「冬の旅」は十五年頃の作で、父の急逝した後に思ひ出のためと、感謝のこころとで執筆したものらしい。三度書き直してゐて遺稿も三通りあつた。これを氣負ひ込んで室生犀星先生にお見せしたが、何んでも褒めてもらへな

かつたので、當人は餘程がつかりしたらしい。それを妻の昌子にも傳へたといふ。まだ筆の稚拙な頃のものだが、故人が文字通り惡戰苦鬪したものである。內容が彼の人生の重大なある場面を描いてゐるが敢てここに採錄するのを遠慮した。

遺稿として比較的新しく書かれたものには、まだこの外に「少女」「越水」といふ戶隱山のことを書いた小品二篇があつたし、舊作には「秋晴れ」「アルプス中隊」「老夫婦」「木曾の魚」などといふ習作的な原稿が十篇ばかりあつた。何れも割愛した。

信夫は十八年の冬頃に「戶隱の語部（かたりべ）」といふ處女小說集を上梓するつもりで自分で編輯した。それはかつて「文學界」に發表した「草むら」の外に「御坊」「坊の娘」「戶隱の語部」「戶隱拾遺」等戶隱に關する短篇を中心にしたものである。これは恐らく當人も多少の自信を持つてゐたものらしいが、この「初冬の山」の內容はほぼそれと同じである。信夫の散文の面目は、この一卷と少國民風土記の「善光寺平」と「戶隱の繪本」との三冊だけで充分なのである。

彼は散文を書き、小說道に精進するために隨分と肉體を虐げた。自由詩のみに生命を賭してゐればもつと樂であつたらうに詩のみでは前途に何か物足らなさを感じたのであるらしい。本格的な小說を書くべき人でない人が、小說を志した苦しみの觀がなくもないが、目黑原町に新家庭を持ち保險會社を辭してからは、幾夜も徹して書いてゐた。焦慮もあつたのであらうが、

隨分と習作を篋底に遺してゐる。しかし初めからさういふ習作時代をくぐり拔ける覺悟で、發表のことを考へずにひたすら精進してゐた心根だけは、いぢらしいと思ふ。と同時に私は、今ではよくやつたと慰めてやりたい心地もする。

（二十二年十二月）

初冬の山

著者　津村信夫

發行者　東京都中央區日本橋茅場町一ノ二〇　岡澤一夫

印刷者　東京都板橋區板橋町三ノ六四　長谷川隆士

定價七拾五圓

印刷製本　東京都板橋區板橋町三ノ六四　帝都印刷株式會社

發行所　東京都中央區日本橋茅場町一ノ二〇　株式會社鎌倉文庫
電話茅場町六二三四・三九一五・三九一六
振替口座東京一九四九九二
（會員番號A二一一〇一二）

配給元　日本出版配給株式會社
東京都千代田區神田淡路町二ノ九